

限を來すのであつて、その制限の時期は家族支出が馬或は奴隷の扶養・養育のため  
の支出と同一原理に基いて行はれる場合よりも早く來るのである。この類  
同關係はこの點だけに止まらない。

奴隷は全幅能率の三必要要件——希望・自由・變化(2)——を容易に有し得ない。併  
し原則として抜目のない奴隷所有者は、醫藥を與ふると同一原理に基いて多少  
の煩勞・失費を厭はず、粗末な音楽その他の娛樂を與へんとする。蓋し經驗上奴  
隷の心氣沮喪は疾病同様、或はボイラーの爐を塞ぐ燃殻同様に空費だからであ  
る。所でもし奴隷の快適程度が甚だ上進して高價な快適品否奢侈品をさへ與  
へなければもはや體罰も死の恐怖も奴隷をして働かしむるに至らなくなれば、  
奴隷はこれら快適品・奢侈品を得ることになる。然らざれば奴隷は滅亡する。  
恰かも飼育の不十分な馬と同様である。而してもし百年前の英蘭の事實のや  
うに、主として食物獲得の困難が勞働賃銀を引下げること眞なりとすれば、勞  
働階級は即ちその數の減少によつて收穫・遞減の壓迫から解放されるかも知れ  
ぬ。

(2) 第四編第五章四を見よ。

併し今日の英蘭は於ては、  
口に對する壓迫は、  
源に對する壓迫は、  
極端な進歩に  
ては、賃銀の進  
率の増進に  
らつての進歩  
高まつての進  
よまりの進歩  
得るに能る

併し今日は然るを得ない。何となれば今日ばかりの壓迫がないからである。  
南北アメリカの廣大な農業地を連絡し濠洲と海洋とを連絡する鐵道の發達は  
多數の原因によるが、一八四六年英吉利諸港の開放は即ちその一原因であつた。  
最有利の事情の下に栽培された小麥は英吉利勞働者に與へられた。その量は  
その家族に十分でありその全部費用はその賃銀の小部分に過ぎなかつた。數  
の増加は、人類の欲望を満すために協働する勞働資本の能率を増進する新機會  
を多く與へる。即ち之によつて或る方面に於て賃銀を低めると共に或る方面  
に於て之を高めるかも知れぬ。新發展に要する資本量が十分の速度をもつて  
増加しさへすればこの結果となる。勿論英吉利人と雖も收穫遞減法則に左右  
されないのではない。廣大な處女草原を控へてゐる國の如く僅かな勞働をも  
つて食物を得ることは出來ぬ。併し英吉利人にとつての食物の費用は——今日  
は主として諸新國からの供給に支配されてゐるから——この國の人口の増加或  
は減少の何れによつても著しく左右されはしない。もし輸入食物と交換し得

る物の生産の上に於て英吉利人の労働能率が一層高まれば、英吉利人口の増加が急速なると否とを問はず、英吉利人は自身にとつての實質費用以下の費用で食物を得るであらう。

世界の小麦畑がその全幅の生産力を盡して耕作される場合には、或は英吉利諸港への食物の自由輸入が永遠に妨げられ、ばなほ早く英吉利人口の増加は即ち賃銀を低下せしめるかも知れぬ。或は少なくとも生産技術の不斷の改善によつて生ずべかりし賃銀増加を阻止するかも知れぬ。かゝる場合には、快適程度の上進は數の増加を制限することによつてのみ賃銀を高めることゝなるかも知れない。

併し英吉利人が豊富な食物を輸入し得るといふ現在の好運を持つ限り、英吉利人の快適程度の上進は單にそれが人口に及ぼす作用によつてのみ賃銀を高め得べきでない。なほまたこの上進を來すに用ふる手段によつては資本利潤率は低下し、遂には英蘭以上に資本吸収力を有する諸國に於て得べき利潤水準よりも遙かに低下するに至る。かゝる場合にはこの上進は英蘭の資本蓄積

人口數の平均的變化と活動の對照

を阻害するのみならず資本の輸出を早めるかも知れぬ。然らば英蘭の賃銀は絶對的に低下するのみならず世界の諸國に比しても相對的に低下することになる。もし他方に於て快適程度の上進が能率の大増進を伴ふとすれば、人口の増加が之に伴ふと否とを問はず、この上進は人口に比して相對的に國民分配分を増大し、實質賃銀の増加は永續的基礎を得來るのである。即ち労働者人口が十分の一減少しその各々が従前と同等に作業するとすれば、賃銀は左迄増加しまい。従つて各労働者の作業量が十分の一減少して人口に増減なしとすれば、賃銀一般は十分の一低落することになるのである。

團結強い一労働者團は自らの労働を稀少ならしめその以外の社會共同體員を犠牲として暫くはその賃銀を高め得るものと信ぜられてゐる。右の所論は勿論この信念に一致するものである。併しかゝる戰略は短かい時日に亘つてのみ成功するのであつて長い時日に亘つては殆んど成功せぬ。彼等が如何に強い反社會的障害物を設けて彼等の利得に與らんとする者を防止しても、必ず潛入者が入つてくる。ある者は障害物を乗り越し、ある者はその下を潛り、ある

單一の労働能率の進歩も、例外的に高し得ない

者は障害物を突き貫く。それと同時に發明が起つて、他の方法により或は他の場所から近づき來り、團結強き一團が自己の部分的獨占にありと看做してゐた生産物を得んとするに至る。更に彼等にとつて一層危険なのは、新しい物が發明され一般に使用されて略ぼ同じ欲望を満しながら彼等の労働を要せざるに至ることである。即ち暫時の後には、獨占を狡猾に用ひんと努めた人々の數は減少せずして反つて増加し、他面彼等の労働の需要の減退したのを自ら悟る結果になり易く、この場合には彼等の賃銀は甚だしく低落するのである。

### 三

労働時間の短縮によつて活動を規制せんとする努力。過度の労働時間は空費である。併し適度の労働時間を短縮すれば一般に生産高は減少する。従つて—それは直接結果として雇傭を刺戟することもあるが—やがて高率賃銀による雇傭量は減少せざるを得ぬ。労働者が餘暇を善用して一層高級廣

大な活動の發達を來さざる限りこの結果を導く。資本流出の危険。觀察事實の真正原因を定める困難。直接結果と間接結果とは往々反對方向に向ふ。

活動程度と  
労働時間との  
關係

産業能率と労働時間との關係は複雑である。もし緊張度が非常に大であれば人は長時間の労働によつて甚だ疲労し易く、ためにその最善を發揮して作業すること殆んどなく、往々遙かに最善以下となり或は怠惰となることすらある。一般原則—但し普遍的原則ではない—として人の作業は時間拂 paid by time の場合よりも出來高拂 paid by piece の場合に收約的であり、その然る限りに於ては出來高作業の行はれる諸産業に於ては殊に短かい労働時間を適當とする(3)。

(3) これらの事實は多く問題である。その理由は一には、これらの事實が産業によつて著しく異なることにあり、またこれらの事實を最も親しく知る者の見解は偏し易いことにある。労働組合が出來高作業を労働協約 collective bargaining によつて定め得れば、營業施設改善の最初の結果として實質賃銀は高まる。かくて同等困難・同等責任の作業を營む他の職業の賃銀との釣合をとるために出來高拂率の新適合を要求

する責任は雇主の肩に懸つて来る。かゝる場合には出来高作業は一般に被備者に利益である。被備者の組合組織の良い場合—鐵山作業の或る階級に於ける如く—には、均一ならざる作業についてすら被備者は出来高拂を是認するのである。併しその以外の多くの場合には被備者は出来高拂による利益が不公平ではないかを疑ふ。下記八を見よ。シユモラー Schmolter 教授によれば、労働者の人種と産業の性質、技術によつて相違はあるが、出来高作業は生産高を二〇乃至一〇〇パーセント増加するものと推算してゐる。Volkswirtschaftslehre, §208. 労働者は或る種の産業に於ては一般に結果拂 payment by results に反対し、ある種の産業に於ては之を歓迎する。コール Cole, The payment of wages, ch. II. はその原因を詳細に述べて教ふる所が多い。

作業の時間性質、作業を行ふに當つての生理的條件及び作業報償方法の如何によつては肉體或は精神或はその兩者の多大の消耗を生ずる場合がある。また能率必需品 necessities for efficiency の一部たる餘暇・休息・休養の缺けてゐた場合もある。かゝる場合には社會一般の見地から見て労働は空費されてゐたのである。恰かも個人資本家の立場から見てその馬或は奴隸を過度に作業せしめ或は食物を十分に與へなければ空費であるのと同様である。かゝる場合に労働時間を適度に減少すれば國民分配分は單に一時的に減少するに止まるであ

餘暇・休養  
は之を善用  
すれば經濟  
に資する所  
がある

らう。蓋し生活程度の上進が時を経て労働者能率の上とその全幅の結果を現はし來れば、労働者の精力・智力・性格力は増進して従前よりも短かき時間内に従前と同等の作業を爲し得るに至るからである。即ち物質的生産の見地から見てすら終極の損失は少しもあるまい。罹病労働者を病院に送つて體力回復を計るために生ずるべき損失に比して損失は決して大とはならぬであらう。過度の作業から男子を救ひ出し、更に一層熱心に女子を救ひ出すは、來るべき時代の人々の利益である。少なくとも次の時代の人々に豊富な物的富を譲り渡すによつて之を行ひ得る限りは然りである。

最低等級の  
労働者は例  
外的場合

右の所論は新らしく得られた休養・餘暇が生活程度を高めることを假定する。また茲に考察し來つた極端な過度作業の場合にはかゝる結果は殆んど確實に生じて来る。蓋しかゝる極端な場合にはたゞ單に緊張度を弛めることが生活程度上進の第一歩を踏み出すための必要條件だからである。正業にある労働者はその最低等級と雖も甚だしく過度の作業を爲すことは稀である。併し彼等は殆んど氣力を有せぬ。彼等の多くは過度に緊張し切つてゐるから、恐らく

暫時の後には長き労働日に現在營むと同じ作業を短かき労働日に營むに至る  
かも知れぬ(1)。

(1) 大英國産業史は、労働時間の變化が生産高に及ぼす影響如何についての實驗を提  
供する。その實驗は最も變化あり最も明確であり最も一般的教訓に富んでゐる。  
併しこの問題に關する國際的研究は殊に獨逸に多いやうである。例へば Bernhard,  
Höhere Arbeitsintensität bei kürzerer Arbeitszeit, 1909 を見よ。

更に一部の生産部門は高價な營業施設を現在一日僅かに九時間乃至十時間  
利用するに過ぎないから、八時間—或は更に短かい時間—の二交替制を漸次採  
用するを利益とするであらう。この變化は漸次に行ふを要するであらう。蓋  
しかる案を行ふに適する工場工場の全部に亘つて直ちにこの案を採用す  
るには未だ熟練労働者數が足りないからである。併しある種の機械が磨滅し  
又は舊式となつた場合には以前よりも小規模に補充されて行くかも知れぬ。  
他方に於て多くの新機械は十時間労働日では採用を不利とし十六時間労働日  
ならば採用を利益とするであらう。一旦採用された曉には更に改良されて行  
くであらう。即ち生産技術は一層速かに進歩し、國民分配分は増加することゝ

一部に於ては  
生産縮つと  
短時間制  
交替制と  
二時間共  
を共に一  
を無一行  
關係者に  
利んどあ  
る害に切  
有

なる。労働者は資本の發達を阻害せず或は賃銀安き國へ資本を流出せしめず  
して一層高き賃銀を收め得ることゝなり、社會の一切階級はこの變化によつて  
福利を受けるのである。

以上の考察の重要なることは年毎に愈々明白となりつゝある。何故かと言  
へば、機械は愈々高價となりその舊式となる速度は愈々速くなつて、疲勞を知ら  
ぬ鐵鋼鐵を二十四時間中の十六時間無爲に放置することは愈々もつて力の空  
用となりつゝあるからである。如何なる國に於てもかゝる變化は各労働者の  
純生産物従つて賃銀を増加することゝなる。何となれば機械營業施設工場地  
代その他の費用として一労働者の全部生産高から差引くべき高が著しく減少  
するからである。併し分けてもアングロサクソンの技術工に於て然りである。  
彼等は手際の精確なることに於て如何なる民族にも譲る所なく、精力持久の點  
に於て一切民族に優れてゐる。もし彼等にしてその機械を一日十六時間全速  
力に運轉するならば—例へ自らは一日僅かに八時間しか働かぬとしてもなほ  
且つ—如何なる他民族にも立ち勝つてその純生産物を増加することゝなるの

である(5)。

(5) この問題の全體についてはチャプマン Chapman 教授の大英學術協會に於ける一九〇九年の講演を見よ。この講演は *Economic Journal*, vol. XIX に發表されてゐる。二交替制は英蘭よりも大陸諸國に多く用ひられてゐる。併し大陸に於けるこの制は公平な實效を現はしてをらぬ。蓋し労働時間が非常に長いため、二交替制は殆んど徹夜作業を伴ふからであり、また夜間作業は必ず晝間作業に劣るからである。その劣るのは一には夜間作業を爲す者が晝間完全に休息せぬからである。以上の案に對して若干の實際的反對の生じ得るは疑ふ迄もない。例へば二人の労働者が機械看視の責任を分擔すれば一人の労働者が單獨に之を取扱ふ場合に比して機械の手入が不行届となり、而かも作業不完全の責任を決定することが時に困難だからである。併しかゝる困難は機械と作業とを共同作業者に全任すれば大部分之を壓倒し得る。更に事務所設備を十六時間労働日に適するやうに改めるは稍や困難であらう。併し雇主及びその職工長等はこれらの困難を壓倒し得ぬものとは見てゐない。經驗の教ふる所によれば、労働者も最初二交替制に對して感ずる嫌惡の情を直ぐ様壓倒するものである。第一組の労働者は正午に作業を終つて第二組はそれから作業を始めるとしてもいゝ。或は第一組は一假りに一午前五時から午前十時迄、午後一時三十分から午後四時三十分迄作業し、第二組は午前十時から午後一時十五分迄、午後四時四十五分から午後九時四十五分迄作業するとしてもいゝ。この方

が恐らく右に勝つてゐるであらう。この二組は各週末又は各月末に交替すればいゝ。もし高價機械の威力が筋肉作業の各部門に普及し、この普及が全幅の影響を現はして労働時間が著しく八時間以下に短縮するとすれば、二交替制の一般的採用を必要とするに至るであらう。

さりながら茲に記憶せねばならぬことは、右特定の場合について労働時間の短縮を唱道するは高價營業施設を使用し—又は使用し得る—生産業にのみ限ることこれである。また多くの場合に於ては交替制は既に實施されて營業施設は殆んど四六時中作業してゐることを記憶せねばならぬ。例へば一部の鑛山及び鐵道作業の一部の部門の如きである。

従つて右以外の多くの生産業に於ては労働時間の短縮は確實に直接當面の生産高を減少し、而かも一人當りの平均作業を従來の水準迄高めるやうな急速な能率増進は決して起らないのである。かゝる場合には、右の變化は國民分配分を減少し、その結果たる物質的損失の大部分は労働時間を短縮した労働者に掛るであらう。一部の生産業に於て労働稀少性がその以外の社會共同體員を犠牲として可成り長くその價格を高めることあるは眞である。併し原則とし

併し多く  
生産に於  
ては労働  
時間の短  
縮は少な  
く生産を  
減らす

て労働の實質價格が騰貴すれば、その結果一には代用品使用の増加によつて  
一その生産物の需要は減退し、一層不利な生産業から新労働の侵入を招くこと  
となるのである。

四

人は通常單に労働を稀少ならしめることによつて一般に賃銀を高め得るも  
のと信じ、その信念は非常に強い。よつてこの信念の強い所以の説明を試みて  
見たい。先づ最初に、一變化の直接結果と永續結果とが如何に相違するか、否往  
々如何に相反してゐるかを體得するは困難である。一電車會社の事務所の外  
に適任求職者が就職を待つてゐる場合には、既に就職せる者はその地位を維持  
せんことに熱中して賃銀引上げに熱中しない。これら就職希望者がゐなくな  
れば雇主は賃銀引上の要求に抗し得ざるに至る。人は之を見て次の事實に著  
眼する。即ちもし電車従業員の労働時間が短縮され而かも現在線の電車運轉  
哩數が減少しなければ雇用従業員を増員せねばならぬ。恐らくその一時間賃

労働時間が賃銀の  
短縮が及ぼす  
一般に及ぼす  
影響を直接考  
察するに接合  
果は直つて終  
必しもつて終  
極結果をもた  
ずれば忘れぬ  
はるべきならぬ

銀は高まり、一日賃銀の高まることも可能である。また彼等は次の事實を見て  
ゐる。即ち一企業例へば一家屋の建築或は一船舶の建造を始めた場合には如  
何なる代價を支拂つても之を完成せねばならぬ。中絶は何等の利得を齎さぬ  
からである。その場合一労働者の營む作業擔當量が大きければ大なる程、他の勞  
働者の營む作業擔當量は愈々少なくなる。

併しこれらの結果以外に一層重要な一但しかく迄著しくない一諸結果を考  
量する要がある。例へばもし電車従業員及び建築職工が人為的にその労働を  
減少すれば電車の延長は阻害されるであらう。電車の運轉製作のための雇用  
人員は減少するであらう。電車を利用すべかりし多數労働者その他は市内へ  
徒歩で通ふであらう。郊外に庭園と新鮮な空氣とを有すべかりし多數の人々  
は市内に密居するであらう。諸階級一殊に労働階級一は本來求め得べき筈の  
優良住宅設備を求め得ぬに至るであらう。また建築は減少するに至るであら  
う。

要するに労働を減少して賃銀を永久に高め得るとの議論は次の假定に基づ

また固定不

變の作業基  
本の存せぬ  
ては忘れぬ

いてゐる。即ち永久的な固定不變の作業基、work-fund 即ち労働價格の如何を問はず營まらすべき一定作業量が嚴存するとの假定である。この假定には何等の基礎もない。反對に作業に對する需要は國民分配分から來る。即ち作業から來る。一種の作業が少なくなれば他の諸種の作業に對する需要も少ない。労働が稀少ならば企業の數も少なくなるのである。

更に雇傭の永續性は産業交易の組織に依存し、また供給を行ふ者が來るべき需要と價格との變動を豫想し之に従つて如何なる程度迄その行爲を適合せしめ得るかに依存する。併し之を行ふに短時間の作業が長時間の作業に勝るといふことはないであらう。且つまた雇傭主がその工場に高價機械を用ゐてゐる場合には雇主は容易に工場閉鎖を欲しないのであるが、二交替制を伴はざる労働時間の短縮を行へばこの高價機械の使用を妨げることゝなる。殆んど一切の人爲的作業制限は摩擦を伴ふ。従つて雇傭の中斷性を減少せずして反つて増加する傾がある。

また國民分

もし左官又は靴製造工が外部の競争を排し得るとすれば、彼等は——労働時間

配分の阻害  
は總て一部  
の労働階級  
の負擔とな  
ることを忘  
ぬるべし

の短縮によるとその以外の如何なる方法によるとを問はず——單に各人の作業量を減少することによつて賃銀を高める好機會チャンスを有すべきは眞である。併しこれらの利得は他の人々の國民分配分——即ち國の一切産業に於ける賃銀利潤の源泉たるもの——の取得分に一層大なる總體損失を與へるといふ犠牲によつてのみ得られものである。この結論を強めるのは次の事實である。その事實とは經驗の實證し分析の説明する事實である。即ち労働組合の戰略によつて賃銀の高まつた最も著しい場合はある種の産業部門に限られてゐる。この種の部門では、労働需要は直接的 direct に非ずして、幾多産業部門の協働による生産物の需要から誘導され『派生』derive するのである。蓋し戰略に秀でた何れかの部門は他の諸部門に歸すべき終極生産物の價格の若干取得分を自ら吸収し得るからである(6)。

(6) 上記第五編第六章二を見よ。

五



國民分配から生ずる損失は、生計に於ける資本の負担を過度に増進せしめるに過ぎぬ。

そこで労働供給の阻害によつて賃銀を一般的・永続的に高め得るとの信念の強い第二の根據である。この根據はかゝる變化が資本の供給に及ぼす結果を過小視することにある。

(假りに)左官又は靴製造工の生産高減少によつて生ずる損失の若干負擔分が労働階級に屬せざる人々の負擔となるは事實である——而かもこの點だけについて見れば一の重大な事實である。この損失負擔分の一部は勿論、建築又は靴製造に人的・物的資本を沈下せしめた資本主雇主の負擔となるであらう。その一部は家屋又は靴の使用又は消費者中の富裕者の負擔となる。なほ一切労働階級が一般的企圖によつて労働の實效供給 *effective supply* を制限して賃銀を高める場合には、國民分配分の縮小による負擔の多大の部分は疑もなく國民中の他の諸階級の負擔となり、殊に暫くは資本家の負擔となることになる。併しそれは單に暫くの間過ぎぬ。蓋し資本投下の純收穫が著しく減少すれば資本の新供給は迅速に國外に驅逐されるからである。尤も時にはこの危険について、國の鐵道工場は之を輸出し得ぬといふ主張も出る。併し殆んど總ての生

産材料及び大部分の生産要具は年々消費され或は消耗し或は時勢遅れとなつて之を補充する要がある。その補充の規模が縮小し、かくして自由となつた資本の一部が輸出されれば、この兩者によつて數年の間に國內労働に對する實效需要は恐らく著しく減少し、遂には反動として賃銀は一般に遙かにその現在水準以下に減少することとなる(7)。

(7) 之を例解するため、靴製造工と帽子製造工とが同一等級に屬し労働時間の一般短縮の前後共同等時間作業し同等賃銀を得ると假定する。すればこの變化の前にも後にも、帽子製造工はその一ヶ月の賃銀をもつて靴製造工一ヶ月の純生産物に等しい數の靴を買ひ得る筈である(第六編第二章七を見よ)。もし靴製造工が従来よりも労働時間を短縮しその結果作業を減少すれば、彼の労働の一ヶ月の純生産物は減少してゐるべきである。二交替制によつて雇主とその資本とが労働者二組分の利潤を得たか、或は生産減少高の全量だけ彼の利潤を切り下げ得たか、その何れかによらざる限り右の結果を來すべきである。この最後の推定は、資本・企業力の供給を支配する諸原因について吾々の知る所に矛盾してゐる。従つて帽子製造工はその賃銀をもつて以前のやうに靴を買ふを得なくなる。他の生産業についても總て之と同様である。

國際的貨銀  
運動、その  
可能性は少  
ない

資本移住には如何なる場合にも多大の困難はない。併し資本所有者は營業上の理由により、またその情に於て國內に之を投下せんと欲する。従つて生活程度が上進して國が一層住み心地よくなれば、資本投下の純收穫の減少が資本の輸出を來す傾向を或る程度迄相殺するに相違ない。他面に於て生産高の減少を來す反社會的術策によつて賃銀を高めんと企てれば、富者一般は國外に驅逐されるは確かである。殊に勞働階級にとつて最も重要な敢爲力と困難征服の喜悅とを有する資本家階級に於て然りである。蓋し彼等資本家の寸時も止まぬ主動性は國民を指導し之によつて人の作業は實質賃銀を高め得るものであり、他面能率を高める生産要具の供給増加を促進し、之によつて國民分配分の増大は持續し得るものだからである。

さりながら—如何なる方法によるを問はず—賃銀が一般的に高まりそれが全世界に普及するならば、資本は世界の一部から他の一部に移住するを得ぬことも亦た眞である。吾々はやがて筋肉勞働の賃銀が全世界を通じて高まらんことを希望する。その引上は主として生産増加によるのであるが、なほ一部は

利率の一般的低落の結果であり、能率ある作業と教養—これらの言葉の最高最廣の意味に於てすら—とを供するに必要な程度以上に大なる所得の—例へば—絶對的ならずとも—相對的減少の結果である。併し能率を増進せずして反つて之を低下せしむる手段によつて快適程度を高める如き賃銀引上法は反社會的であり且つ近視的であつて、迅速な反動的弊害を招くに至る。且つかゝる方法は恐らく世界の廣大な部分を通じて採用される望は殆んどないのである。もし數國がかゝる方法を採用すれば他の諸國は驀地に生活程度・能率標準の上進に進んで、賤しい制限政策を採る諸國から迅速に多大の資本と最優秀の活動力を引き去つて了ふのである。

## 六

以上の論究に於ては一般推理による必要があつた。蓋し經驗に直接依頼するは困難であり、もし輕々に之に依頼すれば論究を誤るの外ないからである。吾々が賃銀統計・生産統計を調べる場合には、右の變化の直後なるとその變化に

かゝる場合  
に經驗に依  
頼するの困  
難

續く長い期間に亘るとを問はず、顯著な諸事實は吾々の研究せんと欲する原因とは別個の原因を主として生じてゐることが多い。

即ちもし罷業成功の結果時間の短縮となつた場合には、その成功の蓋然<sup>チャンス</sup>は罷業のために選んだ時がよかつたことから生じてゐる。その時とは労働者が戦略上有利の地位にあつた時であり、生産業の一般條件が好望であつて労働時間が短縮されなくとも賃銀の高まり得べかりし時である。従つてこの變化が賃銀に及ぼす直接結果は眞實有利なる以上に有利に見えることが多い。更に多くの雇主は一方に契約を結んでゐて之を履行する義務があるから、從來長い労働日に對して支拂つてゐたよりも高い賃銀を短かい労働日に對して暫くは提供するかも知れぬ。併し之はその變化が急激であつた結果であつて鍋の中の一飛沫に過ぎぬ。また一層前に述べた通り一かゝる變化の直接結果は後れて發生し従つて一層持久的な結果とは反對方向に向ひ易いのである。

他方に於て労働者が過度の作業を營んでゐた場合には、労働時間が短縮しても彼等は直ちに強健となる譯には行かぬ。労働者條件の肉體的・精神的改善及びその結果たる能率の増進従つて賃銀の増加は直ちには現はれ得ないのである。

なほ時間短縮後の數年間の生産統計・賃銀統計は多くの國の繁榮の變化を反映する。殊に問題の生産業生産方法貨幣購買力の變化を反映する。時間短縮の諸結果を遊離 *isolate* するは、荒海の中に一個の石を投げてその石が波に及ぼす諸結果を遊離すると同じく困難であるかも知れぬ(8)。

(8) 例へば濠洲の八時間制採用の歴史を見れば、他の事情に重大な變動あるを知るのである。鐵山の繁榮と金の供給、牧羊農場の繁榮と羊毛價格、濠洲労働者を雇用して鐵道その他の建設に要する諸舊國資本の借入、移住、商業信用等の上に於ける大變動即ちこれである。これらの大變動は濠洲労働者條件の變化の非常に有力な原因であつたから、労働時間が總労働時間十時間―食事時間を差引いて純労働時間八時間四分の三―から純労働時間八時間に減じたための諸結果は全然その陰に隠れて目に見えなかつた。濠洲の貨幣賃銀は時間短縮前に比して遙かに低くなつてゐる。尤も貨幣購買力が増加したため實質賃銀は低落してゐないとも言へるであらう。併し労働時間短縮前の濠洲の實質労働賃銀は英蘭の實質労働賃銀に比して多かつたのであるが、今日は殆んど當時の如き差を示さぬことは疑ないやうに思ふ。また

この實質賃銀が右の變化なくして得られた筈の實質賃銀よりも低くないといふことは證明されてをらぬ。濠洲はこの變化を行つて間もなく諸種の商業上の困難に會つたが、之は勿論主として無謀な信用膨脹と共に起つた數次の早魃に原因してゐた。併し労働時間短縮の經濟的能率を餘りに樂觀視した結果、時間短縮に適せぬ諸産業に於て尙早の時間短縮を斷行したこともその一因となつたやうである。

然らば吾々は二つの問題を混同せぬやう注意せねばならぬ。即ち一原因がある一結果を生ずる傾あるか否か、及びこの原因が確實にこの結果を伴ふか否かの二問題である。水槽の吐口を開けば水槽内の水の水準は低下する傾がある。併し同時に水槽の他端から一層大なる水の供給が入つてくる場合には、吐口を開いた結果水槽内の水の水準は高まるかも知れぬ。同様に從來過度の作業を營んでをらず且つ二交替制採用の餘地もない生産業に於て労働時間を短縮すれば生産高は本來減少する傾あるにも拘らず、他面に富知識の一般進歩に基く生産増加がこの時間短縮に伴ひ來ることも極く有り勝ちである。併しこの場合には賃銀は時間が短縮された一結果として、やなくにも拘らず増加したと言ふべきである。

## 七

労働組合の元來の目的は労働者に獨立を與へ之によつて賃銀を引上げるのみならずその生活程度をも高めることにあつた。この努力の成功は即ち彼等の主要武器たる共同規約の重要な所以を實證する。併しこの規約の字句に拘泥して之を強行すれば、不當の作業標準化を來し企業を妨害し資本を反撥し、なほその以外の諸弊害によつて労働階級のみならずその以外の國民をも害し易い。

近代の英蘭に於ては以上論じ來つた種類の運動は悉く労働組合が之を動かしてゐる。労働組合の目的と結果とを詳細に論考するは本書の範圍外である。蓋し之がためには團結一般産業變動外國貿易の研究を基礎としなければならぬからである。併し労働組合の政策中生活程度作業程度賃銀と最も密接に關聯する部分について茲に一言しておきたい(9)。

労働組合が  
生活程度を  
作業程度に  
影響を及ぼ  
す

(9) 労働組合に關する簡單な暫定的叙述は私の『經濟學要論』Elements of Economics 第一卷に載せておいた。この書はこの點を除けば本書を簡約したものである。労働委員會最終報告 Final Report of the Labour Commission, 1903 には労働組合の目的・方法が載つてゐるが、之は雇主團體及び異常な能力・經驗を有する労働組合指導者の報告であつて唯一の權威あるものである。

ある時代のある労働者團の収入と産業政策とは次の時代の該團の能率・収入力に—善くも悪くも—影響を與へるが、この影響は産業の變化性・流動性の増大によつて不明瞭になる(10)。労働者はその家族所得の中から子弟の養育・養成費を支辨せねばならぬが、この家族所得が今日單一の生産業から來ることは稀である。子が父の職業に入ることはもはや從來の如く多くない。ある職業の収入によつて養育された者の中の強者・奮闘者は多く他の職業に一層の立身を求める。之に反して弱者・優柔者は多くその職業以下に下る。従つてある特定労働組合が組合員の賃銀引上げを努力する場合に、その努力が豊かな實を結んだ結果この高い賃銀によつて養育された次の時代の者の生活程度・作業程度を高めたか否かといふ問題を、經驗の實證によつて論ずることは愈々困難となり

つゝある。併し若干の廣汎な諸事實は明白に現はれてゐる。

(10) 上記第六編第三章七・第五章二を見よ。

労働組合の  
初期の努力  
はその賃銀  
のみならず  
生活程度を  
高めること  
に力をつく  
す。

大英國の労働組合の元來の目的は、賃銀率と密接に關聯してゐたと殆んど同じに生活程度とも密接に關聯してゐた。當時法律は手前勝手プロテクトの自家利益のためには賃銀を規制せんとする雇主團結を—一部直接に一部間接に—支持し、嚴重な刑罰を設けて被傭者側の同様の團結を禁止してゐた。この事實は即ち労働組合の最初の大刺戟となつたのである。右の法律は些か賃銀を引下げた。併し労働者性格の強固と充實とを引下げたことは之よりも甚だしかつた。労働者の視野は一般に非常に狭小となり、國事に關する鋭敏・聰明な興味によつて彼等をその狭い天地から引出すことも出来なかつた。即ち彼等は自己・家族・近隣者の直接當面事以外には殆んど世事を考へることもなく之に留意することもなかつた。同職業者との團結の自由は當然労働者の視野を廣めその考ふべき事項の範圍を大ならしめ、その社會義務—假へこの義務は多大の階級利己心の色彩を帯びるとしても—の標準を高めるべき情勢にあつた。即ち労働組合運

動初期の奮闘は、雇主が團結する如く労働者も團結し、雇主が自由に爲し得た所は労働者も亦た之を爲し、もつて雇主に對すべきであるとの主義を立てるためであつた。この奮闘は結果に於て賃銀引上げのための奮闘であつたのみならず、同時に眞の自重心と廣大な社會的利害とに相應はしい生活條件を獲得するための努力でもあつたのである。

この方面に於ては労働階級は完全無缺の勝利を収めた。労働組合主義 *Trade unionism* によつて熟練技術工は——否不熟練労働者の多くの階級すらも——諸大國民の外交上に見ると同じ莊重・自制・威嚴・先見をもつて雇主と交渉し得るに至つた。この主義によつて労働者は、單なる侵畧政策の愚策なる所以、及び軍備の主たる用は有利なる平和を維持するにある所以を一般に認むるに至つたのである。

多くの大英國産業に於ては賃銀調節のためにする協議會 *Board of Trade* が堅實圓滑に効果を擧げつゝある。何となれば人は些事のために精力を浪費するを避けんと欲して止まぬからである。一被傭者が自己の作業又は作業報酬について

性格に及ぼすこの影響は、結實して賃銀調節のためにする協議會とな

り効果を擧げつゝある

雇主又は職工長の下した判定を不當とする場合には、雇主は先づ最初調停者として労働組合書記長を招く。雇主は一般にその書記長の評決を容れ、職工は勿論その評決に従はねばならぬ。この特定の個人的争議の中に主義上の問題が横つてをり、協議會が之について何等明白な一致點を見出し得ない場合には、雇主團體の書記長と労働組合書記長との會議に問題を移して討論する。もしこの會議の意見が一致しなければ問題は協議會に移るかも知れぬ。最後に争議問題が非常に重大で何れの側も屈服しなければ罷業或は工場閉鎖 *lock-out* によつて問題を力の決定に委ねる。併し労働組合組織は既に數代を經過してゐるから、かかる場合に於てすらもその組織の致す善良な奉仕は争闘の態度の裡に現はれて来る。その方法は一般に一世紀前の雇主被傭者間の争闘方法とは非常に趣を異にしてゐる。恰かも名譽を尊重する近代文明人の戦争が野蠻人の兇惡な單獨戦と非常に異なるに等しい。内に斷乎たる目的を藏し之を包むに自制・穩健の態度をもつてするは國際労働會議に於ける大英國派遣委員の特色であつて、他國委員に比し正に鷄群の一鶴である。

高貴は義務を要求する

即ち労働組合の奉仕は大である。併しその奉仕の大なることは即ち之に相應する義務を労働組合に課する所以である。高貴は義務を要求する。Nolesse oblige. 特定考案による労働組合の賃銀引上力を誇張する者あらば、労働組合は之に向つて疑の目を放つ義務がある。殊にその考案が反社會的分子を含む場合に於て然りである。尤も如何なる運動にしても非難を受けぬものは殆んどない。偉大にして善良なる努力には殆んど總て若干の破壊的影響が潜んでゐる。併し吾々は弊害の外見美を悉く剥ぎ取つて之を綿密に檢しこの弊害を抑壓すべきである。

八

共同規約は善きにも悪きにも同じく労働組合の主要手段である

労働組合が雇主と對等の地位に立つ交渉力を得るに至つた主要手段は『共同規約』 Common Rule である。即ち一定階級の一時間の作業或は更に一階級の出來高作業に對して支拂はれる標準賃銀 standard wage に關する共同規約である。慣習と公安裁判官 Justices of the Peace の下した稍や實効力に乏しい賃

雇主の競争は賃銀の純生産物を労働者に提供するに過ぎない

銀裁定とは、一面に労働者の上進を妨げたけれどもこれ亦た労働者を保護して極端な壓迫を免れしめた。併し競争が自由になつて以來、孤立の労働者は雇主との取引上不利益の地位に立つに至つた。蓋しアダム・スミスの時代に於てすらも、雇主は一般に公式非公式の協定を結んで労働雇傭の際に互に他よりも高い賃銀を提供せぬやうに努めてゐたからである。また時の推移と共に單一の營業が往々數千の労働者を雇傭し得るに至つて、該營業はそれ自體一小労働組合よりも大にして且つ一層團結強い取引勢力となるに至つた。尤も互に高い賃銀を提供せぬための雇主の協定・諒解は普遍的でなかつたこと、且つその協定・諒解を回避し或は破つた者のあることは眞である。増用労働者の労働に基く純生産物がその労働者への支拂賃銀よりも著しく大であつた場合に、進取的雇主が同業者の憤慨を顧慮せず賃銀を増加して労働者を吸引したことも眞である。また進歩的な産業地域に於てはこの競争の結果として労働者の多數は決してその純生産物の等價よりも遙かに少ない賃銀を永く受けることなきやう保障されてゐたのも眞である。茲に再び切言してよく必要が

あるのは、この純生産物—正常能率ある一労働者の賃銀は之に近づく—は正常能率ある一労働者の純生産物であるといふ事實である。之を切言する必要があるのは、共同規約の極端な強行を唱ふる一部の人が次の如き極端な提論を爲したからである。即ち競争は能率ある労働者の賃銀を非常に能率少ない労働者—即ち雇主が殆んど雇傭せんと欲し得ない程の労働者—の純生産物に等しからしめんとする傾があるとの提論である(11)。

(11) 労働組合指導者は多くの方面に於て社會福祉に健全な影響を及ぼすものであるが、この影響は右の點に關する誤解によつて汚され易い。これらの組合指導者はその依據する權威として通常ウェブ Webb 夫妻の『産業民主主義』Industrial Democracy を擧げる。本書は内容充實した勝れた著書であるが、本書に既に右の誤解が暗示されてゐる。即ちウェブ夫妻の言ふには(同書七一〇頁)『經濟學者の評決』の章で明かになつた通り、茲に次の點が理論的に立證された。即ち「完全な競争」と職業間の完全な移動性とがあれば、賃銀の通常水準は「限界労働者」—即ち全然雇傭されざらんとする境にある労働者—の賃銀に基く純生産物以上に出でなくなる傾があるといふことである。また(七八七頁以下の註)同夫妻は産業痲疾者或は細民としてのこの限界労働者に言及して言ふには「もし各労働階級の賃銀が完全な競争の下にその階級中の

それは賃銀を  
一般に労働能率  
に依るもの  
低い賃銀を  
純生産物に  
適合せしめ  
ない

の限界労働者—即ち全然雇傭されざらんとする境にある労働者—の労働増加に基く純生産物以上に出でなくなる傾があるならば、限界賃銀労働者の能力を高めてこの細民を—必ずしも彼等自身にとつての生産的労働から引去る要はないが—競争労働市場から引去れば、全労働階級の賃銀は増加するやうに思ふ。

併し事實の上に於ては競争はかくの如き作用を及ぼさないのである。競争には類似職業の週賃銀を均等ならしめる傾はない。この週賃銀を労働者能率に適合せしめる傾があるのである。もし甲が乙の二倍の作業を營むとすれば、労働者増用を利益とするや否やに迷ふ限界に立つ雇主は、甲を四志で雇つても乙と外の更に一人の労働者とを各々二志で雇つても利益に變りはないであらう。また賃銀支配原因は、四志の甲の限界の場合を検しても二志の乙の限界の場合を検しても同様に判然と指示されるのである(12)。

(12) 競争は雇主をして—これらの條件の下に於て—甲に對し乙の二倍の賃銀を支持はんと欲せしめる傾があると言ふのは、實は未だ控目に言つたのである。蓋し能率ある一労働者は能率低い一労働者に比して同一工場面積・營業施設・監督の生産率仕力を倍加するのであつて、雇主にとつては賃銀の二倍以上に償するからである。否賃銀の三倍に償するかも知れぬ(上記第六編第三章二を見よ)。勿論雇主は能率低い



労働者をしてその組合の力を借りて雇主の利潤率を過大視し賃銀の引上げを要求せしめぬため、能率高い労働者に對しその眞正純生産物に比例する賃銀を提供するを恐れるかも知れぬ。併しこの場合能率高い労働者に何程を提供するを利益とするかを考究するに當つて、雇主が能率低い労働者の純生産物に注目するに至る原因は自由競争にあるのではない。その原因は共同規約の誤用によつて生ずる對自由競争の抵抗にある。若干の近代的利益分配案は、能率ある労働者の賃銀を略ぼその眞正純生産物に比例して高めんことを期してゐる。即ち『出來高作業』率に比例する以上に高めんとするものであるが、労働組合は常に必ずしもかゝる案に賛成しないのである。

九

眞の標準化は社會的福利である

然らば大體次の如く言つていい。即ち労働組合が共同規約を善用して作業賃銀の眞の標準化 standardization を實現したのは労働組合自身のみならず國民をも利した。殊に國の資源の在る限りを開發し之によつて國民分配分の増大を促進せんとする公明正大な努力が之に伴つた場合に於て然りである。労働組合がこれらの道理ある方法によつて賃銀を引上げ、或は生活・雇傭の條件を改

共同規約が不當の標準化を來す危険

善するならば、それは多く社會福祉を増進する。それは恐らく企業を惱まし抑制することなく、英國をして世界の指導者たらしめんがために最も重要な努力をなしつゝある人々の歩調を亂すこともなく、多大の資本を國外に驅逐することもないであらう。

共同規約を適用して不當な標準化を來す場合は之と異なる。不當の標準化は雇主をして已むなく相對的に能率低い労働者をも賃銀支拂の上に於ては能率ある労働者と同一階級に入れしむる傾がある。或は一労働者がある種の作業を營む能力ある場合にも、この作業は技術的に彼に屬せぬとの理由によつてその作業に就くを妨げるに至る。かくの如く規約を用ふることは一應としては *prima facie* 反社會的である。尤もかゝる行動に出るのは表面に現はれる以上の強い理由があるのかも知れぬ。併し労働組合役員は組織の技術的完全を期する責任上、その職掌に熱心なる餘りにこれら理由の重要な程度を誇張し易い。従つてこれらの理由に對する外部の批判は冷酷ではあらうが、これらの理由の性質としてかゝる批判は有益である。以下吾々は今日比較的意見の相違

機械・生産  
方法の改良  
に對して  
對する  
場合  
反對

の少ない顯著な場合から漸次論じて行きたい。

労働組合が未だ自重心を十分持つてゐなかつた時代には不當の標準化が種々の形式で行はれるのを普通とした。使用機械生産方法の改良を妨害したことがある。ある仕事の標準賃銀を定めるのに非常に舊式な方法で之を営むに要する労働の賃銀をもつてせんとしたこともある。之が更に特定の關係産業部門の賃銀を維持する傾があつた。併し之は生産を著しく阻害せざるを得なかつた。ためにかくの如き政策はもし一般的に成功したとすれば國民分配を著しく殺滅し、一般に國內の高い賃銀による雇傭を減少してゐたであらう。重だつた労働組合指導者がこの反社會的態度を非難したのは國に對する奉仕であつたのであつて、この奉仕は決して忘れてはならぬ。覺醒した組合聯合協會もその高尚な主義を部分的に些か外れたことがある。ために一八九七年の機械工業大争議と迄なつたのであるが、この覺醒した組合は速かにその過を――少なくともその最も恐るべき點を――改めたのである(13)。

(13)『産業民主主義』Industrial Democracy 第二編第八章には機械反抗の有益な歴史が載つて

ある。この書はこの歴史に關聯して次々如き勸告を與へてゐる。即ち機械採用に一般的に反抗せざること、併しこの機械の競争に對抗するためには舊式方法による作業の賃銀低下を拒むべしとの勸告である。この勸告は青年労働者にとつては爲めになる。併し成年期に達してゐる労働者は常に必ずしもこの勸告に従ふを得ない。中年者・老年者の熟練は生産方法の改善によつて殆んど無價値となるのであつて、この場合には種々の社會的不調和を生ずる。政府の行政力は現在に於ては私人企業に代つて營む新事業の増加のため日もこれ足りないものであるが、もしこの行政力がかゝる新事業増加よりも迅速に増大するに至らば、政府は右社會的不調和と戦つて多大の奉仕を致すに至るかも知れぬ。

更に老年労働者かものはや標準全日作業を營み得なくなつた場合に、この老年者が標準賃銀以下を受くるを許さぬことがある。幾多の組合は依然之を實行しつゝあるが、これまた不當の標準化である。之を行へばその生産業の労働供給は些か制限され、之を強行する労働者を利するかのやうに見える。併し之を行つても永久に數を制限することは出来ぬ。そは往々にして組合の福利基本金に重大な負擔を課し、純然たる利己的見地から言つてすら一般に近視的である。國民分配分は著しく減少する。老年労働者はこの不當の標準化の命ずる

老年労働者  
に對する  
標準  
賃銀  
の固  
持額

所に従つて、無理に引退して無爲の日を送るか、然らずんば疲れ果てながら苦闘を續けてその體力に堪へない作業を營むか、何れかその一を選ばねばならなくなるのである。

作業限定の  
場合は右よ  
りも疑はし  
る場合であ  
る

次に右よりは疑はしい場合に移る。即ち共同規約を運用するためには各産業團の機能を若干限定することが根本要件である。都會の各技術工が若干作業部門に於て高度の熟達を求めるとは確かに産業進歩の上に有益である。併しある労働者が一種の作業の甲の部分にこの種作業中の乙の部分に營むは極めて容易であるに拘らず、この乙の部分は技術上他の作業部に屬するとの口實によつて之をしも禁ずるに至れば、有益な主義も弊害ある極端に走り易い。莫大な類似財を製する工場に於てはかゝる禁止も比較的に害が少ない。蓋しこれらの工場に於ては作業を適宜に加減して各労働階級に屬する職工の専屬人員 *an integral number* を常備し之に相當均一の仕事を與ふことが可能だからである。専屬人員とは即ち他工場に於て生計の一部を收得する所屬曖昧の労働者を含みぬ人員を言ふ。之に反して右の如き禁止は小雇主を甚だしく

壓迫する。また小雇主の中には一代では何等大事業を完成し得ない迄も二代かゝつて大事業を完成し英國をして世界指導者たらしむるに與つて力ある者がある。右の如き禁止はこの大事業の完成への階段を登り始めた許りの小雇主を殊に甚だしく壓迫する。否、大工場すらもその壓迫を蒙る。即ちかゝる禁止の存する結果、労働者失職の機會は増加し労働者は就職困難の際に他に職を求めねばならなくなり、かくて暫くは失職者數を増加するに至るのである。然らば作業限定は之を十分の判断力をもつて適度に適用する場合には社會を利益するが、作業限定から生ずる些々たる策略上の利益のために之を極端に遂行する場合には社會的害惡と化するのである(14)。

(14) 茲に記しておきたいのは、機械工聯合協會といふ大協會—この協會のことは右に一言した—が、率先して類似産業部門間に協同一致の行爲を始め、窮屈な作業限定を緩和するに至つたことである。

### 一〇 貨幣購買力の變化、殊に信用變動に關聯する諸困難。

次に右よりも一層微妙・困難な問題に進みたい。即ち共同規約がその任務を盡さぬかの觀を呈する場合である。それも苛酷に適用されたためではなくて、規約の盡すべき任務がやがて規約を現在よりも技術的に完全ならしめるを要し或は恐らく完全ならしめ得るがために右の結果を來す場合である。この問題の中心は貨銀標準を貨幣をもつて表はすことにある。貨幣の實質價值は今の十年と次の十年とでは變化するものであり、また年によつて急速に變動するものであるから、固定的貨幣標準は眞にその任務を盡し得ない。この標準に適宜の弾力性を與へるは、不可能ではあるまいが困難である。現在の共同規約はかくの如き固定的な不備な手段を是非なく用ひねばならぬ。共同規約の極端な適用に反對する一の理由は即ち茲にある。

右の考察が愈々緊要となるは次の理由による。即ち信用が膨脹すれば物價は騰貴して貨幣購買力は暫く低下し、労働組合は信用膨脹時に標準貨幣貨銀の引上げを要求する自然的傾向を持つからである。この時には雇主は、全幅正常能率標準よりも稍や落ちる労働に對してすら高い實質貨銀—實質購買力をも

つて測定する—を支持はんと欲し、更に一層高い貨幣貨銀—貨幣をもつて表はす—を支持はんと欲するかも知れぬ。かくて二流の能率しか持たぬ労働者も高い標準貨幣貨銀を收め、組合員たるべき請求權を取得する。併し信用膨脹は忽ちに減退し、續いて不景氣が來る。物價は下落し貨幣購買力は高まる。労働の實質價值は低下し労働の貨幣價值は之よりも急速に低下する。信用膨脹時に獲得した高い貨幣貨銀標準は今や餘りに高きに失して、全幅の能率ある労働者の作業によつてすらもは多くの利潤を生じない。能率標準以下の労働者は標準貨銀に價しなくなる。かゝる不當の標準化も該生産業中の能率ある労働者にとつては必ずしも無益有害ではない。蓋しこの不當の標準化はこれら労働者の労働の需要を大ならしめんとする傾があること、恰かも老年労働者の強制的引退の場合と同じだからである。併しこの不當の標準化は生産阻害、従つて他の諸産業部門の労働需要の阻害による外この結果を生じ得ない。一般労働組合がかゝる政策を固持すればする程、國民分配分に及ぼす損害は愈々深く且つ永續し、國內を通じて高い貨銀による雇傭の總體は愈々減少するのであ

廣汎な政策の  
は結局に於て  
一切の個人を  
利する

消費を最後  
の到達點と  
する貨物と  
對する需要に  
來る

もし各労働者が一層熱烈な努力をもつて數種の労働能率標準を定め之に従つて賃銀標準を定めるに至り、また物價騰貴の波の頂上が過ぎた場合にこの物價騰貴に順應してゐた高い貨幣賃銀標準を一層速かに低めるならば、結局に於て各産業部門は一層繁榮するに至るであらう。かゝる適合を行ふには多くの困難がある。併し一産業部門の生産を妨害する手段によつて賃銀を引上げることは必然他の諸部門に於ける失職を増加するのであるから、この事實が一層一般的且つ明白に認められさへすれば、かゝる適合の實現に向つての進歩も速かとなるであらう。蓋し實效ある唯一の失職救済策は實に手段と目的との間斷なき適合の一事あるのみだからである。その適合を行ふには、信用が相當精確なる豫想を堅實な基礎となし得るやうにし、また無謀な信用膨張——一切經濟沈滞の主要原因——を狭く限局すべきである。

この點は今茲で論ずるを得ないが一言説明しておきたい。ミルの言は當つてゐる。『貨物を得んがための支拂手段を成すものは單に貨物あるのみである。

他人の生産物  
を得んがため  
の各人の支拂  
手段を成すも  
は各人自ら有  
する生産物で  
ある

他人の生産物を得んがための各人の支拂手段を成すものは各人自ら有する生産物である。一切の賣手は——事の性質から言つて避け難く、また言葉の意味から言つても——買手である。もし吾々が突然國の生産力を倍加し得るとすれば、各市場の貨物供給を倍加する筈である。併しそれと同時に購買力をも倍加する筈である。各人の供給が倍加するのみならずその需要も倍加する。各人の買ひ得る高は倍加する。何となれば各人が交換に當つて提供する高が倍加するからである。』

併し人は購買力を有しても必ずしも之を用ひない場合がある。蓋し人が幾多の失敗によつて確信を失つた場合には、新會社を興し或は舊會社を擴張するための資本を求め得ないからである。新鐵道の計畫も人氣を呼ばず、船舶は徒らに港に繫留され、新船建造の注文も皆無である。土方の作業に對する需要も殆んどなく、建築業汽罐製作業の作業に對する需要も多くない。要するに固定資本を製作する生産業の何れにも殆んど仕事がない。専門熟練特化資本をもつてこれらの生産業に従事する者の収入は少なく、従つて他の諸生産業から生

産物を買ふ高も少ない。他方他の諸生産業は自らの財の市場の振はないのを見て生産を減少する。彼等の収入は減少し従つて購買高も減少する。彼等の商品に對する需要が減少すれば即ち他の諸生産業に對する彼等の需要も減少する。かくて商業瓦解は波及する。一生産業の瓦解はその以外の諸生産業の活動を止め、後者は前者に反作用して前者の瓦解を強めるのである。

この害惡の主要原因は確信の缺乏にある。もし人が再び確信を回復し、この確信がその魔法杖を一切産業に觸れしめ、之によつて一切産業が生産を續行し他の諸産業の商品に對する需要を續け得るに至れば、この害惡の大部分は之を除去し得べきである。もし直接消費財を製作する一切生産業が擧つて普通時と同様に作業を續け相互の財を買ふことになれば、彼等は適度の利潤率・貸銀率を收める手段を互に供することになる。之に對して固定資本を製作する生産業は右種生産業よりも些か長く時を待たねばならぬかも知れぬ。併し確信が復活して投下すべき資本を有する者がその投下方法を決するに至れば、これら生産業も亦た仕事を得ることになる。確信の増大は確信自體を増大せしむる

信用・生産  
の相互關係

原因となる。信用は購買手段を増加し、之によつて物價は回復するであらう。既に生産業に従事してゐた者は豊かな利潤を收め、新會社の設立となり、舊企業の擴張となり、固定資本製作者の作業に對する需要もやがて増加するであらう。勿論各種生産業の間に正式の合意があつて全日作業に歸り、之によつて相互の商品の市場を作る譯ではない。併し産業は幾多生産業間の漸次且つ――往々――一齋の確信増大によつて復活するのである。その復活は生産業者が物價下落の勢を止まつたと見るや否や直ちに始まり、物價は産業の復活と共に騰貴するのである(15)。

(15) ミルを引用した部分とその以下の二段とは一八七九年妻との共著で公にした『産業經濟學』The Economics of Industry 第三編第一章四からその儘採つた。この部分は古典派經濟學者の傳統に従ふ者の多くが消費と生産との關係について採る態度を示してゐる。不景氣の時に當つて消費の瓦解が生産の瓦解を繼續せしむる一誘因となるは眞である。併し之が救済策は性急な一部經濟學者の試みたやうに消費の研究によつて得らるべきものではない。如何にも流行の人爲的變化が雇傭に及ぼす影響を研究するは疑なく有益である。併し研究の眼目は生産・信用の組織の研究にある。尤も經濟學者は未だこの研究の効果を齎してはゐないが、この失敗の原因は

この問題の深所が不明瞭でありその問題の形態が變化して止まない所にある。經濟學者が最重要の問題に對して無關心であるがためではない。經濟學は徹頭徹尾消費・生産相互適合の研究である。經濟學者がその一を論じてゐる際には決して他の一を無視してはゐないのである。

一一 社會進歩の可能性に關する暫定的結論。國民分配

分の平等分配は多くの技術工家庭の所得を減少するであらう。殘滓階級は例外的取扱を要する。併し不熟練作業の賃銀を高める最善の手段は社會大衆の一切階級の性格・才能の徹底的教育である。即ちこの教育によつて一面に不熟練作業を營む以外全く無能力なる者の數を激減し、他面に人間の自然支配力の主要源泉たる高級な建設的想像を働かし得る者の數を増加することにある。併し人間が餘

暇の善用を習得せぬ間は眞に高い生活程度に到達するを得ない。人類の性格更新に伴はぬ暴力的經濟變革が害毒を流す所以は一には茲にある。人類は利己と争闘との長い時代からその性格を傳承したのであつてその性格更新は緩慢だからである。

然らば即ち以上分配研究の論旨は次の諸點を暗示する。即ち既に作用しつゝある社會諸力・經濟諸力は富の分配を善き方向に變化しつゝあること、これら諸力は持久的であり且つその勢を強めつゝあること、これら諸力の影響は大部分累積的なること、社會・經濟的 socio-economic 有機體は一見して思ふよりも微妙複雑なること、及び無思慮の大變革は恐るべき慘害を招くに至ること等の諸點である。特に以上の論旨は次の點を暗示する。即ち政府が一切生産手段を收用・所有するは―最も責任ある『公有主義者』 Collectivists が提唱する程に漸次且つ緩慢に之を實行するとしてさへなほ―一見して思ふよりも一層深く社會

經濟變化の趨勢は今この所から改むるに注意を要する

公有主義の  
經濟的・社  
會的危害

繁榮の根柢を斷ち切るに至るといふ點である。

國民分配分の増大は發明の不斷の進歩と高價な生産要具の集積とに依存する。吾々はこの事實に出發して次の二點を省察せざるを得ない。即ち吾々に自然支配力を與へた無數の發明は今日に至る迄悉く獨立労働者によつて行はれ來つたこと及び政府官吏の寄與した所は全世界を通じて比較的僅少であつたことこれである。且つまた今日一國政府或は地方政府は高價な生産要具を公有してゐるが、その殆んど總てを取得するための資力は、企業家その他の私人の貯蓄を主として借入れたものである。寡頭政治的の政府は時に公有富 *collective wealth* を集積せんとして大いに努力した。また來るべき時代に於て先見と忍従とが勞働階級中堅の共有財産となるを希望するもいゝ。併し現在の事情に於ては、この上一層の自然支配力を獲得するに要する資力の集積を純然たる民主主義に委ねるは餘りに危険である。

従つて生産手段の公有 *collective ownership* は人類の精力を弱め經濟進歩を止めはせぬかを恐れる強固な一應 *prima facie* の根據がある。公有を行ふ以前に、

社會の總ての人が公共善のための非利己的・献身的性能——今日比較的稀有な性能——を習得せざる限り然りである。今はこの點に立入つて論ずるを得ないが、公有は恐らく人生の私的・家庭的關係の上の最も麗はしく楽しいものを破壊するに至るであらう。不撓不屈の經濟學研究者が、生活の經濟的・社會的・政治的條件の突發的・暴力的組織改造案をもつて害多く利少なしとするは即ち右の諸點を主たる理由とするのである。

且つまた吾々は、國民分配分の分配は——悪いには違ないが——決して人が通常想像する程悪くないことを省察せざるを得ない。事實英蘭の多くの技術工家族は國民所得の平等分配によつて損失を蒙るであらう。合衆國に於ては好運の機會は實に多大であるにも拘らず之によつて損失を蒙る技術工家族は一層多いであらう。従つて社會大衆の好運は、一切不平等の撤廢によつてその當座は、勿論大いに改善されるではあらうが、決して黄金時代を豫想する社會主義者が考へる程度に——例へ一時的にも——高まりはしないのである(16)。

(16) 英王國の約四千萬の人口の年所得は若干年前に二十億磅以上に達してゐた

現存の富の  
不平等は往  
々誇大視さ  
れる



如くである。多くの重だつた技術工は一年約二百磅の所得を得つゝあつた。多数の技術工家族は四人乃至五人の家族であつて、その各々は一週十八志乃至四十志の所得を得つゝあつた。もし右の全部所得を平等に分配すれば一人一年四十志の所得となるから、右の如き家族の家計失費は平等分配の場合よりも大とはならぬが、と同額であつた。一九二〇年追記。この點については材料とすべき新統計がない。併し労働階級一般の所得は少なくとも他階級の所得と同じ速度をもつて増加しつゝあるは確かなやうである。本章中に試みた暗示中の二三は、更に私の論文『經濟騎士道の社會的可能性』(The social possibilities of economic chivalry) Economic Journal, March 1927) の中で之を開展しておいた。

併しこの不  
平等は大であ  
る

併しこの不  
平等を許す  
端のも亦た極

併し以上注意深い態度をとるとは言へそは斷じて現在の富の不平等を默認するのではない。否、極度の貧乏と巨額の富とが並存するは眞實少しの必要もなく、従つて道徳的に之を正當視すべき理由も全然ない。過去數代に亘る經濟科學の大勢は即ちこの信念を愈々堅からしめたのである。富の不平等は、人が往々言ふ程に大ではないが、なほ吾々の經濟組織の重大なる汚點である。もし自由な自發性と性格力との泉を涸らさず従つて國民分配分の増大を著しく阻害せずして適當の手段によつてこの不平等を少しでも輕減し得れば、明かに社會的利益であると思ふ。但し殊に富裕な技術工家族が既に達してゐる水準以上は一切收入を引上げるは不可能である。之は算術的計算によつても分ることである。併しよしんばこの水準以上の者を少しく引下げるといふ犠牲を拂つても、この水準以下の者をこの水準迄引上げるは望むべきことであるに違な

一一

殘滓階級の  
場合例外的

『殘滓階級』Residuum に関しては迅速な處置を要する。殘滓階級とは肉體的、心理的或は精神的に十分な一日作業をなす能力なく十分な一日賃銀を得てをらぬ人々であつて、その數は今日著々と減少しつゝあらんことを希望するのではあるが依然―多大である。この階級の中には恐らく絶對的に『雇傭し得ざる』者以外の者も若干ある。併しそは例外的取扱を要する階級である。經濟自由 economic freedom 主義の制は恐らく身心相當健全なる者にとつては精神的、物質的の兩見地から見て最善の制である。併し殘滓階級はこの制を利用し

得ないのである。もし彼等の爲す儘に放任しておけば彼等は彼等自身を模範としてその子を養育するであらう。果して然らばアングロサクソンの自由は彼等を通じて来るべき時代の人々に有害な結果を及ぼさざるを得ぬ。即ち獨逸に行はれてゐるやうに彼等を恩情主義の下におくのが彼等自身の利益であり、やがて國民にとつては一層の利益となるであらう(17)。

(17) 之を行ふには先づ最初窮迫者に對する公共補助を一層廣汎・寛大・教育的に行ふがよからう。之には窮迫者鑑別の困難が生ずるからこの困難を除く要があるであらう。之を除くには地方・中央當局は衰弱者を指導しその極端な場合には之を監督するに要する多くの資料を得るであらう。殊にその衰弱が来るべき時代の人々に恐るべき危険の源泉となる場合に於て然りである。老年者は經濟とその個人的性向とを主眼として之を補助することとする。併し幼児扶育の責任ある者の場合には公共基金の失費は更に大であらう。よつて公共の必要のために個人的自由を拘束する程度も一層大であらう。國內の殘滓階級を根絶するため最初の手段として最も緊要なのは、身體を清潔にし相當の營養を採り小綺麗な衣服をつけて規則正しく學校に出席せしむることである。之に従はないときは兩親に注意し助言を與へるべきである。最後の手段としては家庭を閉鎖し或は出入を限定して兩親の自由を稍や制限するもいゝ。以上總て多大の失費を要するであらう。併しかゝる大膽

最低賃銀論  
の主張と困難

なる失費の必要は最も急迫的であつて、かく急迫な場合は他にはないのである。かかる失費は國民の全身體に感染する重大な腐蝕を除去して呉れる。而かもこの事業が完了すれば、之に吸収されてゐた資力は自由となり、之よりも一層愉快な併しかくの如く急迫的でない社會義務に之を轉用するに至るであらう。

以上の害悪は非常に急迫的であつて吾々は之に對する強硬手段を熱望して已まぬ。最低賃銀 *minimum wage* 論は長く經濟學研究者の注意を拂ふ所であつた。その主張は、政府の權能をもつて男子最低賃銀を定め男子はこれ以下にて働くを許さず、別に女子最低賃銀を定めて女子はこれ以下にて働くを許さぬといふにある。之は虛病その他の濫用を招來する恐れはあるが、もし實效あるものとなればその福利は多大であつて吾々は喜んで之を承認するであらう。またそれは固定的・人爲的賃銀標準を強要する例外的根據なき場合に迄之を強要せんとする者が在るときの對抗手段ともなるであらう。この提案の微細點は近時殊に最近二三年間に著しく改善された。併しその提案者は未だ十分にその中心困難を克服してゐないやうである。吾々を指導すべき經驗も殆んど皆無である。たゞオーストラレーシア *Australasia* は例外であるが、茲では各住民は

總て廣大な土地財産の分有者でありその人口は近時の屈強健康な男女移住者である。然るに英吉利國民は舊救貧法 *Poor Law* と舊穀物條例 *Coria Laws* とにより、また工場制度 *Factory system* の危険の未だ理解されてゐなかつた時代に同制度が誤用されたために活力を損つてゐる。右の如き經驗はかゝる國民にとつては殆んど用をなさぬ。苟しくも或る提案を提げて之を實際に採用すべしといふならば、その提案は統計的推算に基礎をおかねばならぬ。即ちその提案の下に於て、最低賃銀に償する作業を営み得ないため已むなく國家の補助を求めざる者の數を統計的に推算せねばならぬ。またかゝる者の中にも、元氣に働くことが可能であり、且つ幾多の場合に最低賃銀を個人に適合せしめずして家族に適合せしむることが可能であれば、相當よく生活を維持すべき者もある。然らばかゝる者が何程あるかといふ問題をも殊に考究せねばならぬのである(18)。

(18) 右最後の考察點は一面的に極論されてゐたやうに思ふ。それは主として『寄生的』 *parasitic* 作業の本質とその賃銀に及ぼす影響とに關する分析の誤の影響である。家族は地理的移住の上から見れば大體に於て單一の單位である。従つて製鐵工業その他重工業の多い地方では、男子賃銀は相對的に高く女子・小兒賃銀は低い。之に反

して或る地方では、父の所得は家族の貨幣所得の半以下であつて、男子賃銀は相對的に低い。この自然的適合は社會的福利である。男子最低賃銀を規定する固定的な國民的規定がこの適合を無視し又は之に反對するならば、その規定は寧ろ無きにかね。

一三

然らば轉じて相當に良好な道德的・肉體的精根を有する労働者は如何。劣等な不熟練作業以外を營む能力を持たぬ労働者は略ぼ全人口の約四分の一と概算していい。その他低級の熟練作業には適してゐても、高級熟練作業には適せずまた責任ある地位に就いて賢明敏速に行動し得ない労働者が約四分の一である。之と同様の概算を一世紀前の英蘭に於て行つたとすれば、右の比例は甚だ違つてゐたであらう。即ち農業上の通常劃一作業以外全然熟練労働に適してゐなかつた者が人口の半以上に達してゐたであらう。高級熟練作業或は責任作業に適してゐた者は恐らく人口の六分の一以下であつたらう。蓋し當時國民の教育は國民的義務であり且つ國民的經濟である所以が未だ認められて

不熟練労働に適合せぬ以外に、少數の労働者には、相對的に、少くも、ある。

ゐなかつたからである。もし假りに右の變化以外に何等の變化がなかつたものとすれば、不熟練労働に對する急迫な需要の結果として雇主は已むなく之に對し熟練労働に對すると略ぼ同じ賃銀を支拂はねばならなくなつたであらう。熟練労働の賃銀は少しく低下し、不熟練労働の賃銀は高まつて遂に兩者略ぼ等しくなつたかも知れぬ。

現在の事情を見てすら既に略ぼ次の如き結果が生じた。即ち不熟練労働の賃銀は如何なる他の階級の賃銀よりも——熟練労働の賃銀に比してさへも——速かに高まつて來たのである。同時に純不熟練労働の作業は熟練労働の作業に比してさへも速かに自動機械その他の機械に併合され、現在に於ては全然不熟練なる作業は以前に比して減少して來たのであるが、もし假りにこの事情が起らなかつたとすれば右の如き収入均等化の運動は一層速かに進んだであらう。今日傳統的に熟練技術工の作業となつてゐる若干種の作業が以前程の熟練を要しなくなつたは眞である。併し他面に於て今日の「不熟練」労働の取扱ふ要具は往々非常に緻密・高價であつて、一世紀前通常英吉利労働者、否今日の後進

併し機械  
従来不熟練  
労働者と認  
められたる  
種類の労働  
に對する需  
要の減少

國の如何なる人にも之を任すは餘りに不安である程になつてゐるのである。

即ち機械的進歩は、各種労働の収入間に依然として存する大差別の主要原因である。之は一見する所残酷な宣告のやうに見えるかも知れぬが實はさうでない。もし假りに機械的進歩が實際よりも著しく緩慢だつたとすれば、不熟練労働の實質賃銀は現在よりも——高くならずして——低くなつてゐたであらう。蓋し國民分配分の増大は甚だしく阻害されて、一般に熟練労働者さへも、その一時間作業の實質購買力が倫敦煉瓦積労働者の六片ペンス以下に下つても之に甘んぜねばならぬ筈であつたからである。不熟練労働者の賃銀は勿論なほ一層低かつたであらう。吾々の推定して來た所によれば、生活幸福は——それが物質條件に依存する限りに於て——所得が最低 *barest* 生活必需品を與ふるに足る時に始まると言つてよく、またこの點に達した上は、その所得の一定割合の増加は——その所得の如何に論なく——略ぼ同じ高だけ幸福を増加するであらう。この大體の假設は次の結論を生む。即ち善意 *bona fide* の労働者中の貧民階級の賃銀が（假りに）四分の一増加すれば他の如何なる階級の同數者の所得が四分の一増加す

る場合よりも幸福總和は増大する。之は理由あることのやうに思ふ。蓋し右四分の一の増加は積極的困窮を防ぎ境遇低下の能動的原因を阻止し、他の如何なる所得の比例的増加にも勝つて希望の途を開いてくれるからである。この見地から言へば、貧民階級が經濟進歩の機械的部面その他の部面から收めた實質福利は貧民階級賃銀統計が示すよりも大であつたと主張していい。併しさうだとすれば、かゝる僅かな費用をもつて得らるべき福祉の増進を益々大ならしめんを努めるこそ社會の義務であるといふことになる(19)。

(19) 上記第三編第六章六及び數學附錄註解八(原著八四二—三頁)を見よ。なほカーザ  
— Carver 教授の論文『機械と労働者』Mechinery and the Laborers, Quarterly Journal of Economics, 1908  
をも参照。

然らば吾々は機械的進歩をして依然その全幅力を發揮せしめ、不熟練作業以外を營む能力なき労働の供給を減少せしむるに努力すべきである。これ國の平均所得を過去に於けるよりも一段速かに増加せしめ、不熟練労働者一人當りの右平均所得配分高をなほこれ以上に速かに増加せしめんためである。この

主要救濟策  
は不熟練労働者  
の一段の高給  
に對する適數  
を中一階級の  
作業に對する  
に於ける者  
を増やすこと  
にある

目的を遂行するには、吾々は吾々が近年進んで來たと同じ方向に進むを要する。併し一層熱烈に進むを要する。教育を一層徹底せしめねばならぬ。學校教員は、その主要義務が知識を授くることに非ざるを悟らねばならぬ。蓋し知識を得るを主とするならば、數志<sup>シツジ</sup>を投じて一個の人間の頭腦に入り切れぬ程多くの紙上知識を買ひ得るからである。性格・才能活動の教育を旨とし、假へ兒童の両親は無思慮であつても、兒童自身には両親よりも良き訓育の機會<sup>オカシユ</sup>を與へて次の時代の思慮ある両親とならしむべきである。この目的のためには公共資金を惜しまず用ひねばならぬ。また之を惜しまず用ひて、一切労働階級居住區域の兒童の健全な遊戯のために新鮮な空氣と場所とを與へねばならぬのである(20)。

(20) 第五編第七附錄八・九に主張する通り、人口集中に原因する都會地の特殊價値に地方税を課するときは、この地方税は先づ第一に労働階級殊にその兒童の健康のために之を用ひねばならぬ。

即ち貧民労働階級の福祉の一面には彼等自らの空手をもつて如何とも爲し得ざる一面があるのであつて、國家はこの一面に惜しまず—否寧ろ多過ぎる程

に十助力を興ふるを要し、また同時に必ず住宅内部を清潔ならしめ、後年責任ある強き市民として行動すべき者の住むに適する住宅たらしむるを要すると思ふ。一人當りの空氣の立方呎を定める強制標準は之を―暴力的に高める要はない迄も―著々と高めるを要する。之と關聯して更に一の規定を設け、高建築物の建設には必ずその前後に十分の空地を置かしむることゝすれば、既に勞働階級は大都市の中心區域から遊戯場の一層豊富な場所へ移動しつゝあるのであるから、この移動を促進することであらう。之と同時に醫術上衛生上の公共救助監督は自ら別の方向に向つて働き、從來貧民階級兒童に加はつてゐた重壓を軽減するであらう。

即ち不熟練勞働者の兒童は之を教育して熟練作業の賃銀を收得する能力を得せしむるを要する。熟練勞働者の兒童は之を同様手段によつて教育し更に一段高級の責任作業を爲す能力を得せしむるを要する。彼等は地位を高めて下級中産階級に割り込んでも利する所は多くないであらう。否寧ろ失ふ所があるであらう。蓋し既に述べた通り、單なる筆書力、記帳力は實質上熟練筋肉作

熟練勞働者  
の兒童に  
いても同  
様に

物質的進歩  
は主として  
建設的想像  
力に依る

業以下の等級に屬し、過去の時代に於てはたゞ單に通俗教育が輕視されてゐたがために筋肉作業以上の等級となつてゐたに過ぎないからである。ある等級の兒童が自等級以上の等級に割り込む場合には社會的利得のあると共に往々社會的損失もある。併しこの現在の最低階級の存在は殆んど有害無益である。この階級の數の増加を促進するやうなことは斷じてしてはならぬ。一旦この階級に生れ落ちた兒童は之を助けてこの階級を脱却せしむべきである。

技術工の上層には人を容れる餘地が多い。中産階級の上層には人を容れる餘地が豊かである。重要な發明・改良の多くはこの階級の主要人物の活動・資力に負ふ所である。今日の勞働者が數代前の最富者さへ有しなかつた或は有すること稀であつた快適品・奢侈品を有し得るはこれらの發明・改良によるのである。また之なくしては英蘭は實に現在の人口に十分の普通食物さへも供給し得ないのである。新著想を創造しこの著想を充實した質實な構案に體現する人々は比較的少ないが、或る階級の兒童が悦びに満ちたこの少數者の圈内に進入するは全然無害の大利得である。この少數者は時に莫大の利潤を收める

有害な形式  
の投機は進  
歩の悲しむ  
べき障害で  
ある

こともある。併しその利潤を總て綜合して見れば、彼等は恐らく自身のために  
收めた利益の百倍乃至それ以上を世界のために與へたのである。

最大の資産中には眞の建設的作業によらずして投機によつて作られたもの  
も多く、この投機は多く反社會的策略を伴ひ、場合によつては通常投機者が信頼  
する報道源泉の有害な操縦をさへ伴ふは眞である。之が救済は容易でない。  
また完全な救済は到底期し難い。單純な法規によつて投機を取締らんとする  
性急な企ては無効ならざれば即ち有害であつたのは理の當然である。併し非  
常な勢をもつて進歩しつゝある經濟研究はこの種の事項をも二十世紀中には  
解決して世界のために多大の奉仕を爲すに至るものと期待していい。

經濟騎士道  
の社會的可  
能性

その外經濟騎士道 *economic chivalry* の社會的可能性が一層廣く理解されるに  
至れば害惡は幾多の點に於て減少するかも知れぬ。公共福祉のための富者の  
献身は一人の覺醒が普及するにつれて——租稅徵收者を助けて富者の資力を貧  
者のために極力利用する上に大に助けとなり、貧乏の最惡性の害惡をこの國か  
ら根絶するかも知れぬ。

一四

よく作業す  
るよりも富  
を善用する  
は難く餘暇  
を善くする  
は善くする  
いはさか  
に難

以上富の不平等殊に最貧階級の非常に低い收入を論じてその結果が欲望満  
足を減少せしめるのみならず活動を萎縮せしめることに論及した。この場合  
に於ても——他の一切の場合に於けると同じく——經濟學者は次の事實に當面す  
る。即ち一家族の所得と機會とを正しく用ふる力量は既にそれ自體最高度の  
富であり、この種の富は一切階級を通じて稀なることこれである。費途を誤る  
ために生活の高貴と幸福とに殆んど又は全然效果なき金高は、英吉利勞働階級  
に於てさへも恐らく一億磅に上り、その以外の英吉利人口に於ては四億磅に達  
する。勞働時間の短縮は多くの場合に於て國民分配分を減少し賃銀を低下す  
るには違ないが、なほ多くの人は恐らくその作業を減少するをよしとするであ  
らう。但し専ら效果最も少ない一切種類の消費方法の全廢のみによつて作業  
減少の結果たる物質的所得の損失を補ひ、且つその人々が餘暇を善用すること  
を習得し得る場合に限る。

併し不幸なるかな人間本性の改善は緩慢であり、殊に餘暇の善用を習得するは難中の難であつて、この點に於ける改善は一切改善中でも最も緩慢である。凡ゆる時代、凡ゆる國民、凡ゆる社會層を見ても、如何にして良く作業するかを知得してゐた人は多かつたが、如何にして餘暇を善用するかを知得してゐた人は之に比して少なかつた。併し他方に於て、自己の欲する儘に餘暇を用ふる自由以外には、餘暇の善用を習得する途はない。餘暇を有せざる筋肉労働者階級は多くの自重心を有し得ず完全なる市民となり得ない。單に疲勞を與へるのみで毫も教育を與へぬ作業の疲勞を逃れる若干の餘暇は、高き生活程度の一必要條件である。

少年のため  
の餘暇

この場合——之と類似の一切の場合と同じく——倫理學者、經濟學者にとつてこの上なく重要なものは少年の才能活動である。現代の最も要請的な義務は、少年の機會を與へてその高級本性を開發し能率ある生産者たらしむるにある。この目的を達する一必須條件は機械的作業苦から繼續的に免れしむることであり、通學及び性格の充實、開發に資する種類の遊戯のための豊かな餘暇を與ふる

兩親の労働  
時間に對す  
る次代労働  
者の利害關係

ことである。

父母が家庭に於て歡喜なき生活を送る場合に少年が蒙る危害のみを考量するとしてさへ、少年に對しても亦た何等かの救済を施すが社會の利益であらう。母が家を外にして一日の大部分を暮す家庭、或は父が兒童の就寢後に歸宅するを普通とする家庭は、恐らく有能労働者と善良市民とを出さない。従つて社會の直接利害から言へば、家庭外に於ける服務の無用に長い時間を短縮すべきである。作業それ自體は左迄激烈でない鑛山貨車車掌その他についてすら然りである。

一五

各種の産業熟練の供給がその需要に適合するの困難を論ずる際に吾々は次の點に注意を呼んだ。即ちこの適合は殆んど精確には行はれぬとの事實である。その理由は産業の方法は急速に變化し、一労働者は最初その熟練を修得し始めて以後略ぼ四十年——時には五十年——この熟練を用ふるを要することにあ

人之長命と  
命の遺傳も  
性格の特色  
は産格適合  
を妨げる



る(21)。之に對して前節に論じた困難は主として遺傳的習性及び思想感情の趣調が長命なるによつて生ずる。もし株式會社・鐵道或は運河の組織が悪ければ吾々は十年乃至二十年の間に之を匡正し得る。併し人間本性の構成分子中數世紀の戦争・暴力と下劣粗惡な快樂との間に發達し來つた構成分子は僅か一代の間には著しく之を變化し得ないのである。

(21) 第六編第五章一・二を見よ。

社會改造の高貴・熱心な唱道者は麗はしい生活繪畫を畫いて、彼等が容易にその想像をもつて組立てる社會制度の下に於ける生活を示した。常に然りし如く今日に於てもさうである。併し之は無責任な想像である。何故かと言へばこの想像は次の如き推定を隠してゐるからである。即ち人間本性はこの新制度の下に急速に變化し——有利な條件の下に於てさへ——到底一世間に期待し得ない變化が急速に行はれるとの推定である。人間本性をかく迄理想的に更新し得るとすれば、現存私有財産制度の下に於てさへ既に經濟騎士道は生活上に力強く行はれるであらう。また私有財産は——その必要は疑もなく人間本性

人間本性的に改  
め得るに  
れば私と  
は必要と  
す  
且つ無  
なるであ  
らう

の素質以上の深所に及ばぬものであるから——不必要となると同時に無害となるであらう。

社會的疾  
患に對する  
極端な忍  
耐も  
過度な性  
急も  
あるに  
有害

然らば今日の時代の經濟的害惡を過度に高唱して今日以前の時代にも類似の惡性の害惡のあつたことを無視し易いのであるが、吾々はこの誘惑に陥らぬやう警戒を要する。尤も若干の誇張は暫くは誇張者自身のみならず他人をも刺戟して、現在の害惡をこれ以上存續せしめてはならぬとの決心を一層堅からしめることはある。併し善良な目的に出でずして利己的の目的から出て眞理を云爲すは誤れる點に於て右に劣らぬ。否一般に右よりも遙かに愚である。故に今日の時代を悲觀し、之に對して過去時代の幸福を小説的に誇張するは、緩慢ながらに堅實な作用を及ぼす進歩方法あるを顧みずして然らざる進歩方法を性急に採用する傾を生ずることゝならねばならぬ。かゝる方法は右よりも有望なるが如くではあるが、藪醫者の功能薬に類するものであつて、迅速に僅少の好結果を來す一面に持久的・瀾漫的衰頹の種子を蒔くものである。この性急な不誠實は害惡である。もし之よりも大なる害惡ありとすればそは道德的無

感覺あるのみである。之によれば吾々は近代的資力知識を有しながら、人間生活上多額に保有するに價する一切物が不斷に破壊されても之に甘んじて只管ら忍従するを得、今日の時代の害悪は少なくとも過去の害悪よりも輕微であることを回想して自ら慰めてゐられるのである。

吾々は經濟研究上本書に取扱ふべき部分を茲に終らねばならぬ。吾々の到達した實際的結論は極めて少なかつた。その理由は抑も一の實際問題を取扱はんとするに當つては、一般に先づ初めにその問題の經濟面―道德面その他は言ふ迄もない―の全面を注視する必要あることにあり、また現實生活にあつては殆んど一切の經濟問題が信用・外國貿易及び合同・獨占の近代的發達等若干の複雑な作用・反作用に―多少とも直接に―依存することにある。併し吾々が第五編第六編で横ぎつてきた研究地域は―ある點に於て―經濟學全領域中の最難所であつて、その以外の研究地域を支配し且つ之に入るの途を備へるものである。

## 附 錄



のために用ふるを要した。これら諸國には多大の富裕階級がなかつた。即ち直ちに消費する要なき多大の富を貯へ之を機械その他の製作に投じ之によつて労働を補助し労働をして一層多大の未來消費物を生産し得せしめる一大階級がなかつた。經濟學者の議論は特殊の色調を帯ぶるに至つた。それは國として—英蘭さへも—資本の缺乏せざるはなかつたためであり、また労働が資本の補助を待つこと愈々大となつたためであり、最後にルーソー一派の人々が愚かにも労働者に向つて全然資本なければ汝等は反つて生活を向上すると唱へつゝあつたためである。

その結果經濟學者は次の二點を極端に高調した。第一に労働は過去に生産された資本即ち優良な衣服その他の補助を要すること、第二に労働は工場貯藏原料その他の形態に於ける資本の補助を要することこれである。勿論労働者自身資本を備へてゐたかも知れぬが事實の問題としては僅少の衣服家具の貯と恐らく二三の簡單な道具以上には殆んど何物をも有してゐなかつたのであつて、その以外の一切物については他人の貯蓄に待つたのである。労働者は衣服・パン等直ちに使用し得る物品を受取り或はこれらを買ふべき貨幣を受けた。資本家の受取つたものは即ち羊毛の紡績であり羊絲の製布であり或は土地の犁返しであつて、貨物衣服・パン等直ちに使用し得る物品を受けた場合は極く僅かであつた。之には重大な例外あるは疑ふ迄もない。併し雇主被備者間の通常契約では、被備者は直ち

使用し得る物品を受取り雇主は後に至つて使用さるべき物品の製作上の補助を受けることになつてゐた。經濟學者はこれらの事實を次の如く言ひ表はした。即ち一切労働は資本—労働者の所有なるとその以外の人の所有なるとを問はぬ—の補助を要すること、及び雇傭作業を行ふ者の賃銀は原則としてその雇主の資本から前拂される—前拂されるとは即ち彼の製作品が使用に堪へるに至る時を待たずして—といふのである。これらの單純な叙述に批評を加へた人は多かつた。併しこれらの叙述をその正しい意味に解する人にして之を否定した人は未だ存しないのである。

さりながら昔の經濟學者は更に一步を進めて、賃銀額は資本量によつて制限されると言つた。この叙述に至つては之を辯護し得ない。如何に最眞目に見ても蕪雜な言と言ふ外ない。この叙述は一部の人々に誤つた暗示を與へて、ある期間内に—假りに一年間に—一國內で支拂はれ得る賃銀金額は一固定額であるとの觀念を生ずるに至つた。もし一團の労働者が罷業威嚇その他の方法によつて賃銀を高めたとすれば、その結果他の諸労働者團は總計の上に於て右の一團が得た額と精密に等しい額を失はねばならぬと言ふのである。かゝる言を爲した人々は恐らく年一回の收穫しかない農業生産物を考へてゐたのであらう。一回の收穫による一切の小麥を必ず次年の收穫迄に喰べ盡すとし、且つ小麥を全然輸入し得ない場合には、一人の小麥取得分が増加すればその以外の人々の取得分は丁度その

併しこの依  
頼の度は若  
干の不意に  
干渉によつ  
た表現によ  
つて誇張さ  
れた

高だけ減少するに違ない。併し之は一國內の賃銀支拂高はその國の資本によつて固定的に定まるとの叙述を正當づけるものではない。これ即ち『賃銀基金理論 Wage-fund theory of 俗悪な形態』と呼ばれ來つた説である(2)

(2) 以上の三段は『産業組合年報』Cooperative Annual に書いた論文から再出した。この論文は後に『産業報酬會議報告』Report of the Industrial Remuneration Conference, 1885 中に再刷されたものであつて第六編第二章の中心論究の要領はこの報告に載せてある。

二 この誇張はミルの第二編即ち價值研究の前に在る賃銀論中にはあるがその後に来る第四編の分配論中にはない。資本労働及び生産消費の相互關係の部分的均整。

既に述べた通り(第一編第四章七)ミルはコント Comte 社會主義者及び社會人心の一般傾向の影響により、晩年に至つて經濟學上に於ける機械的分子と人間的分子とを對立せしめ後者を高調せんとした。彼は慣習遺風變化流轉の止む暇ない社會施設、人間本性の—彼以前の經濟學者がこの本性の可變性を輕視したといふコントの考に和してその—不斷の變化等が人間行動に及ぼす影響に注意を呼ばうと欲した。彼が『未解決の諸問題に關する論文集』Essays on Unsettled Questions を書いた時代から轉じてその後半生の經濟學上の勞作を書くに至つた主たる刺戟は茲にある。また分配と交換とを分離して、分配法則は『特定の

ミルは價值論の前に賃銀論を論ぜんと企てた

人間制度』に依存し人の感情上思想上行爲上の習性の變轉するにつれて永劫變形すべきものと論ずるに至つた理由も茲にある。即ち彼は分配法則を生産法則に對立せしめて後者を物理自然の不易の基礎に立つものと認め、更に之を交換法則に對立せしめて後者は數學の普遍性に甚だ近い性質を有するものとした。尤も彼は時に經濟科學が主として富の生産分配の論究であるかの如き言をなし、恰かも交換理論を分配理論の一部と看做すの觀あるは眞である。併しなほ彼はこの二を分離し、第二編第三編で分配を取扱ひ第三編を『交換機制』に割いてゐるのである(その『經濟學の諸原理』Principles of Political Economy 第二編第一章第一節及び第十六章第六節参照)。

之を行ふに當つて彼は經濟學に一層の人間の色彩を與へんとする熱心の餘り之に偏して判斷を弱め、不完全な分析をもつて先を急ぐことゝなつた。蓋し彼はその賃銀理論の大綱を需要供給の説明の前に掲げたため、賃銀理論を十分に取扱ふ望みは茲に全く斷たれて了つたからである。事實彼は『賃銀は主として人口と資本との比例……に依存する』と言ふに至つた(『諸原理』第二編第十一章第一節)。或は彼が後に至つて説明する如く、賃銀は寧ろ『雇傭作業を營む……勞動階級の數』と『賃銀基金とも言ふべきものゝ總體』との比例に依存する。賃銀基金とは『流通資本中労働の直接雇傭に費される部分である』。

事實を言へば分配交換の理論は極く密接な關係に立ち殆んど同一問題の兩面たる觀が

かくて彼は叙述を第四編に至り第4に完全なる第四編の叙述に入るにつれて自ら訂正するがために一氣に附載した



形態の難駁  
なるを無難  
作に説き棄  
てた

論に生氣を與へんことを努めた。彼はその解説の大部分に於ては古い陥穽を避けることに成功した。併し之を避け得たのは即ち彼が基金説の特徴を多く無難作に説き棄てたからであつて、今や基金説の名を正當づける何物も殆んど残つてゐないのである。さりながら彼は「他の事情等しい限り賃銀率は労働の供給と逆に變化する」(二〇三頁)と言ふ。この議論は労働供給が突如として激増する直接結果に關しては妥當である。併し人口増加の通常道程に於ては同時に資本供給の若干増加が起るのみならず労働細分の進行と能率の増進も亦た起るのである。彼の「逆に變化する」(varies inversely)といふ言葉の用法は誤解を生ずる。「少なくともその時としては反對方向に變化する」と言ふべきであつた。彼は進んで一の「豫期せざる結論」を誘導する。その結論とは「固定資本原料と共に併用すべき種類の労働の場合には、労働供給の増加はその結果として『賃銀基金分割者數の増加に従つて』賃銀基金を『減少せしめる』といふのである。併しこの結果が生ずるは賃銀總體が生産總體に影響されぬとする場合に限るのであつて、事實の問題としては右最後の原因は賃銀に影響する一切原因中最有力の原因である。

三

茲に注意したいのは賃銀基金理論の最極端の形態は賃銀をもつて全然需要に支配され

併し彼の立  
場は明か  
でない

賃銀基金説  
は問題の需

要面のみに  
關する

るとする點である。尤も難駁ながら需要をもつて資本の高に依存するものとしてゐることとはゐる。併し一部の通俗な經濟學解説者はこの説と賃銀鐵則 (iron law of wages) とを同時に主張する觀がある。この後者は賃銀をもつて人間養育費に嚴として支配されるとする。勿論これらの解説者は右の各々の鋭鋒を柔けてこの二を多少とも調和ある全體の中に入れてゐたかも知れぬ。ケアンズが後に行つた如くである。併しこれらの解説者が之を行つたとは思はれないのである。

それは重大  
な若干眞理  
を支持する  
ために適用  
された

産業は資本に制限さるゝとの命題はその解釋の如何によつては往々賃銀基金理論と實際と同義であつて何れも轉用し得るものとされてゐた。この命題の説明の如何によつて之を眞なりとなし得る。併し同様の説明によつて「資本は産業に制限さるゝ」との叙述も等しく眞となるであらう。さりながらミルが基金理論を用ひたのは主として他の議論に關聯してゐる。即ち保護關稅その他の方法によつて國民の欲する状態に於ける欲望充足を妨げても労働の總體雇傭は一般に之を増加し得ぬとの議論である。保護關稅の結果は甚だ複雑であつて茲に論じ得ない。併しミルが次の如く言ふのは明かに正しい。即ち一般に資本即ちかかる關稅によつて創造された新産業に於て労働の支持補助のために用ひられる資本は「他の若干産業から引上げられ或は他の産業に入るべきものが差止められたものでなければならず、右資本は恐らくこの後者の産業に於て右新職業に於けると略ぼ同量の勞

併しこれら  
の眞理は基  
金の説を用ひ  
ずとも守り  
得る

働を雇傭せしめた一或は雇傭せしむべかりしものである。或はこの議論を一層近代的な形式で言ひ表はせば、かゝる立法は一應としては *prima facie* 國民分配分或はこの分配分中勞働に歸する取得分の何れをも増加せぬ。蓋しそは資本供給を増加せず、また一資本供給を増加せぬ限り如何なる他の方法によつても一勞働限界能率を資本限界能率に比して高めぬからである。従つて資本使用の代償率は低下しない。國民分配分は増加しない(事實の問題としては反つて減少すること略ぼ確實である)。即ち勞働も資本も分配分割のため取引上互に他に勝る新利益を得ないのであるから、何れもかゝる立法によつて利益し得ないのである。

資本勞働の  
關係の一部  
に於ける均  
整

右の説は之を逆にしてもいい。即ち保護關稅によつて創造された新産業に於て資本に實效を與ふるに要する勞働は他の若干産業から引上げられ或は他の産業に入るべきものが差止められたものでなければならず、右勞働は恐らくこの後者の産業に於て右新職業に於けると略ぼ同量の資本に實效を與へてゐた一或は與ふべかりしものであると主張してもいい。併しこの叙述は眞なる點に於ては同じであるが通常人の心を打つ力が同じくない。蓋し事實に於ては財の買手賣手が互に致す奉仕は結局に於て對等同格であるにも拘らず恰かも買手が賣手に對して何等かの特殊福利を施すものと通常見られてゐる如く、勞働を買ふ雇主と之を賣る被傭者とが互に致す奉仕は結局に於て對等同格であるにも拘

個々の雇主  
の資力は對  
顧客の販賣  
を通じて雇  
主に歸する

らず恰かも雇主が勞働者に對して何等かの特殊福利を施すものと通常見られてゐるからである。この一對の事實の原因結果は吾々の研究をなほ進めた後に詳論するであらう。

一部獨逸學者の論ずる所によれば、雇主が賃銀支拂に用ふる資力は消費者から來る。併し之は解釋の誤りを藏するの觀がある。消費者が雇主の生産物に對して前拂をする場合には、右は個々の雇主については眞となるかも知れぬ。併し事實に於ては之と違つた原則が行はれる。即ち消費者の支拂は後れる場合が多く、消費者は即坐に使用し得る物品の對價として單に延滞的な物品支配力を與ふるのみである。生産者がその財を賣り得ない場合にはその時としては勞働を雇用し得ぬことあるべきは之を認めていい。併し之は生産組織が實際上亂調となつたを意味するに外ならぬ。機械の連結鐵片の一に故障があれば機械は動かなくなるかも知れぬが、之はその機械の原動力が即ちこの連結鐵片にあるを意味するのではない。

更に雇主がある時に賃銀として支拂ふ高は消費者が雇主の商品に對して現に支拂ふ價格に支配されるものでもない。尤もこの高は一般に消費者が支拂ふであらうといふ價格に關する雇主の期待に主として支配されるが、やはり右の理に變りはない。消費者が雇主に現に支拂ふ價格と消費者が支拂ふであらうといふ價格とが結局に於て、また正常條件の下に於て實際上同一なるは如何にも眞である。併し個々の雇主の特定支拂を離れて雇主

併し廣く見  
地からすれ  
ば一切の生  
産者で  
は消費者の  
資力によ  
り來ると言  
ふは國分  
配より來



ると言ふに  
外ならぬ

一般の正常支拂を見れば、吾々が茲に取扱ひつゝあるは實にこの後者のみである。消費者はもはや一の別個の階級を成さない。蓋し一切人は悉く消費者だからである。國民分配は廣い意味に於ては専ら消費者のみに歸する。廣い意味と言ふは、羊毛或は印刷機がその保藏所たる倉庫或は機械工場から羊毛工業家或は印刷業者に移される場合に羊毛或は印刷機が消費されると言ふときの意味であつて、これら消費者は同時に生産者即ち生産要因—労働資本土—所有者である。これら消費者の扶養する兒童その他及びこれら消費者に課税する政府は(3)彼等のために彼等の所得の一部を費すに過ぎぬ。従つて雇主一般の資力は終極に於て消費者一般の資力から導かれると言ふは疑もなく眞である。併しかく言ふは、一切資力は國民分配の諸部分たりしものであつてこの諸部分は—直接使用に非ざる—間接使用に適する形態に向けられたものであると言ふのを別に言ひ表はしに過ぎぬ。現在その何れか、直接消費以外の何等かの目的に用ひられてゐるとすれば、それはこの諸部分に—更に増加分或は利潤が加はつて—代るべき國民分配流動量が流入するであらうとの期待によるのである(4)。

(3) 政府の與ふる安全その他の福利を國民所得の別項目として數へぬ限り實にかく言ひ得るのである。

(4) ウォーカー Walker の諸作及び之に關聯する諸論争は貨銀基金の問題に著しい光明を投じ

た。氏は雇主が支拂に先だつて來仕を致す諸事例を集めた。これらの事例は右論争の若干部面を明かにする上には有效であるが、論争の根本點に觸れるものではない。キアマンの『生産と分配』一七七六年—一八四八年『Gannan, Production and Distribution, 1776-1848』には古い時代の貨銀理論に對する多くの鋭い—併し時には峻嚴な—批評がある。タウシグがその『資本と貨銀』Tausig, Capital and Wages に採る態度は一段守舊的である。本文中に掲げた獨逸學說の一層詳細な説明・批評を知らんとする英國讀者は殊にこの書を参照ありたい。

貨物需要は  
一般に労働  
需要である

ミルの第一基本命題はその第四命題即ち貨物需要は、労働需要に非ずとの命題と密接な關係にあつて、之が亦た彼の意味する所を甚だ拙劣に表はしてゐる。特定貨物を買ふ者が、該貨物を生産する労働の補助・支持に要する資本を一般に供給せぬは眞である。これらの買手の特定貨物に對する需要が増加すれば、資本雇傭は他の諸生産業から該貨物を生産する生産業に轉換するのみである。併しミルは之を證明するだけでは飽き足らずして、直接に労働雇傭のために貨幣を費すよりも貨物購入のために費した方が労働者にとつて福利が多いとの意を暗に言つてゐるやうである。所で或る意味に於ては右は些か眞理を含んでゐる。蓋し貨物の價格は工業家仲介商の利潤を含むからである。もし買手が雇主たる場合には、雇主階級の奉仕の需要を少しく減少せしめて—假りに—機械製リースを買はずして手製リースを買ふ場合の如く労働需要を増加することになる。併しこの議論には次



増加は、労働需要に作用し、その作用の状態は手製の財を使用して高價機械その他の固定資本によつて製する財を使用しない場合に同じである。多數召使を雇備するは大所得の賤劣な使用であり浪費たるは或は眞であるかも知れぬ。併し大所得の利己的費消法としては、かくの如く労働階級に歸する國民分配取得分を増加せんとする直接の傾を生ずる費消法はこの以外には全く存せぬのである。

或は反對する人があるかも知れぬ。即ちもし富の他の諸形態が大規模に營利資本に代ることゝなれば労働の作業に當つて之が補助に要する物は缺乏し、之が支持に要する物すら缺乏するかも知れぬと。之は一部の東洋諸國にあつては眞實の危険であるかも知れぬ。併し西洋殊に英蘭にあつては、資本の全部量は多年の間に労働階級が消費する貨物の總體と價値に於て等しい。労働者の必要を直接に助ける資本形態の需要がその以外の資本形態に比較して極く僅か増加しても、その供給は—世界の他の若干部分から輸入され或は新需要を満すため特に生産されて—速かに生ずる。従つてこの點に多く囚はれる必要はない。労働の限界能率が高くなつてゐれば、労働の純生産物も多く従つてその収入も高いであらう。間斷なく流入する國民分配分の基流は之に相當する比例に分割され、労働者の直接消費のために常に十分な貨物供給を與へ、これら貨物の生産のために十分な要具の高を與へるであらう。需要供給一般條件によつて社會の他の階級が國民分配分中の何れの部

分を欲する儘に自由に消費し得るかゞ定まつた場合、またこれらの階級の性向によつてその階級がその支出を如何なる様式で現在充足と未來充足とに割當てるかゞ定まつた場合……凡そこれらの場合には、蘭が私人の温室から出てくると或は營業的の花屋に屬し従つて營利資本たる温室から出てくるとは労働階級の關知する所ではないのである。

### 第十一附録 餘剰の若干種

一 總じて一生産部門の總體實質費用は種々の點に於てその限界費用に比例せずしてその以下である。即ちある特殊見地から見て餘剰と見るべきものがこの限界費用の各々に對應して生ずる。併しこの餘剰中精細な研究を要するは本文中に論究した種類の餘剰に限られるやうである。

國民所得は悉く分配されるが、個人は消費者として、對價を満足する餘剰を收める

以下吾々は各種餘剰相互の關係及び各種餘剰と國民所得との關係を若干研究せねばならぬ。この研究は困難でつて而かも殆んど實際上の意義を有せぬ。併し學者の見地からすれば幾分の興味がある。

國民所得即ち國民分配分は悉く分配されて各生産要因の所有者は限界率 *marginal rate* による報償を受けるにも拘らず、なほこの所得即ち分配分は生産要因所有者に一の餘剰を與へる。この餘剰には二面がある。この二面の各々は獨立してはゐないが全く別個の面である。即ちその一面に於てはこの所得即ち分配分は消費者としての要因所有者に一の餘剰を與へる。この餘剰は彼にとつての貨物全部利用が彼にとつての對價實質費用を超過する高である。彼の限界購入分―彼が辛うじて買はんと欲する購入分―についてはこ

その以外の勞働者及び一般の貯蓄者が收める餘剰

の二は等しい。併しその以外の購入分―即ち全然買入れないのに比すれば既定價格以上を支拂つても喜んで買入れる部分―は彼に對して満足の餘剰を與へる。之は眞正純福利 *true net benefit* であつて、彼が消費者として環境或は時運による便宜から收めるものである。もし彼の環境が變化して該貨物の供給を受け得ざるに至り、之に費してゐた資力を已むなく他の諸貨物―その價格に於て現在彼がこれ以上の供給増加を欲せぬ物―に振當てざるを得なくなれば、彼はこの餘剰を失ふのである。

人が環境から受ける餘剰の第二の面はこの人を生産者と見れば最も明かである。茲に生産者とは直接の勞働によると、その所有する物的資力の蓄積―即ち取得貯蓄―によるとを問はない。勞働者としての生産者は勞働者餘剰 *worker's surplus* を收める。何故かと言へば作業は多く積極的快樂を與ふることあるにも拘らず、彼の一切作業の報償率は作業最終部分―作業報償のために辛うじて爲さんと欲するに過ぎぬ部分―の報償率と同率だからである。資本家(或は一般に形態を問はず蓄積富の所有者)としての生産者は貯蓄者餘剰 *saver's surplus* を收める。何故かと言へば彼の一切部分の貯蓄即ち待望の報償率はその一部―即ち貯蓄報償のために辛うじて貯蓄せんと欲するに過ぎない部分―の報償率と同率だからである。彼はその安全保管の費用を支拂はざるを得ない場合従つて貯蓄から負量の利子を收める場合にもなほ若干の貯蓄をなすものであるが、かゝる場合にも彼は一般に

右の率の報償を受けることになるのである(1)。

(1) エッセン Cossen とジェブンスとはこの點を力説した。なほクラーク Clark の『労働の餘利利得』Surplus Gains of Labourを見よ。

右二類の餘利は各々獨立のものではない。従つて之を計算する場合には同一物を二重に算入し易い。蓋し生産者餘利を計算する場合に、生産者が労働又は貯蓄から受ける一般購買力の價値をもつて之を計算するとすれば、吾々は既に暗黙の裡に彼の消費者餘利をも亦た算入してゐるからである。(但し彼の性格及び周圍の事情を與へられたものとする)。この二重計算の困難は分析の上では之を避け得る。併し實際上に於てはこの二重の餘利を評定合計するは如何なる場合にも不可能である。人がその環境から收め得る消費者餘利 consumer's surplus、労働者餘利貯蓄者餘利は人の個人的性格によつて違ふ。即ち一には消費・労働待望の満足・非満足に對する一般受感性により、なほその人の受感性の弾力性即ち消費・労働待望の増加につれて受感性の變化する率によつても違ふ。消費者餘利は先づ最初個々の貨物と關係を有し、その餘利の各部分は貨物取得條件に影響する時連の變化に直接の關係を有し之に應じて變化する。二種の生産者餘利は互に獨立であり累積的であつて、自用品を貯蓄し作業する人の場合には明白に別個のものである。この二種と消費者餘利とが密接な關係を有するは次の事實によつて明かである。即ちロビンソンクルーソー

の生活の安樂・苦痛を評定するに當つては、彼の生産者餘利の計算中に當然彼の消費者餘利の全體も入るやうな方法をとるのが最も單純であることこれである。

労働者收入の大部分は労働者養成の煩勞・失費に對する延滞收穫の性質を帯びてゐる。

従つて労働者餘利の評定は甚だ困難である。殆んど一切の彼の作業は快樂的であるかも知れず、彼はその作業の全部に對し良い賃銀を收めてゐるかも知れぬ。併し人間の安樂・苦痛を比較してその總計算をなす場合には、彼自身及び兩親の過去に於ける多大の努力・犠牲を差引かねばならぬ。併しこの努力・犠牲が何程なるかは明言し得ない。一部少數者の生活では善利の方が多いかも知れぬ。併し大多數者の生活では善利の方が多く、若干者の生活では善利の方が非常に大であると考えべき理由がある。この問題は經濟的たると同じく哲學的である。殊に人の活動は一生産手段たると同時にそれ自體自己目的であるといふ事實があり、且つ人間努力の直接費 immediate and direct (or prime) cost とその全部費用とを明確に區別するは困難であるため、問題は複雑である。その解決の不完全なるも亦た已むを得ない(2)。

(2) 第六編第五章を見よ。

二

の生産者餘利がその直接費用を超すならば、その餘利は右の區別せぬ。

物的要因の  
場合には一  
切支出を計  
上すればか  
餘利は消滅  
する

轉じて物的生産要具の収入を考察する場合には問題はある點に於て右よりも單純である。物的生産要具は作業と待望とによつて生ずるのであるが、この作業と待望とは右の労働者餘利待望者餘利を與へ、なほそれ以上に一の餘利(即ち準地代)を與へる。之は全部貨幣收穫が直接支出に超過する高である。但し専ら短期のみを見るものとしてある。之に反して長期については、即ち經濟科學上に於ける一切の最重要問題殊に本章所論の諸問題に於ては、直接支出と全部支出との區別はない。結局に於て各要因の収入は要因の生産に要した努力犠牲の合計をその限界率で償ふに足るのみなるを原則とする。もし報償率がこの限界率よりも少なくならうとすれば供給は減少するに至る。従つて大體に於てこの方面には一般に超過餘利は少しもないのである。

土地の場合  
には部分的  
例外がある

右最後の叙述は近時に至つて漸く使用され始めた土地には或る意味に於て當嵌まる。また舊國の多くの土地も、もしその記録を最古の起源に至る迄遡及し得るとすれば、一にも恐らく當嵌まるかも知れぬ。併し之を當嵌めやうと企てれば、經濟學上のみならず歴史上倫理學上の論争問題を引起するに至る。吾々の當面の研究は回顧的に非ずして前望的である。吾々は過ぎ去つた方を顧みずして來るべき方を眺める。吾々は現存土地私有財産の衡平と當然の限度とを問ふものでもない。たゞ國民分配中土地收入となる部分はその以外の要因の収入が餘利でないといふ意味に於て一の餘利たることを知るだけである。

第五編第八章—第十一章に詳論した學理を本章の見地から述べるとかうなる—即ち一切生産要具は機械たると工場及び工場所在の土地たると農場たるとを問はず、之が所有者運營者に對して特定生産行為の直接費以上に多大の餘利を與ふる點は同じである。また結局に於ては、之が購入運營のための支出犠牲煩勞を償ふに要する高以上に正常的 *normal* にも與へぬ點も同じである。之が右諸章の意である。併し茲に土地とその以外の生産要因との差異がある。即ち社會的見地からすれば土地は一の永久餘利を與へるに反して人工の滅失物は之を與へないのである。ある生産要因の収入はその要因の供給を維持するために必要であるといふことが眞に近ければ近い程、その供給は密接に變應して、該要因が國民分配分から引出し得る取得分は供給維持費用に一致するに至るのである。之に反して舊國の土地は例外的の地位にある。何となれば土地の収入は右の原因に左右されないからである。さりながら土地とその以外の耐久的要因との差異は主として程度の差である。土地地代を研究する興味の大部分は、土地地代が經濟學の一切部分を通貫する一大原理の例解を供する點にある。

### 第十二附録(1) リカードの農業税・農業改良に關する説

(1) 第六編第九章四参照。

リカードの推理の一部は有り得べからざる暗黙の假定に立ち論理的には妥當であるが生活の活條件には當嵌まらぬ。

リカードの思想の卓抜なことゝその表現の不完全なことゝについては既に多言を費した。特に吾々は彼が適宜の制約を附せずして收穫遞減法則を定めるに至つた諸原因の在る所を説いた。農業改良の影響及び農業税の歸著についての彼の取扱方にも同様の言が當嵌まる。彼は對アダム・スミスの批評に於て殊に不注意であつて之を指摘したマルサス Malthus は正し(その『經濟學』Political Economy 第十節の要點)「リカードは一般には永續的・最終的結果を眼中においてゐながら、土地地代に關しては常に反對の方針を採つた。アダム・スミスが米或は馬鈴薯の栽培は穀物よりも高い地代を生ずるであらうと言つたに對して彼が反對するのは、一時的結果を眼中においてゐるが故に外ならぬ。なほマルサスは更に『實際上から言へば、穀物から米への轉換は漸次的でなければならぬから、地代の一時的低落すら生ぜぬと信すべき理由がある』と附言してゐるが恐らく當らずと雖も遠からずである。

農業改良は地代と終極的の結果に於ては、結末は、注意すべきに、直後、リカードの論議は、この點に於て、貫つて、マルサスの論議は、正し、はた、

それにも拘らず、多大の穀物を輸入し得ない國に於ては、耕作税を調節し改良を妨害して一時地主を富ましめその以外の國民を苦しめるは甚だ容易であるといふ一事を主張するは、リカードの時代にあつては實際上非常に重要であつた。またこの一事を知るは今日に於てすら多大の科學的興味である。國民が窮乏して菜色あるに至れば地主の懐も淋しくなるは疑を容れぬ。併しこの事實はリカードの主張を殆んど弱めなかつた。その主張とは、彼の在世中に起つた農業價格農業地代の大騰貴は即ち國民に及ぼした危害を示すのであつて、この危害は地主の收めた福利とは到底比較にならぬ大なる危害であつたといふにある。併し茲では少しく轉じてリカードの所論の他の部分を批評紹介したい。即ちリカードがその所論の出立點を好んで鋭い明確な假定に求めて明白な純結論に到達した場合であつて、これらの結論は人の注意を鋭く引き付け、讀者はこれらの結論を自ら組合せて之を生活の活事實に適用すべきものとなつてゐる。

第一に一國內で栽培される『穀物』Corn が絶対に必要であると假定しやう。即ち穀物の需要に毫も弾力性なく、その限界生産費の變化は國民の支拂ふ價格を左右するのみでその消費量を少しも左右しないと假定しやう。すれば穀物に十分の一の租税を課する結果は穀物實質價値の騰貴となり、之は従前の穀物實質價値の十分の九が限界充用分従つて一切充用分を償ふに足る程度迄騰貴する。従つて各個の地所の總穀物餘剩 Gross Corn surplus

併しリカードの説を辿り、且つ穀物の需要を固定する。右に述べた左の

は従前と變らぬ。併しその十分の一は租税として引去られるから、残りは従前の穀物餘剰の十分の九とならう。さりながらこの餘剰の各部分の實質價值は十對九の比で高まつてゐるからその各部分の實質餘剰 *real surplus* は變化しきまつ。

併し生産物の需要が絶對的に非彈力的であるとの假定は甚だ無理な假定である。價格の騰貴する結果、事實若干種の生産物—重要穀物食料品ではないにしても—の需要は直ちに減退する。従つて穀物即ち生産物一般の價值は決して租税に精確に比例して騰貴することなく、一切の土地の耕作に用ひられる資本労働は減少する。即ち一切の土地から生ずる穀物餘剰は減少するが、その減少の比例は土地によつて同じくない。穀物餘剰の十分の一は租税に引去られる上にその餘剰の各部分の價值の騰貴は十對九の比率以下であるから、實質餘剰は二重に低下することになる。(原著一五八頁即ち第四編第三章三の最初の諸圖解は以上の推理を如何に幾何學の言葉に改譯すべきかを直ちに暗示する)。

近代に於ては穀物輸入は自由となり租税によつて穀物實質價值を著しく高め得ないから、近代的諸條件の下に於ては右の直接當面の低下は非常に大となるであらう。よしんば輸入がないとしてすら、その實質價值の騰貴が國民の數を減少する場合には同じ結果が漸次生じてくるであらう。或は最も有り得べからざる場合であるが労働人口の生活程度と能率とを低下する結果を生ずる場合も同斷である。これら二結果が生産者餘剰に及ぼす

作用は甚だよく似てゐる。雇主にとつて労働を高からしめる點は何れも同じである。たゞ後者は労働者にとつての時間賃銀をも低下せしめる。

これら一切の問題に關するリカードの推理を辿るのは稍や困難である。何となれば彼は往々一言の注意もなくして『直接』結果の取扱を打切つて『終極』結果に移つて了ふからである。前者は人口増加に比して相對的に短かい『短期』に屬するものであり、後者は土地生産物の労働價值 *labour value of raw produce* が國民の數従つて土地生産物の需要を著しく左右する時を有する『長期』に屬するものである。かゝる解釋句を挿入すれば彼の推理にして妥當せざるものは殆んどないであらう。

次に轉じて農業技術の改良に關する彼の所論を見たい。彼はこの改良を二種類に分ける。殊に科學的興味があるのは彼のその第一種の取扱である。その第一種とは『私が資本を減少し而かも資本の諸逐次充用部分の生産力の差異を變ぜずして同一生産物を收め得る』如き改良である(2)。勿論一定の改良が特定地に及ぼす効果は土地によつて大小があるが、彼はその一般論究の目的のためにこの事實を度外視する(上記第四編第三章四を見よ)。上來論じたと同じく穀物の需要は少しも彈力性を有せぬと假定して彼は次の點を證明した。即ち資本は劣等地(及び優等地の最收約的耕作)から回收され、従つて最有利の事情の下に資本充用から收める餘剰—之は穀物で測定する、即ち吾々の所謂穀物餘剰—は従前耕作

同一假定于各  
下本充用分  
資收増等  
のだけ増を  
量する改良  
す重質の代  
を二重すの  
ら來すの低  
あ

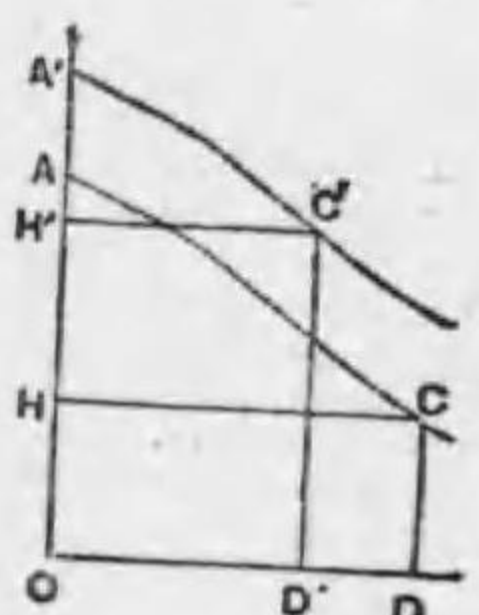


限界に立つてゐた程劣等でない土地に相対的の餘剰となるであらう。また假設によつて何れの二資本充用分の差別生産性も變化しないから、穀物餘剰は必然低下せねばならず、この餘剰の實質價值労働價值は勿論右との比例以上に著しく低下するであらう。

(2) 第二章。Collected Works, p. 42. Gunnun, Production and Distribution, 1776—1848, pp. 325-6 參照。リカー

Fが改良を二種類に分つてゐる點は必ずしも當つてゐないが茲に考究する要はない。

四十圖



表はす。(茲で一言注意したいのは、吾々は上圖をもつて一農場の圖解とせず全國の圖解としてゐる。併し之がために上圖の解釋を改むべき點はたゞ一點である。何故にこの一點を改めるかと言へば、それは一農場の場合には一切資本充用分は同一隣接地域に充用され従つて—同種—生産物の等量の價值を等しいと假定し得るが、全國の場合にはかく假定し得ないからである。さりながらこの困難を除くには、一共同市場への生産物運送失費をそ

の生産失費の一部分と看做せばいゝ。すれば資本労働各充用分には運送失費たる部分があることゝなる)。

さてリカードの言ふ第一種の改良は最有利條件の下に充用される充用分の收穫をOAからOA'に増加するであらう。然らざる充用分の收穫はこれと等量だけ—同比例に非ず—増加する。その結果新生産物曲線A'C'は舊生産物曲線ACと同形状であつて、たゞ距離AA'だけ高まるに過ぎまい。従つてもし穀物の需要が無限でありその結果舊充用分の數ODを有利に充用し得るとすれば、總體穀物餘剰は變化の以前と同じで變じない。併し事實の問題としてはかくの如き即時の生産増加は有利たり得ない。従つてこの種の改良は必然總體穀物餘剰を減少せねばならぬ。リカードは茲では總體生産物は全然増加せぬと假定してゐるから、この假定の下に於ては僅かにOD'充用分のみが充用されるであらう。OD'はAODC'がAODCに等しいとの條件によつて定まる。そして總體穀物餘剰はH'C'に減ずるであらう。この結果はACの形状には無關係である。同じ意味になるが、リカードがその論究の證明に用ひた數字的例解のために如何なる圖解を用ひやうともその特定圖解には無關係である。茲にこの機會をもつて言つておきたいことがある。即ち數字的舉例を原則として安全に用ひ得るは例解としてのみであつて、證明としては之を用ひ得ぬことこれである。蓋し結論が眞なるか否かを専ら決定する場合よりも、特定の場合に示された數字が暗黙の裡に

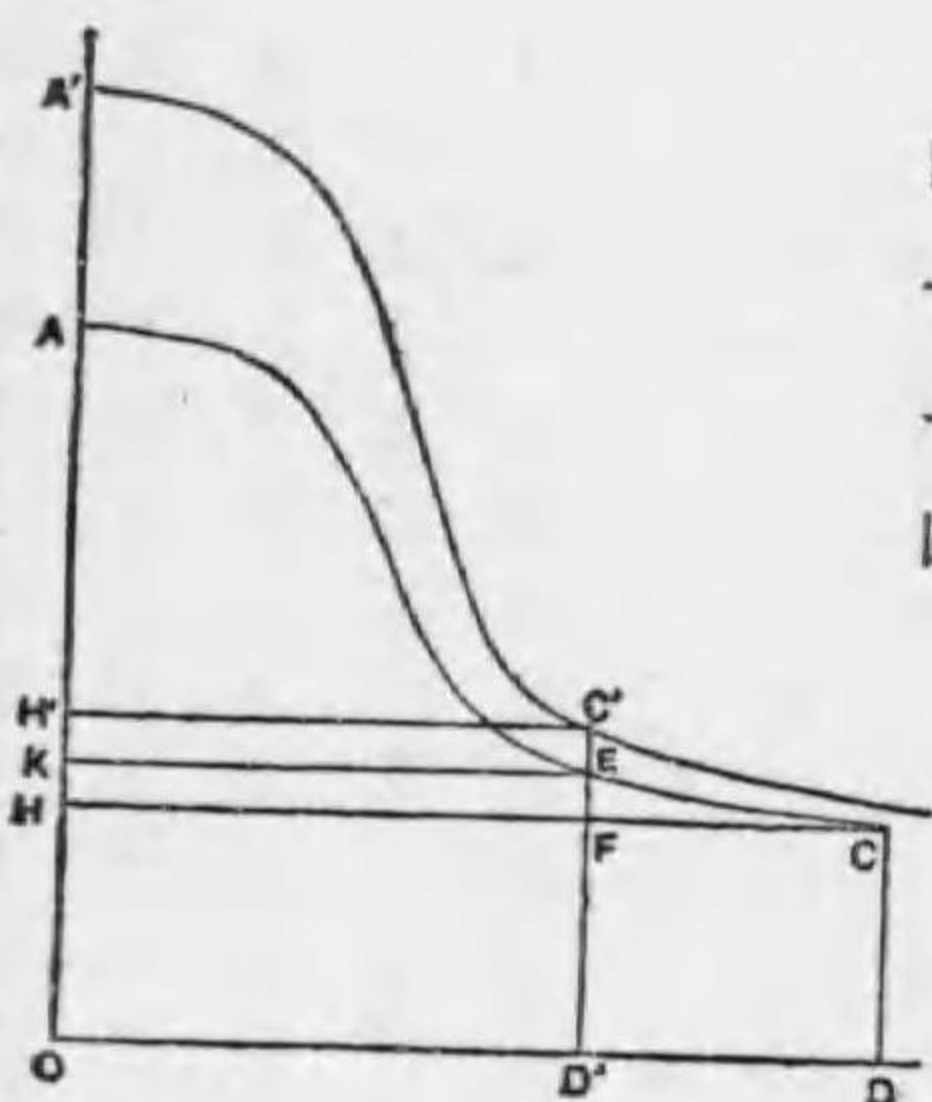
右例所とミ  
とににいふは  
同じつて一べき  
結して比き量

論を出さう  
としたが之  
は正しくな

結論を假定してゐるか否かを知る方が一般に困難だからである。併し彼の推理上の本能は古今無比であつた。最も危い推理過程を彼の如く安々と踏み進み得る者はその道に達した數學者と雖も極く少ない。ミルの精緻な論理的精神をもつてしてすら到底及ばなかつたのである。

ミルはその特徴ある論法をもつて言つてゐる。即ち一の改良は各種の土地に充用した資本の收穫を等量づゝ増加すると見るよりも同一比例に増加すると見る方が確からしさが遙かに多いと『經濟學』第三編第三章第四節の第二の場合を見よ。彼はかくすることによつてリカードの鋭い明確な議論の根柢を切り崩して了つたことに氣付かなかつた。その

四十一圖



根柢とは、變化が各種資本充用分の差別利益を變ぜぬといふ一事である。尤も彼はリカードと同じ結論に到達したが、之は彼が例解のために選んだ數字の中に既に彼の結論が暗黙の裡に含まれてゐたために外ならぬ。

上圖は特に次の點を示さんとするものである。即ち經濟問題の中には、リカード程の天才もない者が取扱ふ場合には何人と雖も若干思考手段の助を借りなければ安全に取扱ひ得ぬ種類の問題が存することこれである。その手

段とは數學でも圖形でもいゝが、これらは或は收穫遞減法則に關し或は需要供給法則に關して經濟諸力の諸表を一の連續的全體として表はす具である。右圖の曲線ACの解釋は四十圖に於けると同様である。併し改良の結果資本勞働各充用分の收穫は三分の一増加する。即ち等量づゝ増加せずして同一比例に増加する。新生產物曲線A'C'はAC以上に高まるが左方は右方よりも遙かに高い。耕作はOD'充用分に限られ、新總體生產物を表はすA'OD'C'は四十圖同様AODCに等しく、H'C'は四十圖同様新總體穀物餘剰である。さてA'H'C'の三分の四であること及び之がAHCよりも大なるか小なるかはACの特定形狀によつて定まることは容易に證明し得る。もしACが直線であるか或は直線に近いならばミルの數字もリカードの數字も一生産物直線上の諸點を表はす。併し右圖のACの形狀ではA'H'C'はAHCよりも大である。即ちミルの議論の結論は彼が總生產物曲線 Gross Produce curve に與へる特定形狀に依つて左右されるのである。リカードの議論に至つては即ちさうでない。

(ミルは一國の土地の耕作部分は三等の土地から成り、各々等額の失費によつて六〇・八〇・一〇〇ブッシェルを産するものと假定して、各資本充用分の收穫を三分の一増加する改良は六〇對二六三分の二の比率で穀物地代を減少することを示してゐる。併し吾々は右圖に於てこの三等の土地が各々等額の失費によつて六〇・六五・一一五ブッシェルを産すること

を極く大體であるが表はしてゐる。もしミルが一國內の土地の地味の分布状態をかくの如くに考へたとすれば、この場合には改良は穀物地代を六〇對六六三分の二の比率で高めると見たであらう。

最後に注意したいのは、改良が土地地代に及ぼす可能結果に關するリカードの矛盾は農業地のみならず都會地にも當嵌まることである。例へば米國では鐵筋を用ひて商店を十階の高さに建築し起重機を用ひてゐる。今この建築法が建築・點燈・通氣起重機製作の技術の改良の結果突然非常に能率を生じ經濟的となり便宜となると假定して見やう。この場合には各都市の商業區域面積は現在よりも狭まり、多大の土地は商業よりも利益少ない用途に歸るであらう。よつてその純結果としての都市の總體敷地價値 aggregate site value の低下を來すも可能でないとは限らぬ。

リカードの矛盾は都會地に當嵌まる

### 數學附録

#### 註解二四

(一一二五頁—第六編第四章三註(3))

彼が時間  $\Delta t$  内に富を生産する蓋然量を  $\Delta x$  とし、彼の消費の蓋然量を  $\Delta y$  とする。すれば彼の未來奉仕の割引値は  $\int_0^T R^{-t} \left( \frac{dx}{dt} - \frac{dy}{dt} \right) dt$  であつて、この場合  $T$  は彼の極大可能壽命である。同様の方法によつて彼の養育養成の過去費用は  $\int_0^T R^{-t} \left( \frac{dy}{dt} - \frac{dx}{dt} \right) dt$  である。この場合  $T$  は彼の出生日である。もし彼が一生涯

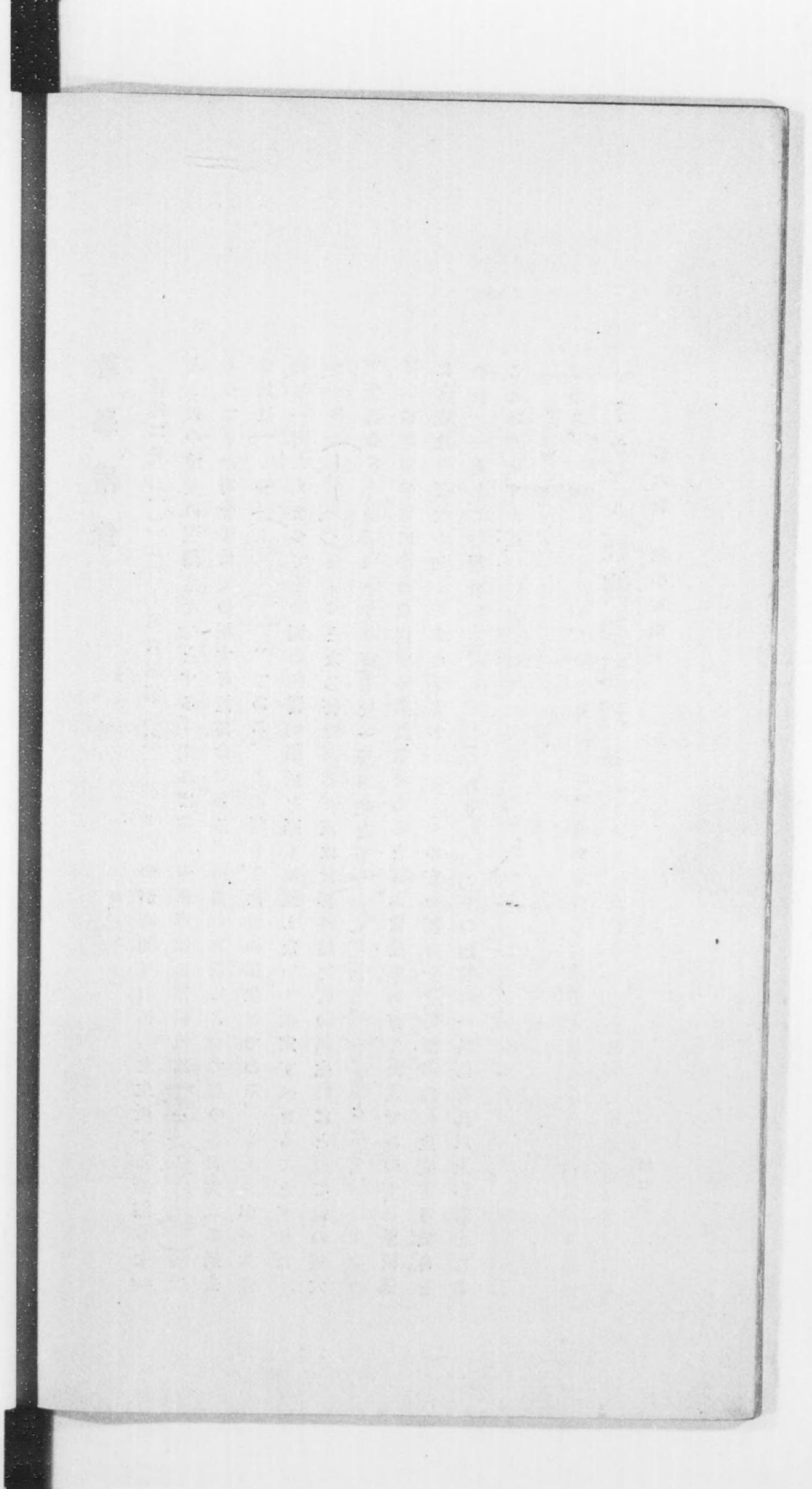
或る一國に止まつてその國の物質的福祉を毫も増減しないと推定すべきものとすれば  $\int_0^T R^{-t} \left( \frac{dx}{dt} - \frac{dx}{dt} \right) dt = 0$  となる筈である。或は計算時點を彼の出生時にとつて彼の極大可能壽命を  $T = T_1 + T_2$  とすれば、右は一層單純な形  $\int_0^T R^{-t} \left( \frac{dx}{dt} - \frac{dy}{dt} \right) dt = 0$  となる。

$\Delta x$  が時間  $\Delta t$  内に彼の生産する蓋然量であると言ふは簡略に言つた迄であつて、一層精確に言表はせば次の如くである—彼が  $\Delta_1 x, \Delta_2 x, \dots$  の富の諸分子を時間  $\Delta t$  内に生産する機會を  $p_1, p_2, \dots$  とし、この場合  $p_1 + p_2 + \dots = 1$  であり  $\Delta_1 x, \Delta_2 x, \dots$  の連數の一又はそれ以上が零となることありとすれば、

$$\Delta x = p_1 \Delta_1 x + p_2 \Delta_2 x + \dots$$

である。

### マールシアル經濟學原理 畢



# 索引

I 件名索引……ローマ字綴による。

II 地人名索引……原語の綴による。

(編・章・節を追記したものはその項の題目として詳論しあるもの)

## I 件名索引

件名索引  
A  
|  
B

### A

アブワブ abwab 277 註

愛蘭

農業上の産業組合 308

コティアー cottier 制 308

英吉利耕作制の強行 309-10 註

アングロ・サクソン

その貯蓄 157

その労働者 387

その自由と残滓階級 428

参考-英國

### B

米國

アメリカ銅山の發見 242

小麥生産地としてのアメリカ

347, 354

米國戦争 141

各種工業の利潤率 221 註

世態の變化性 237 註

家族の三代目 237 註

持分耕作 283, 287 註

農業家 291-2

土地耕作制 284, 292

發明の進歩 345

企業生活 369-70 註

最富者の總體所得 371

平等分配と合衆國技術工 425

合衆國は新國ならず 261 註

米國經濟學者

賃銀理論 15

利潤觀 218-9

位置の重視 261 註

人口稀薄地の人口増加 316

便宜品 conveniencias 97-8

伯耳義

農産 294 註

貧乏

マルサスの説 10

極貧と巨富の共存は不可 426

微量

その二次 31 註

簿記

農場簿記の困難 207-8, 311

物價

その騰貴と利率 182-5

一八七三年の騰貴 200

一回復 421

文明階段

地代法則との關係(ベティー) 265 註

將來の一に於ける英吉利土地耕作制

269

文明生活

その要件 347-52

分益農法 metayer system 282-8 (第六編第十章四)  
米國の—283, 284  
英吉利耕作制に於ける—314  
分業 division of labour  
—と生産力 20  
分配 distribution  
國民所得の分配 第六編  
交換との關係 3  
正常分配交換 251  
需要が一に及ぼす影響 17-24 (第六編第一章三-六)  
需要供給が一に及ぼす影響 46-9 (第六編第二章一)  
—論の供給面需要面に於ける土地と資本 (5-8 (第六編第二章五))  
—の不平等 425-7  
平等—と技術工 425-6  
分配理論  
分配の原理 3  
分配交換の中心問題 162 註  
—問題の困難 16  
—問題の細分 16  
フィジオクラットの説 4, 5-9  
スミスの説 9-10  
マルサスの説 10-11  
リカードの説 11-4  
ミルの説 14-5  
分配論の結論 417-27  
(第六編第十一章一-三)  
分配研究の與へる暗示點 423  
—と價值理論(ミル) 450-3  
—と價值理論 451-2  
—と賃銀理論(ミル) 451-3  
分配法則(ミル) 450-1  
分析 analysis  
—的見地 105 註  
利潤構成分子の—87, 160, 212-3

近代的—と耕作制 282 註  
—と二種の餘剰の二重計算 466

### C

地方化産業 localized industry 341  
農業は—たり得ず 300  
地味 fertility  
—と位置 260-1 註  
自然的— 262  
—の絶對的測定 256  
賃銀 wage (第六編第三章-五章)  
實質 real—11註, 97-113 (第六編第三章三-八), 375, 381, 383註, 399-400註, 416  
實質—と雇傭中斷性 106-8  
新國の實質—評定の困難 336  
全部實質—133  
名目 nominal—97-113 (第六編第三章三-八)  
スミス(名目・實質—) 97-8  
貨幣 money—339, 399 註  
通常—(スミス) 137  
時間 time—91, 362註, 383  
出來高 piece-work—92, 383, 383註  
能率 efficiency—93-6  
實質能率—362註  
代表的— 332  
平均 average—330註, 361, 363註  
正常 normal—32, 209, 239  
勞働—一般 62  
—一般—率 62  
貨幣拂なき— 99註  
—一部實物拂— 101-3 (第六編第五章三)  
物品支給制 truck-system 101-3 (第六編第五章三)

—の均衡水準 75  
—標準 90, 416  
結果拂—(コール) 384註  
餓死 starvation—298註  
—と利子との異同 318-20  
—と利潤との差 234-5  
現行—と現行利潤との變動上の差 325  
—と純生物 33, 72-3  
—と純生物との接近 407-10  
農業— 347  
農業勞働者— 364-5  
環境・時運と— 320-1  
新國の—率 335-40  
人口制限と—増加 378-82  
—と營利資本その他の富との關係 460-3  
—額と資本量 449-50  
—の資本依存 81-6 (第六編第二章一〇)  
—と貨幣購買力の變動 98-9  
—取得階級 101註  
職業の不潔と— 113  
近代産業制度に於ける—變動 145-7  
—と職工長收入との比較(代用原理) 191-3 (第六編第七章二)  
男子賃銀と家族員全賃銀との割合 430-1 註  
最低— その項  
參考—收入・勞働收入  
賃銀基金説 wages-fund doctrine 第六編第十附録, 85  
その俗惡な形態 45)  
その最極端の形態 454-5  
ミル 450-3  
ケアンズ 453-4  
ウォーカー 458-9註  
キャナン 459註

タウシグ 459註  
獨逸學者 459註  
賃銀理論 34  
餓死限度 6  
自然賃銀率(フィジオクラット) 6-8  
自然賃銀率(チューネン) 42 註  
テュールゴー 6-7註  
ヒューム 7註  
スミス 9  
マルサス 10-11  
リカード 11-4  
マカロック 13註  
ミル 14-5, 451  
舊—と近代—との關係 83  
賃銀問題 31 註  
賃銀の支配 61  
賃銀支配原因 34  
供給價格の—分子としての賃銀 44  
勞働需要供給と賃銀 61  
賃銀の最低最高限度 250  
—と勞働爭議 453  
—と一般勞働政策 453  
賃銀進化  
歴史家の賃銀比較 340註  
賃銀進化史 359-67 (第六編第十二章九・一〇)  
熟練勞働賃銀の變化 360-5  
老年勞働賃銀 365-6  
少年少女賃銀 366  
女子賃銀 366-7  
進歩の賃銀引上力 370-3 (第六編第十二章一・二)  
賃銀鐵則 iron law  
テュールゴー 7註  
スミス 10  
リカード 12  
獨逸社會主義者 12  
獨逸經濟學者 12註

一と後進國 58  
 極端な一の基礎假定 377  
 一と賃銀基金説 455  
 賃銀と能率 15, 88-96 (第六編第三章  
 二)  
 スミス 9-10  
 ウォーカー 15  
 米國經濟學者 15  
 分配理論との關係 16  
 賃銀増加と作業増加 49-62 (第六編  
 第二章二・三)  
 最高賃銀は最安價 59, 243註  
 各種労働者間の賃銀及び能率の相互  
 關係 70-6 (第六編第二章七)  
 賃銀増加と能率増進 381-2  
 賃銀と能率との適合 409  
 賃銀と労働組合  
 労働組合標準賃銀 standard wage  
 90, 406, 413  
 賃銀標準 416, 418  
 賃銀貨幣標準 416, 417, 418  
 標準貨幣賃銀 415, 417  
 國際的賃銀運動 396-7  
 賃銀調節協議會 404-5  
 信用變動と労働組合標準賃銀 415-22  
 (第六編第十三章一〇)  
 人爲的賃銀標準と最低賃銀 429  
 参考-労働組合  
 賃賃料 rental  
 一と利子の別 164  
 地料 rental 355,  
 貨幣- 355註  
 實質- 355註  
 知識  
 完全一の假定 76-8 (第六編第二章  
 八)  
 貯蓄  
 原因 63-4

一の需要價格 64  
 一般と利率 64  
 一心 357  
 一報價の限界率 465  
 一者餘利 (生産者餘利を見よ)  
 参考-待望  
 長期・短期  
 最有力原因の相違 142-2  
 地主の地位 295註  
 中位の期間 267  
 需要供給の均衡 317-8  
 ミルの賃銀理論 453  
 直接支出と全部支出 468  
 リカード 473  
 参考-短期  
 直接費 prime or direct cost 49-50,  
 94, 145  
 農産物の- 297  
 人間努力の- 467  
 直接需要 direct demand 18, 317  
 労働の- 393  
 調節 adjustment 適合を見よ  
 中間財 intermediate goods 156, 461  
 註  
 ボーム・バーゴルク 161-2 註  
 中産階級  
 一所得 370  
 人を容るゝ餘地 437  
 中數 mean  
 一太陽 181

D

代表的 representative  
 一労働者 29, 32  
 一雇主 32  
 一正常經營收入 195

一限界正常生産失費 231  
 直正の一 限界 332註  
 一賃銀 362  
 一職業 364  
 十九世紀の一産業 373  
 大規模生産 production on a large  
 scale 308, 343  
 一の經濟と利潤率 222-4  
 農業上工業上の一經濟の差 370-3  
 一と産業組合 308  
 大農地 large holdings  
 一と小農地 300-10 (第六編第十章  
 八・九)  
 一の總地代 305  
 一の社會的必要 306  
 代用 substitution  
 資本の労働- 42-3  
 一過程 74  
 組織の- 195  
 生産要因の- 327  
 労働一般に代はる資本一般の- 328  
 代用原理 principle of substitution  
 4, 25-6, 47, 190, 205, 321, 322-3  
 テューネン 43註  
 一と經營收入 191-8 (第六編第七章  
 二-四)  
 大企業間の- 197  
 企業者間の- 323-4  
 代用法則 law of substitution 67, 187  
 247註  
 團結 342  
 制限的- 74  
 不熟練労働者の- 132  
 労働者側の- 145  
 一と賃銀 145  
 職業- 250  
 投機的- 341  
 生産者- 341

地方的- 341  
 職業一の搾取 369註  
 雇主- 405, 407  
 雇主一の保護 403  
 参考-労働組合  
 弾力性 elasticity  
 英國と性格の- 268  
 受感性の- 466  
 需要の- 471  
 非弾力的 471, 472, 473  
 参考-伸縮性  
 出來高 piece-work  
 一作業の中断性と實質賃銀 107註  
 一拂 285  
 一作業量(シュモラー) 384註  
 一作業と労働組合 383-4註, 406,  
 410註  
 丁抹  
 農業上の産業組合 308  
 傳統 228  
 生産業の-(バヂョット) 206  
 獨逸  
 農業上の産業組合 308  
 發明の進歩 345  
 恩情主義 428  
 一學者(雇主資力と消費者) 437  
 土壤  
 化學的性質 253  
 力學的性質 253  
 良土の意味 306註  
 動機  
 計慮的- 232  
 獨立  
 一生産者の取引力 134  
 獨占 monopoly 342  
 一の可能 214  
 一利潤 223  
 部分的- 223, 324, 382

地方的— 341  
 —價值 345  
 —料金 348  
 —破壊力 324  
 —と經濟問題 444

奴隸  
 —勞働と自由人の勞働 118註  
 物的財としての— 118  
 —勞働の能率 378

件名索引 D | E  
 努力  
 限界— 337  
 —收入 239, 318  
 —の直接費と全部費用 467

道德  
 實際問題の一面と經濟面 444

**E**

營業關係 business connection 195, 209, 216, 231, 238, 245  
 營業失費 trade expenses  
 —と實質賃銀 100  
 營業施設  
 高賃—と勞働時間短縮 386, 389

英國  
 因襲の力と出生率 140  
 企業心 291,  
 自由企業 268  
 —と自由 268  
 外國貿易と快適品・奢侈品・必需品  
 340-4 (第六編第十二章二・三)  
 現在産業問題の原因 340-1  
 十八世紀の産業問題 340-1  
 六 工業進歩の直接利得 344-6 (第六編第十二章四)  
 新運輸手段からの利得 344-6 (第六編第十二章四)  
 生活必需品の發達 347-52 (第六編

第十二章五)  
 進歩と生産要因の勞働價值 344-6  
 (第六編第十二章四)  
 經濟進歩と生活程度 第六編第十三章  
 —諸港の開放 (1846年) 379  
 前世紀初頭の資本 447-8  
 近代の利率 172  
 資本破壊部分の補充 180  
 營利資本と利率 180-1  
 富豪の三代目 236註  
 富豪階級の安定 237註  
 最富者の總體所得 371

英國經濟學  
 地味の重視 260-1註  
 十九世紀初頭の地位 267-8

英國農業  
 近代の實質純地代の伸縮性 273-5  
 田舎生活の安定 281註  
 地代の物納と金納 283  
 企業心 291  
 土地耕作制 292-9 (第六編第十章六・七)  
 蒸氣力・馬匹力・筋肉力 301註  
 小農場 304  
 土地總體餘利 262  
 耕作上の地主分と耕作者分 261-8  
 (第六編第九章五)  
 自作小農 307-8  
 分益農法 314  
 大小農地數 307註  
 大英國農業上の産業組合 309

英國勞働問題  
 勞働階級の教育 120-1  
 勞働口探求 138-9  
 人口制限と賃銀増加 378-82  
 濠洲との實質賃銀比較 399註  
 平等分配と技術工 425-6  
 不熟練勞働者の割合 431

大英國産業史と勞働時間 386註  
 永久牧場 permanent pasture 306註  
 營利資本 trade capital 160  
 英蘭の—と利率 180-1  
 延期 357  
 消費の— 460  
 參考-待望

**F**

フィジokrat Physicrats  
 分配理論 6-8  
 人口理論 6  
 賃銀理論 6  
 賃銀の餓死限度 6  
 自然賃銀率 8  
 自然利潤率 7  
 『爲さしめよ行かしめよ』 8註  
 純生産物 8註  
 土地生産者餘利 260

フィー・シムプル fee simple 291  
 不熟練勞働 unskilled labour 360, 364, 366  
 生活發足點 122  
 特性 132  
 賃銀 370  
 —者の減少 431-4  
 —者減少策 434-6  
 —の實質賃銀 432  
 —賃銀増加 432  
 —兒童の教育 435

佛國  
 企業成功割合 (ルロア・ボーリュ—)  
 237-8註  
 農奴の頭 maitre valet 284註  
 分益農法 287註  
 農産 294註

佛國大戦 343  
 前世紀初頭の— 447  
 參考-フィジokrat  
 副業  
 —收入 298註  
 福利 benefit  
 眞正純—と消費者餘利 465  
 副産物  
 農業— 297  
 富者  
 最富者の總體所得 (英國と米國) 371

**G**

外國貿易  
 —と經濟問題 444  
 蓋然 probable  
 奉仕の— 125註  
 失敗成功の— 125註  
 生産消費の— 479

原因  
 經濟— 22  
 攪亂的— 232  
 —と結果との關係 40  
 參考-結果

限界 margin 22-3, 25, 28, 40 1, 4, 193  
 有利性— その項  
 無差別— その項  
 迷の— 231, 409  
 眞正の— 代表的— 332註  
 生産經濟増大と— 332註

限界 marginal  
 —條件 22  
 —充用 26  
 —充用分 471  
 —羊飼 28

件名索引 E | G

七



一労働者 30註, 403-9註  
 一労働者(ウェップ) 408-9註  
 一生産力(ホブソン) 32註  
 労働の一生産力 61  
 一生産物 32  
 一生産物と賃銀 33, 34  
 一純生産物 332註  
 一用途-その項  
 一能率 40, 47, 86, 456  
 一必要 69, 70  
 一投下 180  
 一供給価格 297  
 一努力 337  
 一購入分 464  
 一率 464  
 報償の一率 465, 468  
 限界費用 marginal cost  
 生産部門の一 464  
 限界利用 marginal utility 330  
 一の測定 37  
 資本の一遞減 359  
 参考-利用  
 限界用途 marginal use 40, 71, 72, 330, 330註  
 原料  
 一供給源泉 184  
 原始  
 一社会の利子 163  
 一社会の利子(クリフ・レスラー) 164註  
 一制度に於ける經營收入 204  
 技術  
 工業-上の發明 345-C  
 八 技術工 artisan  
 一賃銀(テュールゴ) 6-7註  
 一賃銀の變化 363-5, 370  
 一收入中の準地代と努力收入 238-9  
 一收入の非凡天賦能力地代 240

營業失費 100  
 生活發足點 122-4  
 現代一の住居 350  
 一作業 361  
 中世の一 363  
 近代熟練一 363  
 平等分配と一 425-6  
 参考-熟練労働  
 合同  
 一と經濟問題 444  
 漆洲  
 銅山發見 242  
 八時間労働史 399-40註

H

派生需要 derived demand 149, 318  
 労働の一 393  
 發明 382  
 高價機械 300  
 一と國民分配分 424  
 一と中産階級 437  
 平均 average  
 眞正一 104  
 農作の一 311  
 平均  
 一價格 143  
 一個人の價格 125-6註  
 平衡 balance  
 收穫遞増・遞減傾向の一 337, 34註  
 参考-均衡  
 變化  
 能率の必要要件 378  
 經濟一の趨勢 423  
 變化性 changefulness  
 職業選擇と一 138  
 米國世感の一 237註

産業の一と流動性 402  
 變則的 abnormal  
 一報償 144  
 罷業 405  
 倫敦船渠労働者(1889年) 132  
 一成功の蓋然 396  
 一と賃銀基金説 447  
 一と賃銀 453  
 非貨物 discommodity 50, 358  
 貧民  
 一階級所得の増加と總體幸福 433-4  
 一階級兒童の救済 435-6  
 必要 need  
 全部一 69  
 限界一 69, 70  
 必需品 necessities 97-8, 355, 376, 377  
 不一 57  
 英蘭の不一 59  
 實質一 60註  
 慣例的一 4, 56, 57, 60註, 150  
 日本の慣例的一 59  
 能率一 56, 57, 377, 384  
 自然的(ベティ) 266註  
 フィジオクラット 6  
 最低生存一 9  
 最低生活一 433  
 スミス 9  
 昔の英佛經濟學者 57-8  
 雇主の生活一と賃銀(ミル) 452  
 後進國の一 58  
 英吉利労働者の一 342  
 費用 cost  
 實質一 57, 380, 464  
 總體實質一 464  
 貨幣一 320, 321  
 限界一(その項)  
 全部一 379

人間努力の全部一 467  
 眞正全部一 297-8  
 全部輸入一 343  
 時運一 245  
 機會一 245  
 無一の作業 50  
 作業の一 50-2  
 一の分子としての危険 218-20  
 参考-生産費・生産失費・直接費・間接費  
 保護關稅  
 一と賃銀基金理論(ミル) 455-6  
 方法 method  
 比較研究一 15  
 奉仕 service  
 純一 118  
 直接一 125註  
 未來一の評定純價值 118  
 移民の未來一の蓋然値 125註  
 保險數學的 actuarial  
 成功の一數値 105  
 危険の一數値 219  
 報償 reward  
 一と供給増加 49-65 (第六編第二章二-四)  
 限界一率 464, 465, 468  
 参考-收入  
 法則 law  
 生産一 339  
 生産(ミル) 451  
 分配(ミル) 450-1  
 交換一 451  
 收穫遞増・遞減・不變(その項)  
 標準化 standardization  
 眞の一の社会的福祉 410-11  
 不當の一 411-5, 417  
 参考-労働組合

I

位置 356  
 一と地味 260-1註  
 一の不平等と生産者餘剰 260  
 一時的 temporary  
 一變動 223  
 一的結果(結果を見よ)  
 衣服  
 I 一の労働價値の變化 351  
 移民  
 J 一人の價値 124-6註, 479  
 印度  
 平均利潤率 236註  
 土地耕作制 277-8註, 279-82, 283, 309-10註  
 農業能力の地方的標準 313註  
 一般 general  
 一の企業知識(バチョット) 207註  
 一の才幹 206-7註  
 一般購買力 general purchasing power  
 一による測定 257  
 伊太利  
 農業上の産業組合 308

J

地代 rent  
 一土地(その項)  
 一〇 生産者(その項)  
 本來の一 241  
 眞正一 252  
 自然的・眞正一(ベティ-) 266註  
 純一 294

實質純一 274-5  
 貨幣一 274-5, 279  
 經濟一 280註  
 非凡天賦能力一 240-3  
 英吉利一 311  
 穀物一 477, 478  
 通常穀物一(ベティ-) 266註  
 無一 333  
 一と慣習 276-82  
 改良と一 260-4(第六編第十章四)  
 地味(舊國)と位置(新國) 260-1註  
 農業地一 355註  
 リカド時代の農業一 471  
 一と一時結果(リカド) 470  
 地代理論  
 地代法則と分配理論 47  
 リカド一 261-3  
 リカド一と耕作形式 275  
 一と土地耕作制 264-8 (第六編第九章五)  
 地代法則(ベティ-) 265-6註  
 兒童  
 一教育の主眼 435-8  
 労働者區域一の遊戯場所 435  
 一の遊戯のための餘暇 440  
 参考-少年  
 實效 efficient  
 一性 32  
 一生産高 35  
 一供給 49  
 労働の一需要 58  
 人口  
 マルサス 11  
 幾何級數増加 377  
 一減少と賃銀増加 378-82  
 地主 landlord  
 一分と耕作者分 265  
 古代土地耕作制に於ける一 270

農場の一 312  
 一の生産物取得分 271-2  
 自作小農 system of peasant proprietorship 200, 288, 288-92 (第六編第十章五), 298註  
 英蘭の一 307-8  
 時運 conjuncture  
 一價値 245  
 一費用 245  
 一と所得 151, 241-2  
 一と純生産物 330-1  
 一と消費者餘剰 465, 466  
 参考-機會  
 自由  
 能率の必要要件 378  
 英國と自由 268  
 自由貿易  
 爲物一の採用 354  
 参考-外國貿易  
 自由競争(競争を見よ)  
 自由職業 profession  
 一の營業失費 100  
 一階級 101註  
 一階級の取引力 133  
 一者收入中の純地代と努力收入 238-9  
 一者の非凡天賦能力地代 240, 241  
 一所得 368, 370  
 子への資本投下 119-20  
 蒸氣  
 文明生活要件 352  
 一力と農業 301註  
 女子  
 一労働の生産費 124  
 一移民の價値 125註  
 一賃銀 366-7  
 母の保育 123 124  
 熟練

専門的- 206, 244  
 一の特種收入 249  
 一及び能力の特種收入の變動 144-7 (第六編第五章五), 147-9  
 熟練労働 skilled labour  
 一者所得と機械所得との比較 (スキス) 136-8  
 一の地位低下 360-1  
 一と職業の不潔 113  
 舊一賃銀の低落 361-3  
 一賃銀の變化 363-5  
 一者兒童の教育 436-7  
 住居  
 一の労働價値の變化 349-51  
 参考-家賃  
 準地代 quasi-rent 63, 148註, 181, 242註  
 合成一 246  
 通常收入中の一 238-9  
 企業家利潤中の一 239  
 企業所得の一 246, 248  
 専門熟練の一 248  
 土地永久改良所得の一 255  
 一と利潤との別 268註  
 一と生産者餘剰の別 467-8  
 循環論  
 マルクスとロードベルトゥス 170  
 純利益 net advantages 89, 110  
 一と個人的性格 110-2  
 一と人種的差異 112  
 一と産業等級間の差異 112-3  
 純生産物 net product 26, 27, 28, 30 註, 31註, 32, 33, 33註, 34, 39, 73註, 387, 395註, 462  
 限界一 332註  
 眞正一 410註  
 一機械の一 35  
 總體一 84, 353

件名索引 J

一

一支配参加者 330-1  
 一と正常賃銀 331-2  
 労働一と賃銀 72-3, 74, 76  
 正常能率労働者の一評定 331  
 労働賃銀と一との接近 407-10  
 充足  
 現在-未来- 463  
 参考-欲望・満足  
 住宅調査委員会  
 一八八五年の一 350註  
 需要 demand  
 直接- その項  
 間接- その項  
 派生- その項  
 結合- その項  
 實效- 19  
 労働の實效- 58  
 労働収入に及ぼす影響 17-24 (第六編第一章三-六)  
 資本一般の一 34-9(第六編第一章八)  
 資本一般の一と利率 36-9  
 一と分配 46-9(第六編第二章一)  
 リカードの一無視 46-7  
 貨物一と労働 (ミル) 459-60  
 参考-需要供給・供給・均衡・需要價格  
 充用分 dose  
 資本・労働 -- 328, 337, 474, 475, 477  
 資本- 473, 474, 476  
 限界- 471  
 労働の逐次- 254-5  
 需要價格 demand price  
 労働の一 60, 62  
 労働-供給價格の均等 61  
 貯蓄の一 64  
 一切用途一の均等 71  
 職工長の一 192  
 需要供給

件名索引  
 J  
 |  
 K

一  
 二

一一般理論 252  
 一法則 477  
 一一般條件 32, 40, 61, 462  
 一の一般關係 72  
 一均衡 48  
 一均衡一般理論 317  
 價格を支配するは何れか 53-7  
 資本の一 157  
 資本需要と資本供給との均等 64  
 労働需要と労働供給の一致 57  
 労働の一が賃銀に及ぼす影響は對當 61  
 需要供給の適合  
 一の正常適合 320  
 需要供給の計慮的適合 136  
 労働需要供給の適合 138, 150

K

株式會社 341  
 一經營 223  
 一の經營收入 202-3 (第六編第七章六)  
 農業上の一 302註  
 英吉利風一 369註  
 株式取引所  
 投機的團結 341  
 價值 value  
 正常- その項  
 現行- 20  
 名目- 48  
 實質- 259, 471, 472, 474  
 生産物の労働- 259  
 文明生活要件の労働一の變化 374-52  
 貨幣- 298註  
 相對- 182, 256, 347  
 稀少性- 292, 356, 390

時運- 245  
 機會- 245  
 純- 356  
 土地の真正純- 279  
 資本還元- 151  
 自然- 8  
 實質貸借- 274  
 土地の現在- 264  
 獨占- 345  
 都會地の特殊- 435註  
 敷地- (その項)  
 一の分配面と交換面 3  
 フィジオクラット 8  
 一と生産費 4  
 一と需要(ボエーム・バーゼルク) 53  
 註  
 價值理論  
 フィジオクラット 8  
 マルクス 168-170  
 ロードベルトゥス 168-170  
 タムソン 168  
 ボエーム・バーゼルク 53註  
 貨幣購買力 purchasing power of money  
 一の變動と實質賃銀 98-9, 362註  
 一と實質利率 181-5 (第六編第七章七)  
 一の變動と労働組合標準賃銀 415-22 (第六編第十三章一〇)  
 貨幣生産費 money cost of production  
 移民の一 125註  
 参考-生産失費  
 貨幣市場 178  
 貨幣測定 money measure 193, 339  
 参考-測定  
 階級  
 自由職業- 101註

賃銀收得- 101註  
 一利己心 403  
 殘滓- (その項)  
 富者- 448  
 快樂 pleasure  
 一の餘剩 50  
 改良  
 農業- 果實收得の自由 313-6  
 リカードの農業改良說 第六編第十二  
 附錄  
 一と都會地 478  
 一と中産階級 437  
 農業一の二種(リカード) 473  
 快適品 comforts 22, 336, 339, 340註  
 342, 355, 378, 437  
 慣例的- 56  
 生活- 334  
 参考-便宜品・必需品・奢侈品  
 快適程度 standard of comfort 4, 375  
 376, 378  
 リカード 12, 13註  
 ミル 15  
 一の上進と賃銀増加 37-8, 380, 381  
 参考-生活程度・活動程度・欲望程度・  
 能率標準  
 改造  
 突發的・暴力的一案 425  
 社會一唱導者の生活繪畫 442-3  
 價格 price  
 正常- 266  
 農業上の正常- 311  
 正常一と利潤 267  
 眞正- 89  
 名目- 89  
 純- 260註  
 限界- の均等 71  
 資本の一 178  
 駢引 higgling and bargaining 250

件名索引  
 |  
 K

一  
 三

劃一作業 routine 215, 219, 304  
 格付け grading 341  
 家内工業 domestic industry 119, 122  
 敢爲 enterprise 120  
 一力の假定 76-8 (第六編第二章八)  
 子の養成の上の— 120  
 英蘭の— 59  
 参考-企業心  
 環境 environment  
 産業— 311, 355, 366  
 産業—と所得 341  
 経済— 332註  
 一と純生産物 331-2  
 一と企業家生存競争 119, 187-8  
 一と消費者餘剰 465, 466  
 一と生産者餘剰 465  
 参考-機會・時運  
 間接需要 indirect demand 318  
 参考-派生需要  
 慣習 custom 60, 246, 302註  
 一の直接結果と間接結果 115-6  
 一といふ言葉の内容 116註  
 一と利潤 228-30註  
 一と地代 276-82  
 一と土地所有 271-2  
 一の伸縮性 272-82 (第六編第十章二三)  
 一と英吉利耕作者改良の賠償 314-5  
 一的制限 343  
 ミル 450  
 監督  
 細目— 194, 196  
 大企業主の行ふ— 197, 301-2  
 一四 家庭  
 技術工の— 123  
 技術工の母の保育 123  
 活動 activity  
 一程度 375

一と欲望 374  
 一萎縮 493  
 家族  
 一所得 402  
 一收入 109  
 地理的移住の單位 430註  
 經營 management  
 一労働 31註  
 一作業 35, 194  
 株式會社の一任務 202-3 (第六編第七章六)  
 参考-企業  
 經營收入 earnings of management  
 189, 232, 285, 302  
 正常— 195  
 純— 186  
 總— 43, 44, 186, 235  
 真正總— 236  
 真正— 確知の困難 207-9  
 平均— 189  
 一と代用原理 191-8 (第六編第七章二-四)  
 總利子中の— 172, 173-4, 176  
 一と作業難易の適合 203-10 (第六編第七章七)  
 經驗  
 一による實證の困難 402  
 契約 246, 247註, 249  
 經濟 economies 197  
 一般— 33註  
 生産— 45, 188, 303, 337  
 生産—増大と限界 332註  
 農工業上の生産—の差 300-3  
 精力— 195註  
 熟練— 305  
 大規模生産の— (その項)  
 運輸— 343  
 經濟學 Economics, political economy

一上の機械的分子と人間的分子 (ミル) 14, 450, 451  
 經濟發展階段 265  
 ベティ— 265註  
 經濟自由及び企業 92, 93, 95  
 一と農業 266  
 一主義と殘滓階級 427-8  
 經濟騎士道 economic chivalry  
 一の社會的可能性 426註, 438, 442  
 經濟史  
 中世—と利潤 229-30註  
 經濟進歩 第六編第十二章  
 一と労働需要 142  
 一と生活程度 第六編第十三章  
 一と賃銀引上 427-31 (第六編第十二章一-二)  
 一の機械的部面 434  
 經濟組織 economic organization  
 一と雇用分野 333  
 一の汚點 426  
 結果  
 直接— 55, 340, 342, 390, 396, 452, 454  
 リカードと直接— 470  
 一時的— 470  
 累積的 cumulative— 114-7 (第六編第四章二), 121, 319  
 終極— 55, 230, 453, 473  
 最終— 470  
 最初最明白の— 114  
 長期正常— 230  
 真正正常— 230  
 永續— 390, 470  
 持久的— 396  
 可能— 478  
 一の指示 30-1註, 35  
 慣習の直接—と累積的間接— 115-6  
 労働需要供給作用の直接—と累積的

間接— 116-7, 342  
 労働者に及ぼす累積的— 129-30  
 労働者の取引上の不利益から来る累積的— 134-5  
 原因と—との關係 400  
 参考-原因  
 結局に於て  
 参考-正常  
 建築物  
 高一前後の空地の強制 436  
 結合需要 joint demand 244  
 結合生産物 joint product  
 農業の— 297  
 資本労働—充用分の— 328, 330  
 希望  
 能率の必要要件 378  
 期望 prospect 105, 231  
 期望性 prospectiveness  
 資本の— 157註  
 企業 business  
 一の主要機能 321  
 一の非凡天賦能力地代 240-3  
 一と借入資本 198-20 (第六編第七章五)  
 大小—の經營作業 191  
 大一主と小一主との收入適合 196-8 (第六編第七章四)  
 大小—の利潤の分析 212-3  
 企業力 business power 186  
 一の利潤 第六編第七・八章  
 企業者  
 資本主義的— 137, 145, 461  
 獨立— 336  
 開拓的— 188, 190, 302註  
 追隨的— 188  
 分配論上に於ける—の役目 84-5  
 一作業の安價性 324-5, 326  
 企業心

正常— 266  
 正常—の地方標準 311-3  
 農業上の一 266  
 英吉利民族の一 268, 291, 293  
**機械**  
 自動— 432  
 一製轉換部分 340  
 特殊—製作用— 341  
 高度特化— 303  
 高價— 95, 387, 392, 462註  
 高價—の所得と熟練労働者所得との比較(スミス) 137-8  
 一の収入 35  
 一の純生産物 35  
 一の限界利用の測定 37  
 一と作業緊張 362註  
 一の作業苦 440  
 一と不熟練労働 432-4  
 一の發明 340  
 一の進歩 433, 434,  
**機會**  
 一價值 245  
 一費用 245  
 一と所得 241-2  
 公共— 357  
 参考—環境・時運  
**危険**  
 營業— 175, 236  
 人的— 175-6, 198-9  
 一負擔の任務 194  
**危険保険料**  
 經營收入中の一 28  
 成功の不確實と— 104  
 總利子中の一 172, 175-6, 178, 219  
 利潤及び費用の一分子としての— 218-20  
**貴金屬** 184  
**金**

件名索引 | K

一の供給 359  
**均衡**  
 一状態 35, 474  
 一點 48  
 正常一點 149  
 需要供給の一 48  
 賃銀の一水準 75  
 利子の一水準 64  
**筋肉労働** 194, 360  
 一の収入 76  
 一の特性 132  
 一者の取引力 134-5  
 熟練— 436  
**稀少性 scarcity**  
 労働—と賃銀引上 389, 390, 394  
**稀少性價值 scarcity value** 292, 356, 360  
**貴族政治**  
 一國の官吏俸給 105-6  
**公安裁判官 Justice of the Peace** 406  
**購買手段 means of purchase**  
 一と信用 421  
**幸福**  
 一般— 168  
 生活—の發生點 433  
**工業**  
 微變形— 221註  
 一と農業との差 300-3  
 農業上の一的生産方法 300-1  
 米國各種工業の利潤率 221註  
 十九世紀前半の代表的産業 373  
**工場**  
 一制農場 302-3註  
 一管理 303註  
 一専屬人員 414  
**工場閉鎖 lock-out** 450  
**工場制度 factory system**  
 一の誤用と英吉利民 430

**交換理論**  
 一と分配理論 451-2  
 一と分配理論(ミル) 451  
 交換法則(ミル) 451  
**國民分配分 national dividend** 18, 19, 20, 22, 25, 44, 45, 69-70, 83, 86, 329, 353, 360, 375, 376, 381, 386, 389, 392, 396, 410, 462, 464, 468, 469  
 總體— 23  
 實質— 342, 345  
 一取得分 84, 86, 375, 377, 462註  
 一分配支配原因(ミル) 452  
 要因需要の唯一源泉 327-9  
 一と賃銀 453  
 一の阻害と賃銀 392-5  
 一の減少と資本家 391-5  
**労働組合と—** 410, 412, 413  
 不當標準化と— 417  
 一と發明 424  
 一分配の不平等 425-7  
 一と保護關稅 456  
 一と消費者 458  
**参考—國民所得・分配**  
**國民所得 national income** 4, 5, 6, 18  
 定義 43-5 (第六編第一章一〇)  
 真正純年— 44  
 一の平等分配と技術工 425-6  
 一に加へざるもの 458註  
 一と餘利 第六編第十一附錄  
**参考—國民分配分・分配**  
**穀物**  
 一といふ言葉の意味 14註  
 一の労働價値の變化 347-8  
 一税と地代 471-3  
 一餘利(餘利を見よ)  
 一地代(地代を見よ)  
**穀物條例 Corn Law** 355註

**英國民の活力毀損** 31  
**公共**  
 一富 357  
 一機會 357  
**耕作**  
 粗放— 256  
 收約— 256, 292, 343  
**耕作限界 margin of cultivation** 9, 255, 260註, 261註, 344, 473-4  
**公正**  
 一の觀念 246  
**交替制**  
 二— 386-9, 392, 395註  
**固定資本 fixed capital**  
 一製作業 419, 420, 421  
**古典學派 classical school**  
 穀物といふ意味 14註  
**分配理論** 9-15  
**賃銀理論** 9-15  
**消費と生産** 121註  
**コティアー制 cottier system** 309  
**コート・ロール court rolls**  
**メイトランド** 273  
**交通便宜**  
 一と地代 260-1註, 261  
 一と雇用分野 333-4  
**雇用分野 field of employment**  
 資本の一 9  
**資本労働の一競争** 78-81 (第六編第二章九)  
 一奪取戰 197  
**各要因の相互—提供** 327-8  
**資本増加と労働—** 328-9  
**新國の資本労働—の豊饒性** 333-40 (第六編第十二章一)  
**雇用競争**  
 各要因の一 327  
**雇傭の中斷性(不規則性)** 392

件名索引 | K

一と實質賃銀 106-8  
 フォクスウェル 108註  
 繼續的— 248  
 經濟進歩と— 371-3  
 雇傭の永續性 392  
 公有  
 一主義 collectivism の危険 423-5  
 一 collective 富 424  
 生産手段の— 424-5  
 苦汗制雇主 sweater 270  
 組合 275  
 一協同 249  
 一團體 302註  
 参考-産業組合  
 教育  
 労働者の學校— 120-1  
 國民的義務にして國民的經濟 431  
 一の主眼 435  
 少年の— 440  
 曲線 curve  
 生産物— 288註, 475, 477  
 總生産物— 477  
 生産物直線(ミル, リカード) 477  
 耕作者取得分— 286註  
 供給 supply  
 實效— 49, 394  
 一と分配 46-9 (第六編第二章一)  
 リカードの—高調 47  
 労働—と報酬 49-62 (六編第二章二・三)  
 一時代の労働—は前時代の收入に從ふ, 139, 140  
 労働—阻害と資本— 391-5  
 企業能力の— 205-7  
 供給價格 supply price  
 正常— 205  
 正常—構成分子としての利潤 230-3 (第六編第八章五), 243註, 267, 268

註  
 眞正即ち長期— 152, 231  
 短期— 149  
 限界— 299  
 一と準地代 268註  
 労働の— 60-1  
 一と租税 254  
 共產主義  
 原始社會共同體(クリフ・レスリー) 164註  
 参考-村落共產體  
 競争 92, 93, 120, 247註, 248  
 一と利潤 37  
 資本—般の雇用— 42  
 一自由の假定 76-8 (第六編第二章八)  
 企業家の— 29, 230-1  
 一仲介の作用力 193  
 一の可能 214  
 農業上工業上の—作用様式の差 298-9  
 農業上の— 266, 310-1  
 労働の垂直的雇用— 321-2  
 労働の水平的雇用— 321-2  
 自由—と賃銀 407-10  
 自由—と賃銀(ウエブ) 408-9註  
 参考-經濟自由・自由・企業心・雇用分野  
 救貧法 Poor Law  
 一委員會 99註  
 英國國民の活力毀損 430  
 休養 383, 385  
 實質賃銀との關係 107  
 服務時間と— 53  
 一尊重の増加 358  
 参考-餘暇・教育

M

マノア manor  
 一の製粉所 348  
 満足  
 將來—と現在— 158, 159,  
 一の延期 169  
 参考-充足・欲望・延期・待望  
 摩擦  
 耕作制上の— 268  
 株式會社内部の— 341  
 滅失性 perishableness  
 労働の— 131  
 貨物の— 132  
 物的生産要因の— 131  
 民主  
 一國の官吏俸給 106  
 一主義と資力集積 424  
 目的  
 一と手段の轉倒 290, 316  
 人間活動は手段にして— 467  
 無差別 indifference 94, 95  
 一限界 41, 69  
 冥加料 fines 177註, 278

N

南米  
 乞食 348  
 燃料  
 一の労働價値の變化 351  
 日本  
 慣價的必要品 59  
 人間  
 一人の平均價値 125-6註

一本性の改善 440  
 一本性の改造 441-3  
 一本性の可變性(ミルとコント) 450  
 經濟學上の—的分子(ミル) 14, 450, 451  
 農地條例 Agricultural Holdings Act  
 一八八三年・一九〇〇年・一九〇六年 315-6註  
 農業  
 一膨脹(一八七四年) 274-5  
 一改良 296-7, 297  
 一改良(リカード) 第六編第二章二附錄  
 一と工業の差 300-3  
 一上の工業的生產方法 300-1  
 農法 265  
 一賃銀 347  
 一労働者 364  
 参考-産業組合・土地耕作制  
 農業家  
 米國のファーマー 291-2  
 農業労働者 cottager  
 一の燃料 351  
 農場 farm  
 極小— 301註  
 小—の利 303-9  
 中— 301註  
 大— 301-2  
 巨大— 302註, 304  
 工場制 factory— 302-3註  
 能率 efficiency  
 正常— 28, 29, 30註  
 平均— 330  
 平均労働— 339  
 例外的— 28  
 限界— 40, 47, 86  
 全部— 86  
 一般産業— 89

標準— 41  
 —標準 90, 397, 419  
 正常—標準 416  
 労働限界— 456, 462  
 資本限界— 456  
 —収入均等の傾向 93-6  
 労働者— 89-90, 91-6  
 生活—一般との関係 4  
 —の三必要要件 378  
 各種労働者間の収入及び—の相互関係 70-6 (第六編第二章七)  
 賃銀増加と—増進 381-2  
 産業—と労働時間 383  
 能力 ability  
 正常— 189, 231, 257, 266, 288  
 平均— 189, 367  
 中等— 367  
 非凡— 190, 313註  
 天賦— 361  
 平均天賦— 365  
 非凡天賦—の収入 150-4 (第六編第五章七)  
 非凡天賦—の地代 210-2  
 例外的—の収入 367-70 (第六編第二章一)  
 習得—の所得 87  
 習得—収入の減少 360-1  
 専門—の供給増加は時を要す 136-8 (第六編第五章一)  
 一般—の需要 141-2 (第六編第五章三)  
 —及び熟練の特殊収入 144-7 (第六編第五章五)  
 企業—の供給 205-7  
 地方的—標準 311-3  
 望ましき desirability 46

0

黄金時代  
 社会主義者の豫想 425  
 過去の— 443  
 恩情主義  
 獨逸の— 428  
 和蘭  
 産業企業心と農産 293-4  
 卸賣商  
 その取引力 134  
 オーストラレーシア  
 最低賃銀 429-30

P

波斯  
 生産者餘剰 286註

R

ライヤト rayats 289-80註  
 例外  
 —的能率 28, 29  
 —的狀態 45  
 —的能力(能力を見よ)  
 連續性 continuity  
 資本理論發達の— 160  
 地代と通常所得との— 252  
 賃銀と利子 318-9  
 作業の— 323  
 利益分配 gain sharing  
 近代的— 410註  
 参考—利潤分配  
 利潤 profits 第六編第七・八章

正常— 231, 239, 266, 331  
 普通— 37  
 通常—(スミス) 137  
 名目— 213註  
 —構成分子の分析 87, 160  
 平均— 235  
 獨占— 223  
 大小企業の—の分析 212-3  
 —とその以外の収入との相違 233-43 (第六編第八章六-八)  
 純地代との差 263註  
 現行利回と現行賃銀との變動上の差 325  
 株式會社の— 202-3 (第六編第七章六)  
 正常供給價格構成分子としての— 230-3 (第六編第八章五), 267  
 一切半法 276註  
 平均能力の— 367  
 負量の— 453  
 フィジオクラット 7  
 アダム・スミス 9  
 米國學者の—觀 218-9  
 —選増 222  
 利潤分配 profit-sharing 247註, 285  
 事實上の— 249  
 利潤率 rate of profit 第六編第八章, 330  
 自然— 7  
 年— 213-24  
 正當年— 213, 223, 228  
 正當年—の名目的不均等 213-4  
 資本運轉— 213  
 平均資本運轉— 224  
 慣例的或は公正資本運轉— 224-30 (第六編第八章三・四)  
 正常資本運轉— 227  
 資本運轉—の大不均等 224-7 (第六

編第八章三)

通常業の資本運轉— 349  
 —均等の一般傾向 211-6 (第六編第八章一)  
 複— 225註  
 大小企業の真正— 2:6  
 —と固定資本量・流通資本量 217-8  
 —と賃銀支拂高 218, 220-1  
 —の—分子としての危険 218-20  
 米國各種企業の— 221-2註  
 大規模生産の經濟と— 222-4  
 —と慣習 229-30註  
 印度の平均— 2:6註  
 利己心  
 階級— 403  
 倫理  
 —の影響 250  
 —的見地 312  
 —上經濟學上の論争問題 468  
 利率 rate of interest  
 名目— 171, 179, 182  
 實質— 171, 182  
 實質—と貨幣購買力 181-5 (第六編第六章七)  
 一般— 63  
 —の均衡水準 64  
 近代英蘭の— 172  
 —と舊投資 179-81 (第六編第六章六)  
 —と資本需要 36-9  
 —と資本供給 63-5 (第六編第二章四)  
 —と貯蓄 64  
 —の變化 359  
 —の一般的低落 397  
 利子 interest 第六編第六章, 87  
 正常— 51  
 總—と純— 170-9 (第六編第六章四・五)  
 純— 160, 171, 172

真正純— 36註  
 真正—の貨物測定 162-3  
 純—均等の傾向あり 177-9, 180  
 總— 171, 172, 173-4, 174註, 175-6  
 總—均等の傾向なし 176-7  
 供給價格の一分子としての— 44  
 —と準地代 63  
 古代社會の— 162-4  
 近代世界の— 167  
 新國の資本— 334  
 賃銀との異同 318-20

利子理論  
 —上の經濟學の任務 159-60  
 —の進歩 155-70 (第六編第六章—三)

テューネン 41, 41-2註  
 ジェダンス 41註  
 古代の利子非難 162-4  
 聖クリソストム 164註  
 ベンタム 164註  
 クリフ・レスリー 164註  
 アリストートル 164-5  
 中世の思想混亂 165-6  
 スコラ學派 165-6  
 中世教會 166註

利用 utility 52註, 231  
 —と分配 46  
 非— dis-utility 232  
 參考—限界利用・非貨物

利用遞減 diminishing utility  
 資本の限界— 359

ロビンソン・クルーソー  
 —と生産者・消費者餘剩 466-7

二 三 勞働  
 通常— 363  
 經營— 31註  
 —の滅失性 130-5 (第六編第四章 )  
 —の生産性(リカード) 96

—の實質價格 114, 290  
 —の名目價格 114  
 奴隸—(スミス) 118註  
 高給—は安價 127  
 —と勞働者の不可分 128-70 (第六編第四章五)  
 この不可分の累積的結果 128-30  
 —賣却者の取引力 132-5  
 —の逐次充用分 254-5  
 生産的—(ウェップ) 409註  
 —の賣手買手の奉仕は對當 456-7

勞働費用 labour-cost  
 必要品の— 342  
 建築材料の— 349

勞働移動性 mobility of labour  
 —と賃銀均等 74  
 クリフ・レスリー 91  
 勞働者移動性に同じ 130  
 成年— 141-2 (第六編第五章三)  
 ウェップ 408註

勞働委員  
 休暇と報酬 108註  
 —會最終報告 402註

勞働時間  
 八時間勞働 51-3註  
 —短縮 382-400 (第六編第十三章三—六)  
 —短縮と二交替制 386-9  
 長き—の嫌厭 358  
 —と苦痛 51, 51註  
 —と力作量 52註  
 最低等級勞働者の— 365-6  
 大英國産業史上の— 386註  
 —の國際的研究 386註  
 兩親の—と次代の利害 441

勞働價值 labour-value  
 文明生活要件の—の變化 347-52 (第六編第十二章五)

建築材料の— 349-50  
 生産要因の—變化 353-9 (第六編第十二章六—八)  
 土地生産物の— 473  
 餘剩の— 474

勞働階級  
 —の食足らず 120-1  
 —の未開發才幹 120-1  
 —の潜在能力の開發 141  
 同企業(生産業)内各種—の利害關係 243-5 (第六編第八章九—一〇)  
 中世の—の住居 350

勞働階級住宅委員 (一八八四年) 111

勞働組合 trade union  
 —主義 404  
 元來の目的 403-4  
 —の禁止 403  
 —の奉仕性 406, 408註  
 共同規約 common rule 96, 401, 406  
 共同規約の強行 408  
 共同規約の誤用 410註, 411-5  
 老年勞働者に対する標準賃銀強行 413-4  
 作業限定 414-5  
 機械・方法改善反對 412-3  
 —指導者 402註, 408註, 412  
 賃銀調節協議會 404  
 機械工聯合協會 412, 415註  
 —と出來高作業 383-4註, 406, 410註  
 —標準賃銀 90-1註, 406  
 —標準賃銀と貨幣購買力の變動 451-22 (第六編第十三章一〇)  
 —の生活程度及び賃銀引上げ 250, 333, 401-15 (第六編第十三章七—一〇)

勞働協約 collective bargaining 383註

勞働の需要供給  
 勞働需要 5

勞働の直接需要 393  
 勞働の派生需要 393  
 勞働の需要價格 60, 62  
 勞働の實效供給 394  
 勞働の供給價格 60  
 勞働流入 139  
 勞働の養育訓練には時を要す 136-8 (第六編第五章一)  
 男子女子勞働の生産費 121-6註  
 勞働養育養成費の特質 117-28 (第六編第四章二—四)  
 —時代の勞働供給は前時代の收入に從ふ 139, 140  
 勞働稀少性と賃銀増加 389, 390  
 勞働需要供給の適合 141-2 (第六編第五章三)  
 —の計慮的適合 136  
 —の正常關係の場合の『長期』 143-4

勞働の雇用分野  
 雇用分野を見よ

勞働細分 subdivision of labour  
 —と勞働供給増加 454

勞働者  
 限界— 30註  
 限界—(ウェップ) 408-9註  
 —に價格なし 117  
 —は作業を賣るのみ 117  
 —と勞働の不可分 128-30 (第六編第四章五)  
 —の内への資本投下 118-24  
 —能力開發のための資本投下 126-8  
 雇主の—養成の報酬 127-8  
 —養育養成費負擔の特性 117-8 (第六編第四章二—四)  
 數回勤務 94-5註  
 最低等級—の勞働時間 385-6  
 —一團の數及び能率の増大と賃銀 3 9-31



一の社會的義務 403  
 労働者分讓地 allotment  
 一の社會的必要 306  
 労働收入 earnings of labour 第六編  
 第三-五章  
 實質— 334  
 平均— 144  
 賃銀は能率に比例す 88-96 (第六編  
 第三章二)  
 通常職工長と通常労働者との收入比  
 較(代用原理) 191-3 (第六編第七  
 章二)  
 労働争議  
 一調停裁判所 250, 251  
 協議會 404-5  
 一方法の進歩 405  
 一の義務 405  
 一八九七年機械工業大争議 412  
 一と賃銀理論 453  
 参考-罷業・工場閉鎖  
 労働と資本  
 労働對資本の關係 25  
 労働一般と資本一般との關係 78-86  
 (第六編第二章九・一C)  
 之についてのミルの説 83  
 労働資本の協同 83-4  
 資本一般の労働一般代用 328  
 資本増加の労働雇用分野増大 328-9  
 労働供給阻害と資本供給 324-5  
 労働の資本依頼 447-50  
 倫敦  
 一の空氣 350  
 累積 cumulative  
 經濟諸力の一的影響 423  
 生産者餘剰の一性 466  
 一的結果(結果を見よ)

差別利益  
 英吉利農場の— 354  
 資本充用分の— 476  
 作業  
 筋肉— 304  
 頭腦— 304  
 寄生的— 430註  
 責任— 437  
 建設的— 438  
 時間— 406  
 出來高— 385-4註, 406, 410註  
 出來高一の能率(シュモラー) 384註  
 平均— 389  
 最低級— 112-3  
 一の愉快 50  
 一の愉快と社會主義者 50  
 一の費用 50-3  
 一の非貨物 50  
 一の強度 53註  
 一と服務 51註, 53  
 一心と報酬 49-62 (第六編第二章二・  
 三)  
 一心の變化 357-9  
 一數と一量 52註  
 労働者との不可分 126-30 (第六編第  
 四章五)  
 一の性格構成力 126  
 一の附帶的不便利 148  
 一基本 work-fund 392  
 一標準化 401  
 一程度と労働組合 401, 411-22 (第六  
 編第十三章七—一〇)  
 労働組合の—限定 414-5  
 一中断 307註  
 一者餘剰(餘剰を見よ)  
 一報價の限界率 465  
 参考-労働  
 才幹

専門的— 205  
 一般的— 206-7.  
 再生産費 cost of reproduction 199  
 最低賃銀 minimum wage  
 一論の主張と弱點 429-31  
 産業  
 一等級 23, 24, 194  
 一下層と上層との消費 98-9  
 一上級と下級との労働養育養成 失費  
 負擔力 119-23  
 一最上級の取引力 131  
 一將校 206註  
 近代—制度と賃銀 145-7  
 現代—制度と投機 167  
 一適合と遺傳的性格 441-2  
 産業組合  
 農業上の— 308-9  
 産業史  
 大英國— 386註  
 産業組織 industrial organization  
 現存—は最善なるか 190  
 政治算術 political arithmetic 357  
 正常 normal  
 一的 469  
 一といふ言葉の科學的解釋 313註  
 一適合 331  
 一水準(その項)  
 一條件 32, 50, 150, 457  
 一均衡點 149  
 一價值(その項)  
 一價格 18, 266, 311  
 一分配交換 251  
 一收入 20, 189  
 一賃銀 32  
 一利子 51  
 一所得 51  
 一經營收入 195  
 一取得分 20

一能率 28, 2, 3)註  
 一能力 189, 257, 331  
 一收買 266, 311  
 一好運 331  
 一繁榮 331  
 一資力 331  
 一時 188  
 正常價值 normal value 20, 233, 241  
 一上の長期短期の別 142-3  
 正常水準 normal level  
 收入の— 139, 251  
 價格の— 144  
 企業能力の— 194  
 性格  
 作業の—構成力 126  
 雇主の— 127  
 生活  
 人間一の氣品 56  
 一様式と收入率 374, 375  
 一高雅品 decencies 376  
 生活發足點  
 社會上級下級の差 123-4  
 企業家・自由職業者・労働者 209-10  
 238, 240  
 生活程度 standard of life 4, 397  
 スミス 9  
 マルサス 10-1  
 リカード 12, 13註  
 一の定義 375  
 一上進 第六編第十三章  
 一と労働組合 401-22 (第六編第十三  
 章七—一〇)  
 労働人口一の低下 472  
 成功  
 一の不確實と實質收入 104-6  
 聖クリソストム 164註  
 生産 production  
 純—總額 45

法則 337  
 法則(ミル) 451  
 労働(ウェブ) 409註  
 消費の相關 45, 457-9  
 消費の關係(ミル) 418-9  
 消費・信用の瓦解の相關 420-2  
 階梯 83  
 目的としての人間 143

生産物  
 純一(その項)  
 結合一(その項)  
 總一 44, 255  
 餘剰一 280註  
 曲線(曲線を見よ)

生産費 cost of production  
 實質一 320  
 一と分配 46  
 参考-費用・直接費・間接費・生産失費

生産方法  
 迂回的(ボエーム・バーゴルク)  
 162註  
 工業一 342  
 農業上の工業的一 300-1

生産因素 factor of production 47  
 一の能率 85

生産過程 process of production  
 新一 345  
 迂回的(ボエーム・バーゴルク)  
 一完成者 82

生産力  
 最終一(ホブソン) 32註  
 限界一(ホブソン) 39註  
 労働の限界一 61

生産性 productiveness  
 絶對的一 260  
 土地の一 353  
 資本の一 157註  
 資本の差別一 474

資本労働の一 474

生産者地代 producer's rent  
 (生産者餘剰を見よ)

生産者餘剰 producer's surplus 51,  
 246, 253, 255-6, 286註  
 フィジオクラット 260  
 アダム・スミス 260  
 リカード 261-3  
 土地の眞正一 257  
 土地一 第六編第九章, 309, 311  
 人口減少・生活低下と一 472-3  
 一の實質價值 258  
 一の生産物價值 258  
 非凡能力と一 150-4 (第六編第五章  
 七), 257  
 俳優の一 242  
 労働者餘剰 465-6, 469  
 労働者餘剰と準地代の別 467-8  
 貯蓄者餘剰 465  
 待望者餘剰 468, 469  
 特殊餘剰 469  
 土地餘剰の特質 463

生産失費 expenses of production 34  
 正常一 144, 232  
 限界正常一 231  
 物的財の一と人間の一の負擔力の  
 差 118-9  
 一としての運送失費 474-5

生産要因 agents of production  
 人的一と物的一との差 117-9  
 英蘭の進歩と一の労働價值 353-9  
 (第六編第十二章六-八)

静止  
 一状態 stationary state 4, 149, 150  
 一的 244, 287, 363註

生存競争  
 分配と一 4  
 企業家の一 119, 187-90, 198

積算

一値 accumulated value 125註  
 初期支出の一價值 225註

石炭

近代文明への三大奉仕 351-2

専門的

一訓練 126  
 一熟練 141, 206  
 一才幹 205

セス cesses (印度オリッサの) 278註

社會

現存一制度 190  
 一組織と雇用分野 333  
 一經濟的有機體 423  
 一共同體 381, 389  
 一上層下層の子の教育 120-1  
 一上級下級の生活發足點 122-4  
 一改造論者の生活繪畫 442-3  
 一的疾患に對する忍耐と性急 443-4

社會主義

作業の愉快 50  
 一者とミル 450  
 一者と不平等撤廢 425

奢侈

一品 22, 331, 336, 339, 340註, 342  
 355, 378, 437

慣例的一品 58

資本 capital

一般 180  
 物的一 239, 245, 360  
 非物的一 231, 239  
 人的一 318-9, 360, 367  
 特化 specialized一 244  
 流通 circulating一 36  
 固定 fixed一 36(その項)  
 固定流通一量と利潤率 217-8  
 廣義の一 460  
 狹義の一 461

營利 trade一と貨銀 460-3

一の逐次充用分 254-5  
 一限界利用の遞減 359  
 一投下 35  
 一の能率(テューネン) 41  
 一の長期短期貸附 173註, 178-9  
 自家一と借入一 198-202 (第六編第  
 七章五)  
 分配論上に於ける土地との差 65-8  
 (第六編第二章五)

資本價值 capital value

改良の一 147

資本の需要供給

資本需要と利率 36-9  
 資本の總體需要 36  
 資本一般の需要 34-9 (第六編第一章  
 八)

資本の需要供給關係 155

一の蓄積 157-9

一増加 357-9

一の移動 177-8

一流出 381, 387, 394-5, 396, 411

新國への一流入 335-40

資本理論

一發達の連續性 160

スミス 160

リカード 160, 161

ボエーム・バーゴルク 161-2註

資本主義

一的農業家 298註

資本と労働(労働と資本を見よ)

市場

收入一率 106

短期貸附一 181-2

一變動 233

一からの遠近と地代 161註

新世界生産物の一 334-6

約束の一 335

物産— 341  
市場價格 market price 144, 149  
彫地價值 site value  
總體— 478  
進歩  
工業—と英蘭 344-6 (第六編第十二章四)  
一の貨銀引上力 370-1  
一と雇傭中斷性 371-3  
一と生活程度 第六編第十三章  
社會一の可能性 422-44  
(第六編第十三章一一一五)  
物質的一と建設的想像力 437-8  
一と有害投機 438  
信用 400註  
一と經濟問題 444  
一變動 183-4  
一變動と労働組合標準貨銀 415-22  
(第六編第十三章一〇)  
一膨脹(一八七三年) 201, 359  
一膨脹(一八七三年)と石炭業貨銀 146-7  
一膨脹の限局 418  
失費 expense  
一般— 29註  
純— 264  
生産—(その項)  
養育養成— 402(労働者を見よ)  
一般特殊教育— 100  
失職 415  
唯一の一救済策 418  
出生率  
社會各等級の一 140  
使用  
直接— 458  
間接— 458  
私有財産制  
人間改造と— 442-3

土地一の衡平 468  
自然  
一無價の賜 252  
一支配力 57, 184, 333, 424  
一的資源 333  
商業  
一の膨脹・沈滞期交替 183-4  
一瓦解 420  
地主の一主義 296  
消費 consumption  
直接— 458, 462  
一研究 421註  
效果少なき一方法の全廢 439  
一生産の相關(生産を見よ)  
消費者  
一と生産者資力 457-9  
一一般の資力と雇主一般の資力 458  
消費者餘利 consumer's surplus 464-5  
参考-餘利  
消費財  
直接—生産業 420  
職工長  
對労働者の購買強制 101註  
通常一の收入と貨銀との比較 191-3  
(第六編第七章二)  
一作業と企業者作業との比較 193-6  
(第六編第七章三)  
職業  
一の附帶的不快適 113  
一の不潔と賃銀 113  
食物  
英吉利労働者の一費 343  
一の労働價値の變化 347-9  
證明  
一と數字的例解 475  
消耗 wear and tear  
人の一 50, 100  
労働者の一 147-8

機械の一 35, 44  
固定資本の一 100  
少年  
一高級本性の開発と餘暇 440-1  
小農地 small holding  
一形成妨害 296註  
一と大農地 300-10 (第六編第十章八・九)  
一の總地代 305  
一の社會的必要 306, 307註  
將來  
子の職業選定に關聯する困難 138-9  
所得 income  
正常— 51  
平均— 360, 434  
純— 43-4  
眞正— 44  
總— 44, 99  
全部實質— 99  
全部— 426註  
合成— 244  
結合— 244  
餘利— 51  
家族— 402  
未來— 258  
推算未來純— 181  
年— 447  
土地純— 252-3  
土地一の分析 253-4  
機械一と熟練労働者一の比較(スミス) 136-8  
自然の與ふる一と人口増加 21  
一正用 439  
參考-收入・國民所得・國民分配分  
收益價値 rental value 22  
土地の一 260註  
收穫 return  
正常— 286

全部— 285  
純— 394  
收穫不變 constant return  
一法則 337, 339  
收穫遞減 diminishing return 378  
リカード 470  
一傾向 22, 254-5, 257, 299, 300, 340註, 343, 345  
一法則 337, 339, 340註, 379, 477  
價値で測定する工業上の一 224  
收穫遞増 increasing return  
一傾向 340註  
一法則 33註, 337, 341, 342  
工業上の一 222  
農業上の人力と一法則 300  
手工業者 handicraftsman 144-5  
收入 earnings  
正常— 189, 233, 242, 247註  
一正常水準 139, 251  
一市場率 106  
實質一の評定 88, 97-113 (第六編第三章三-八)  
實質一と純利益 110-3  
作業中斷と實質— 106-8  
貨幣— 110  
時間— 91  
能率—均等の傾向 93-6  
純— 147-8  
補充— 108  
家族— 109  
一力 32, 89  
經營— 28  
努力— 318  
眞正努力— 239  
屠殺業者の一(スミス) 20  
例外的能力の一 367-70 (第六編第十二章一一)  
一變動と市場狀況 149-5)

熟練・能力の特殊— 144-7 (第六編第五章五)  
 各種産業團の一及び能率の相互關係 70-6 (第六編第二章七)  
 利潤とその以外の一との比較 233-43 (第六編第八章六-八)  
 各種産業階級収入變化の原因と本質 357-67 (第六編第十二章九・一〇)  
 生活様式と一率 374  
 一均等化の運動 432  
 収約 intensive  
 一耕作 343  
 測定  
 食物・必需品による労働價格の一 11  
 利率による機械限界利用の一 37  
 真正利子の貨物— 182  
 賃銀支拂高による經營收入の一 220  
 價值による收穫遞減の一 224  
 土地豊度の— 256  
 生活低度の— 259  
 生産費の貨幣— 298  
 一般購買力による生産物價値の一 259  
 實質購買力による賃銀の一 416-7  
 生産者餘剰の生産物測定 257  
 生産者餘剰の一般購買力測定 258  
 餘剰の穀物— 473  
 村落共產體 village community  
 土地所有者としての— 269-70註  
 組織 organization 195  
 一の改善 57  
 一の供給 186  
 一方法の生存競争 187  
 企業— 245  
 租稅  
 土地固有性質稅 253  
 土地改良稅 254  
 一と供給價格 254

都會地特殊價值稅 435註  
 耕作稅 471  
 穀物稅と地代 471-3  
 リカード農業稅說 第六編第十二附錄  
 數學  
 一の用 86  
 推理  
 思考手段 476-8  
 前提中の結論 (マルクスとロードベルトゥス)(ミル) 170, 476  
 スコラ學派  
 利子と賃賃料 165-6  
 蘇格蘭  
 長期耕作權 313  
 T  
 待望 waiting 65, 80, 158, 318, 319, 466, 468  
 一一般 79  
 一者餘剰 468  
 一の生産物 168-9  
 單型化 reduction to one pattern  
 近代的運動の基調 341  
 短期 267  
 相對的— 149  
 參考—長期  
 他の事情等しい限り  
 他の事情等しからず 399註  
 適合 adjustment  
 家族員所得の自然的— 431註  
 參考—需要供給・労働の需要供給・資本の需要供給  
 天賦能力  
 一所得 87  
 天賦素質 205

非凡—收入 209  
 參考—能力・收入  
 轉換部分 interchangeable parts  
 機械制— 340  
 典型的 typical  
 一近代的雇主(バヂョット) 196註  
 一一般賃銀運動 362  
 土地  
 本源的性質 263  
 後得的性質 263  
 一の地味 353  
 一の豊度 richness 255, 256  
 一の實質價値 354  
 都會地農業地の實質價値 353-5  
 一の現在價値 264  
 分配論に於ける—と資本との差 65-8 (第六編第二章五)  
 一純所得(土地地代を見よ)  
 一の固有所得 253  
 一所得の分折 253-4  
 一原性質所得 255  
 一の永久的的の所得 253-4, 255  
 一餘剰の特質 468-9  
 一分有 270註  
 一の位置の利益 253  
 土地地代 第六編第九・十章, 47  
 都市の— 349  
 改良が一に及ぼす結果 260-4 (第六編第九章四)  
 土地耕作制 第六編第十章, 87-8  
 一形式 253, 254  
 古の— 269-82 (第六編第十章一-三)  
 分益農法 282-8 (第六編第十章四)  
 自作小農法 288-92 (第六編第十章五)  
 英吉利制耕作法 283, 292-9 (第六編第十章六・七), 300, 310-6 (同一〇) 314  
 同制に於ける地主分と耕作者分

264-8 (第六編第九章五)  
 大農地・小農地 300-10 (第六編第十章八・九)  
 持分耕作 283  
 資本附耕作權制 283註  
 定額地代による耕作權 271註  
 長期耕作權 313  
 地代理論と— 264-8 (第六編第九章五)  
 一契約の不安 127  
 土地所有  
 古代の— 269, 270  
 土地分有 270註  
 土地財産所有者 271  
 土地保有者 271  
 地主 271 (その項)  
 土地所有者 271  
 一と慣習 271-2  
 投下 investment  
 新— 255  
 新資本の限界— 180  
 資本労働の— 231-2  
 統計  
 賃銀— 397, 399  
 生産— 397, 399  
 最低賃銀論と— 430  
 貧民階級賃銀— 434  
 實質賃銀の評定 101  
 工産物農産物の二重計算 222註  
 投機  
 現在産業制度と— 167  
 有害な—は進歩の障害 438  
 特化産業 specialized industry  
 農業と高度— 300  
 特許會社 341  
 富 wealth  
 公共— 357  
 公有— 424

蓄積 - 460, 465  
 一の蓄積 63-4  
 一の不平等 425-7  
 英蘭の一の増殖 357  
 トラスト  
 近代的 - 341  
 取引關係 33註  
 都市  
 農業人口の一流入 308, 364  
 一空氣 316  
 一住宅と家賃 349-51  
 T リカートの農業改良説と都會地 478  
 | 淘汰  
 Y 英吉利耕作制に於ける耕作者 -  
 295-6  
 農業上の自然 - 297, 304  
 徒弟制度 apprenticeship system 126  
 通貨  
 一の本位 184  
 通行税 tolls 276, 277註 278

U

運輸  
 近代的運動の基調 341-2  
 十九世紀後半の代表的産業 373  
 最有力の經濟事實 346  
 文明生活要件との關係 352  
 價值に對する影響 353-4

W

割引  
 將來を一く 119, 136

Y

家 house rent  
 一の變化 349-51  
 都會 - 349  
 本來の - 349, 350  
 屋根部屋親方 garret master 134, 200  
 雇主  
 一の労働者養成の報酬 127-8  
 典型的近代的 - (バヂョット) 196註  
 緩衝機としての - 325  
 一般と消費者一般 458  
 餘剩 surplus  
 一の若干種 第六編第十一附録  
 眞正 - 8註  
 純年 - 37  
 實質 - 472  
 總體實質 - 263  
 穀物 - 262, 471, 472, 473, 474  
 總體穀物 - 262, 474, 475, 477  
 總穀物 - 471-2  
 一價值 22, 23  
 快樂の - 50  
 利得の - 232  
 一所得 240  
 一生産物 280註  
 一の掠奪(マルクス) 16;  
 耕作者 - 255  
 土地 - の特質 468-9  
 特殊 - 469  
 土地永久 - 469  
 消費者 - (その項)  
 生産者 - (その項)  
 労働者 - (生産者餘剩を見よ)  
 貯蓄者 - (同)  
 フィジオクラット 8註  
 餘暇 384, 385  
 實質賃銀との關係 107  
 人工燈火と一の善用 352  
 一の善用と人間進歩 439-41

欲望  
 一と活動 374  
 一程度 371  
 一増加と賃銀 376  
 猶太人  
 倫敦に於けるその職業選擇 112  
 遊離 isolate 339註  
 一された問題 124, 252  
 時間短縮諸結果の - 397  
 有利性 profitableness 118, 236  
 労働の - (リカード) 96  
 有利性限界 margin of profitableness  
 38, 67  
 企業方法の - 204  
 新投下の - 255  
 一の無視 298註

Z

財 goods  
 同型 - 340  
 中間 - (その項)  
 一の賣手買手の奉仕は對當 456  
 財産權  
 古代の - 269  
 殘滓階級 residuum  
 その救済の急務 427-9  
 全部 total  
 一必要 69  
 一費用 94  
 一實質賃銀 133  
 一收穫 285  
 一輸入費用 343

件名索引 Y | Z

三三

II 地人名索引

A

Argyll, Duke of アーガイル  
地主の企業心 295 註  
Aristotle アリストートル 利子 164-5  
Ashley, W. J. アッシュレー  
リカードの労働階級未來観 14 註  
A 『英國領土』 29 註  
C 利子 164 註  
村落共產體 270 註  
Athens アセンズ 352

B

Bagehot バヂョット  
典型的近代的雇主 196 註  
企業界の民主化 201  
生産業の傳統 206, 207 註  
近代的大商業と原始商業の差 207 註  
Bastiat バスティア  
土地の價值と労働 263  
Bengal ベンゴール  
ライヤト 279-80 註  
Bentham ベンタム  
利子 164 註  
Bernhard ベルンハルド  
労働時間の國際的研究 386 註  
三四 Billington ビリントン夫人  
その聲樂收入 368  
Böhm-Bawerk, E. von ボエーム・バ  
エルク  
價値は需要によつて定まる 53 註

賃銀と労働生産費 62 註  
資本・利子論 161-2 註  
Booth, Charles ブース  
労働移動性 142 註  
Brentano, Lujo ブレントナーノ  
労働者の取引上の不利益 135 註  
企業責任負擔者 210 註  
Bruges ブリュージュ 352

C

Cairnes ケアンズ  
賃銀基金理論 453-4  
賃銀基金理論と賃銀鐵則 455  
Cannan キャンナン  
賃銀理論史 459 註  
リカードの農業改良二種別 474 註  
Cantillon カンティヨン  
成年男子養育費 124 註  
Carey ケリー  
土地の價值と労働 263  
Carver カーヴァー  
經濟力の交互作用 62 註  
『機械と労働者』 434 註  
Chapman チャップマン  
アングロ・サクソン労働者の労働時  
間短縮 388 註  
Clark クラーク  
労働の餘利利得 466 註  
Cole コール  
結果拂賃銀 384 註  
Comte コント  
一とミル 450  
人間本性の可變性 450

Cornwall コーンウォール  
鐵山労働者賃銀 241-2  
Cunningham カニングガム  
中世教會と利子禁止 166 註

E

Engel エンゲル  
『労働の價格』 124 註

F

Farr ファール  
成年男子養育費 124 註  
Fisher フィシャー  
利子 183 註  
Florence フロレンス 352  
Foxwell フォクスウェル  
雇傭不規則性 108 註

G

Giffen, R. G. ギッフエン  
英蘭の地代 355 註  
平均賃銀 363 註  
Gossen ゴッセン  
限界報償率と餘利 466 註

H

Hegel ヘーゲル  
一とマルクス 170  
Higgs ヒッグス  
佛國分益農の伸縮性 287 註

Hill, Octavia ヒル嬢  
住宅調査委員會 350 註  
Hobson, J. A. ホブソン  
限界生産力 31-2 註  
Howell ホウエル  
労働者の取引上の不利益 135 註  
Hume, David ヒューム  
賃銀理論 7  
Hunter, W. W. ハンター  
印度の平均利潤率 236 註  
オリッサのセス 278 註

J

Jessop ジェソップ  
總利子 174 註  
Jevons, W. S. ジェブンス  
利子理論 38 註  
テューネンの利率論との比較 41 註  
一とソーントン  
限界報償率と餘利 466 註

L

Lambelin ラムベラン  
佛國分益農 287 註  
Lassalle ラッサール  
リカードの賃銀鐵則 14 註  
Lecky レッキー  
對労働者の購買強制 103 註  
Leroy-Beaulieu ルロア・ボーリュ  
佛國企業成功割合 237-8 註  
佛國分益農 287 註  
Leslie, Cliffe レスリー  
賃銀 91-2  
高利 164 註

地人名索引 E-L

三五

企業の實狀 208  
—とソートン 452 註  
List リスト  
土地の價值と勞働 263  
Longe ロンヂ  
—とソートン 452

地  
人  
名  
索  
引  
L  
|  
P

M

Maitland メイトランド  
中世土地耕作權 273 註  
Malthus マルサス  
賃銀理論 10-1, 15, 96  
地主の繁榮 354  
リカード評 470  
Marshall, A. マーシャル  
—の答 282 註  
經濟學要論 402 註  
産業經濟學 421 註  
經濟騎士道の社會的可能性 426 註  
産業組合年報上の論文 450 註  
産業報酬會議報告中の論文  
450 註  
Marx マルクス  
價值論 168, 169, 170,  
—とヘーゲル 170  
McCulloch マカロック  
賃銀理論 13 註  
Mill, J. S. ミル  
經濟學上の人間的分子 14, 450, 451  
賃銀理論 14-5, 15 註  
快適程度 15  
リカード非難 15 註  
生産費といふ言葉 36 註  
資本一般と勞働一般 83  
勞働の資本依頼 450-3  
—とコント 450

三  
六

人間本性の可變性 450  
未解決問題 450  
分配法則 450-1  
—とソートン 452  
論説集 452  
リカードとの推理力の比較 476  
充用分收穫の等量増加と比例増加  
475-8  
生産物直線 477

Millet ミレー  
御告の祈の報償 189  
Milton ミルトン  
『失樂園』の報償 189

N

Newcomb ニウカム  
經濟學 460  
Newmarch ニウマーチ  
物價史 311  
Northumberland ノーサムバーランド  
貨幣拂なき年賃銀 99 註

O

Orissa オリッサ  
—のセス(ハンター) 278 註

P

Palermo パレルモ  
雇傭中斷性 372 註  
Petty, W. ペティ  
穀物といふ言葉の意味 14 註  
『人間の價值』124 註

地代法則 265-6 註  
Porter ポーター  
英蘭の地代 355 註  
Prothero プロセロー  
農業上の守舊 299 註  
Pusey ピュージー  
下院委員會(1843年)273-4 註

R

Ricardo, D. リカード  
賃銀理論 11-4, 96 註  
賃銀鐵則 12  
—獨逸社會主義者の説 12  
—獨逸經濟學者の説 12 註  
—ロシアの説 12 註  
賃銀最低率 15 註  
勞働階級未來觀 14 註  
『著しい場合』13  
條件省略 13-4, 14 註  
用語 96 註  
生産費高調 46-7  
資本理論 160, 161  
彼とマルクス 169  
生産者餘利 286 註  
土地餘利 261-3  
その地代理論と印度・愛蘭  
309-10 註  
地代理論の眞髓 309 註  
その時代の限界耕作 343-4  
地主の繁榮 354  
農業税農業改良説 第六編 第十二附  
録  
暗黙の假定 470  
對スミス批評 470  
その理論と活事實 470-5  
直接結果終局結果 470, 473

長期短期 473  
古今無比の推理力 476  
その天才 476  
生産物直線 477  
總生産物曲線についてミルとの差  
477

Rodbertus ローデルトウス  
價值論 168, 169, 170  
『増餘』169 註  
Rogers ローヂャース  
英吉利土地耕作制 283 註  
農業賃銀推算 347  
Rousseau ルーソー  
その一派と勞働者 448

S

Schmoller シュモラー  
賃銀進化史 365 註  
出來高作業 384 註  
Seeböhm シーボーム  
村落共產體 269-70 註  
Senior シーニオール  
リカードの用語 96 註  
大小資本企業利潤率の差 212-3 註  
Shaftsbury シャフツベリー  
住宅調査委員會 350 註  
Smith, A. アダム・スミス  
分配理論 9-10  
賃銀理論 9-10  
實質賃銀・名目賃銀 97-8  
屠獸業者收入 110  
奴隷勞働 118 註  
成年男子養育費 124 註  
機械所得と熟練勞働所得との比較  
136-7  
大小企業利潤率の差 212

地  
人  
名  
索  
引  
P  
|  
S

三  
七

危険 220 註  
 土地生産者餘利 260  
 その時代の雇主團結 407  
 リカードの評 470  
 Smith, H. L. スミス  
 労働移動性 142 註  
 Spicer, Albert スパイサー  
 濠洲の羊飼の割合 29 註  
 Sturge, W. スターヂ  
 英蘭農業地代 355 註

T

Taussig タウシグ  
 資本と貸銀 459 註  
 Thompson, William タムソン  
 價值論 168  
 Thornton ソートン  
 一とミル 452  
 Thünen, von テューネン  
 資本の能率 41, 41 註  
 利率 41 註  
 ジェブンスの利率論との比較 41 註  
 資本最終充用微量 41 註  
 その特色 41 註  
 收穫遞減一般法則 41-2 註  
 經濟原理の取扱方 42 註  
 労働賃銀自然率 2 註  
 資本の労働代用 43 註  
 Tooke トーク  
 農業季節の平均 311  
 Turgot テュールゴ  
 賃銀理論 6-7 註

V

Vanderbilt ヲンダービルト  
 その節用力 369

W

Wakefield ウェークフィールド  
 人口稀薄地の人口増加 316  
 Walker, F. A. ウォーカー  
 賃銀理論 15  
 産業將校 206 註  
 利潤 242-3 註  
 無利潤雇主 242 註  
 賃銀基金 458-9 註  
 Walker, J. H. ウォーカー  
 工業家成功割合 237 註  
 Webb, S. and B. ウェブ夫妻  
 限界生産物と賃銀 408-9 註  
 労働組合の機械反抗 412-3 註  
 Wells ウェルス  
 企業成功者の割合 237 註  
 Wilkinson ウィルキンソン  
 組織 195-6 註  
 Worcester ウォーセスター  
 同地工業家成功割合 237 註

Y

Young, Arthur ヤング  
 所有の魔力 289



第一版第一刷  
大正十四年九月十八日印刷  
大正十四年九月二十日發行

經濟學原理 (分冊四)  
定價參圓七拾錢

版權  
所有

譯者 大塚金之助

發行者 山本美

印刷者 石川金太郎

東京市芝區榮町一丁目一番地  
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

發兌

改 造 社

東京市芝區榮町一丁目一番地  
(電話東京八四〇二番)  
(電話高輪四九九三番)

穂積 重遠著	離婚制度の研究	價一〇〇 送料三六〇	河田 嗣郎著	農村問題と對策	價二〇〇 送料二〇〇
平野義太郎著	法律における階級闘争	二・五〇	河田 嗣郎著	農政四十三講	二・五〇
高田 保馬著	階級及第三史觀	二・八〇	松本亦太郎著	心理學講話	四・二〇
福田 德三著	社會政策と階級闘争	三・〇〇	桑田 芳藏著	グントの民族心理學	三・五〇
福田 德三著	ホルシエケイズムの研究	二・九〇	植田 壽藏著	藝術哲學	二・七〇
福田 德三著	社會運動と勞銀制度	二・五〇	朝永三十郎著	カントの平和論	一・五〇
孫田 秀春著	勞法總論	二・六〇	板垣 鷹穗著	新カント派の歴史哲學	一・五〇
小泉 信三著	價値論と社會主義	三・〇〇	勝部 謙造著	デイルタイの哲學	一・八〇
マールシヤル著	經濟學原理	三・五〇	大山 郁夫著	現代日本の政治過程	二・五〇
山口正太郎著	中世寺院法と經濟思想	一・五〇	森戸 辰男著	思想と闘争	二・〇〇
カイヨール著	民衆の苦悶	一・三〇	アイツゲン著	無産階級の哲學	二・五〇
龜井貫一郎譯		一・一六	山川 均譯		二・二〇
末弘嚴太郎著	農村法律問題	二・五〇	ステイネル著	自我	二・八〇
末弘嚴太郎著	嘘の効用	二・二〇	辻 潤譯	日本社會史	二・五〇
未弘嚴太郎著		二・二〇			二・四〇

530
128

終